

長崎實錄大成 第三卷 近國道法並當表藏屋敷附異船來津之節諸家陣所之事 一二二

島原侯藏屋敷 肥前島原 一松平大和守 諫早通海陸十八里 惣船路三十八里 大黒町惠美酒町之内 藏屋敷

陣所 戸町浦小菅 伊良林郷之内 禪林寺 本籠町 酒屋町

松浦氏藏屋敷 肥前平戸 一松浦肥前守 時津通海陸二十六里 惣船路三十五里 大黒町之内 藏屋敷

陣所 平戸小屋郷 福濟寺塔頭 靈鷲菴 西中町惠美酒町之内 藏屋敷 穎川某居屋敷 藤田某掛屋敷

大村侯藏屋敷 肥前大村 一大村新八郎 伊木力通海陸五里 惣船路二十五里 藏屋敷

陣所 岩原郷 本蓮寺 大村領分 戸町浦 同上 大浦

五島侯藏屋敷 肥前五島 一五島大和守 西濱町惣船路四十八里 西濱町之内 藏屋敷

領内浦々爲警固在城也當表ニハ名代差越ル。

小城侯用場所 肥前小城 一鍋島加賀守 伊良林郷之内 大音寺

用場所 高野平郷之内 文珠院

蓮池侯用場所 肥前蓮池 一鍋島攝津守 用場所 高野平郷之内 文珠院

久留米侯藏屋敷 筑後久留米 一有馬中務太輔 諫早通海陸三十二里 惣船路 西濱町之内 藏屋敷

柳川侯藏屋敷 筑後柳川 一立花左近將監 諫早通海陸二十七里 惣船路 浦五島町之内 藏屋敷

陣所 肥前領之内 香焼島之内 立神浦

小倉屋敷 豐前小倉 一小笠原左京太夫 大村通惣陸五十七里 惣船路八十七里 新町之内 藏屋敷

陣所 大村領之内 波ノ平 畠地百五十間四方 鍋蓋濱邊

奧平氏 豐前中津 一奧平大膳太夫 大村通惣陸六十二里 惣船路 伊良林郷之内 長照寺

用場所 伊良林郷之内 長照寺

中川氏 豐後竹田 一中川修理大夫 諫早通海陸四十六里半 伊良林郷之内 延命寺

用場所 伊良林郷之内 延命寺

白杵侯 豐後白杵 一稻葉能登守 島原通海陸五十九里半 長崎村之内馬場郷

用場所 長崎村之内馬場郷

杵築侯 豐後杵築 一松平對馬守 諫早通海陸七十二里 夫婦川郷之内 春徳寺

用場所 夫婦川郷之内 春徳寺

府内侯 豐後府内 一松平長門守 諫早通海陸六十四里九町 浦上村之内

用場所 浦上村之内

正保四年異船來津之節

上使

伊豫松山城主松平隱岐守
同國今治城主松平美作守

被差越之

右兩家共ニ異船來留中男神女神船橋ノ東西ニ在陣有之。
其外大名諸家ヨリ爲見廻使者被差越之用達ノ者宅ニ止宿有之。

湊渡並石錢取立之事

湊渡及び石錢取立

一明和三丙戌年被仰出趣長崎ハ唐阿蘭陀交易ノ地ニシテ諸國通船數多令往來
處年々川上ヨリ土砂押シ流湊内遠淺ニ相成リ以後通船ノ差障ニ可相成由ニ
付今度湊渡被仰付土砂ハ稻佐向地所々ニ捨サセ追テ新開出來ノ積リニテ捨
場ノ地ハ御代官支配ニ被仰付之
但爲加役乙名二人會所役二人普請方一人波戶場役一人手附筆者四人小使
四人。

一右湊方爲入用諸國廻船積荷物ノ高ニ應シ一石ニ付三錢宛石錢被令差出尤近
浦小船茶船等ハ一枚帆五石ノ積リニテ帆數ニ應シ可取立旨但湊口ニ番人差
出シ出入共ニ相改石錢差出セシ船ニ番所ヨリ切手ヲ可相渡其船出帆ノ節右
切手可差戻旨當戊三月朔日ヨリ取立方相始ル。

長崎實錄大成 第四卷

田邊八右衛門茂啓編輯

神社經營之部

諏方三所大明神社

正一位諏方三所大明神社 寛永二乙丑年建

境内壹萬坪餘

西山郷之内

長崎鎮守諏方大明神社古昔何處ヨリノ勸請ト云事詳ナラヌ。元龜天正ノ頃南蠻人此地ニ着船シ種々方術ヲ以テ諸人ニ切支丹ノ邪法ヲ授シカバ愚民共彼邪教ニ深ク立入り遂ニ長崎境内ノ神社悉ク破却シ蠻國ノ邪祠ヲ造立シテ恣ニ横行セリ。干茲肥州佐嘉ニ青木氏金重院賢清ト云修驗者先祖ハ草野松浦兩家ノ門族タリシニ故有テ役小角ノ法ヲ學ヒ修驗道ヲ勤行有シニ

其靈驗ナル事恰モ神ノ如シト也。或人語テ曰。同州長崎ノ地ニ南蠻人着船シテ諸人ニ邪宗門ヲ勸メ入。神社ヲ沒倒シ。其暴惡ナル事尤勇猛也。賢清聞之曰。日本ハ神國タリ。我彼地ニ行テ邪教ノ輩ヲ悉ク退治シ。神道ヲ再興成シメント大ニ忿激ヲ發セリ。家族朋友等無用タルヘシト云シニ。賢清曰。我苟クモ神國ノ民トシテ神忠國忠ヲ遂ン事何ノ難キ事有ン哉ト。頃ハ元和九年賢清長崎ニ來リシニ宿ヲ求レドモ應許スル者無之。仍テ郷中ニ邪教ニ與セサル者有リヤト尋シニ。西山村ニ山留孫左衛門ト云者又神道ニ志アル者兩三輩アリト。則西山村ニ尋ネ行テ孫左衛門ニ逢。神道再興ノ趣旨ヲ演說セシニ。孫左衛門大ニ喜ヒ。同志ノ宗巴森城等ヲ招テ互ニ論談シ。古昔ノ傳聞ヲ語テ曰。長崎鎮守諏方大明神社ハ今ノ諏方町磨屋町邊ニ鎮座在セリ。住吉社ハ小島村ノ内ニ在セリ。森崎大權現ハ西御役所松樹ノ地頭ニ在マセリ。然ルヲ天正文祿ノ頃切支丹共兇惡ノ餘リ。神社ヲ悉ク燒失ヒタル故。古代ノ緣起等モ無之ト。仄ニ聞。當社大明神ハ薩州ヨリノ勸請也ト。邪徒暴逆ノ砌大浦ノ地ニ白衣ノ老翁現レ給ヒ。惡執ノ輩吾國神ノ在ス事ヲ知ラス。謾ニ神社ヲ毀テ穢ス。故暫ク薩州ニ歸ン事ヲ欲スト。則今大浦ノ地ニアル諏方社其舊跡也。又其後

前代神主公文九郎
左衛門

野母浦ニ老翁出現シ給ヒ。吾ハ是長崎ヨリ來リタリ。故有テ薩州ニ渡ルヘキ便船ヲ乞給ハントテ。忽巧トシテ其容ヲ不見ト。賢清聞之不堪。感涙曰。我此時ニ當テ粉骨ヲ碎キ偏ニ神道再興ノ功ヲ成就スヘシト。大ニ其志ヲ勵セリ。且ツ前代ノ神主ヲ尋ルニ其末葉九郎左衛門ト云者大村ニ有之由。賢清則大村ニ行テ件ノ九郎左衛門ニ對面シ。神社再興ノ志ヲ演說ス。九郎左衛門大ニ歡喜シテ曰。我先祖以來神社ヲ保護スト云ヘドモ。數萬ノ邪徒ニ敵對シ難ク神社ヲ沒倒セシムル事心外ノ至リ也。賢清誠心ヲ盡シテ。神道再興有ヘシト神社讓リ狀一通ヲ授タリ。賢清是ヲ領シ。仍テ京都ニ登リ。吉田兼英卿ニ拜謁シ。長崎表神社再興ノ旨趣ヲ願ヒ訴フ。其節雜掌鈴鹿采女正ヨリ返書有テ右ノ志願御許容有之。則寛永元年七月御奉行長谷川氏ニ訴ヘ出ルハ。某ハ金重院ト云修驗者也。京都吉田兼英卿ヨリ當表神社再興ノ許狀ヲ賜ルノ條。可然社地ヲ可被寄附。鎮守ノ神社再興ノ功ヲ遂ヘシト也。長谷川氏甚感心ノ會釋アリ。吾歸府之節江都ノ執事ニ相達スヘシトテ。翌二乙丑年長谷川氏ヨリ御代官末次平藏ニ御下知有テ。社地ヲ可寄附旨被仰付。則社地ヲ被相渡ニ付。小社ヲ造作セントスルニ。邪教ノ殘黨障礙ヲ成シテ。商人ニ材木等ヲ賣シメズ

賢清京に上る
吉田兼英卿

長崎奉行長谷川權
六の盡力

再建ニ邪宗徒

元 諏 方

松 の 森

金重院妻子を伴ひ
長崎に引越す
長子寶乘院龍尊次
男伊兵衛

大工日雇ノ者ヲ來シメズ。依之又傳ニ人ヲ頼テ材木ヲ買求メ、他國ヨリ來シ
大工日雇ヲ招テ、小祠一字ヲ造立シ、三社ヲ同殿ニ勸請シ奉レリ。松森地是也
但此社地當年ヨリ慶安元年マテ廿四年ナリシニ、社地狹隘ナル故依願玉
園山ノ地ヲ開キ、段々地形ヲ築立、移遷成シ奉レリ。唯今迄ノ地ヲ元諏方ト
唱フ。然ルニ明曆二年元諏方ノ地ニ天滿宮社ヲ移シ奉リ、其後此地ヲ松之
森ト稱セリ。

一寛永三年金重院妻子ヲ佐嘉ヨリ當表ニ引越セリ。長子寶乘院龍尊十八爲社
僧兩山ノ頭巾頭ト成リ、次男伊兵衛爲神主、始テ神樂ヲ奏シ神事ヲ修ス。然レ
ドモ市中邪執ヲ離サル者多クシテ神社參詣ノ者甚稀ナリ。或ハ諍論ニ事寄
セ妨ヲ成ントスル者多カリシニ、金重院英氣人ニ勝レ勇力群ヲ超ヘ、辨舌水
ヲ流スカ如ク、其聲巨雷ノ如ク、眼八咫ノ鏡ノ如シ。弓勢剛強ニシテ鏃鐵反弦
ヲ延シ、鷲ノ羽ヲ以テ矯之故、放ツ時ハ弦音數町に響キ、見聞者肝ヲ冷シ、舌ヲ
振フ。且ツ長子寶乘院モ弓勢ノ強キ事父ニハ不及ト云ヘドモ、八分ノ弓ヲ射
十三束餘ノ矢束ニテ暗夜ニ走獸ヲ射ルニ、百タヒ發テ百タヒ中ル。見ル者終
ニ空箭ヲ見ル事無之是ヲ以テカヲ以テ爭ヒ難キ事ヲ知レリ。

再興當時の有様

金重院京都へ上る

長崎奉行榊原氏同
神尾氏敬神訓諭

寶殿拜殿造營、舊
社を末社とし春
日、祇園、天滿宮
三座を勸請す
神輿二社分出來

一慶長以來邪教嚴禁ニシテ當表ニ寺院十ヶ所餘開創セシメ、改宗ノ者共各其
宗旨ニ隨テ寺請判ヲ出ス故、自然ト佛事參詣ノ者有之ト云ヘドモ、是マテ邪
執ノ愚民共神道ヲ尊敬シ奉ル事ヲシラス。神社拜禮ノ者甚稀ナリト也。
一寛永九年金重院京都ニ登リ吉田兼英卿ニ拜謁ス。仍テ神道中興ノ志ヲ感シ
給ヒ則許ヲ賜リ、金重院爲宮司、男宮内大輔永忠爲神主、吉田門弟ト成ル。
一同十一年榊原氏神尾氏在勤之節市中ニ被相觸ハ、是迄諸人國禁ニ隨テ表向
改宗スト云ヘドモ、内心邪執ヲ離レサル故、神社參詣ノ者稀ナリ。然レドモ人
々心底ノ虚實分難ケレハ、所詮町外ニ柵ヲ振リ外廻リヲ堅メ地下人共不殘
追込燒殺シ、當表ニハ近國ノ人民ヲ招キ、我朝ノ神德ヲ崇奉リ、鎮守ノ神社祭
禮等ヲ執行ハシムヘキ旨被相觸之處、地下人共大ニ悔ミ歎キ何卒御赦免ニ
テ助命被成下ナバ、自今以後神社ヲ尊敬シ奉リ、御祭禮等ノ節諸人皆々供奉
仕タキ旨願訴フ。依之七月廿六日地下人共是迄ノ罪科ヲ宥免可有之條、向後
專ラ神德ヲ尊信シ奉ルヘキ旨相觸ラル。金重院大ニ歡喜シテ是神道興隆ノ
時節到來セリトテ、寶殿拜殿ヲ造營シ、舊社ヲ末社トシ、春日、祇園、天滿宮三座
ヲ勸請ス。神輿二社出來ス。三社ヲ造ラシムレドモ、祭禮迄ノ日數少ク、一社ハ

本社並御旅所に注連引祭禮諸式整ふ

藥師寺久左衛門邸内に一社を建立す

御能 石の大鳥居立つ

畑一反廿三步寄附

二ノ鳥居

出來セサル故畧之神寶ハ皆三社ノ分出來ス。仍テ御旅所神幸ノ事ヲ相願フ則大波戸之地可然旨被仰付之。

一同年九月朔日御本社御旅所ニ注連ヲ引同六日丑刻神輿ノ内ニ御遷座成セラレ惣町ヨリ七日ニ拾一町先供ヲ相勤諸藝ヲ成ス。午刻神輿渡御成ル。長崎村ノ農民共昇之。未刻御旅所ニ着座成セラル。八日御旅所ニ御逗留成ル。諸人參詣群集ヲナス。九日ニ拾町先供ヲ相勤。午刻神輿還御成テ御本宮ニ遷座有之。湯立神樂流鏑馬等御祭禮ノ儀式無殘處相調之。

但此日藥師寺久左衛門祭禮ノ事ニ專ラ出精シ歸宿セシニ自宅ニ於テ靈驗ノ事有之。仍テ藥師寺屋敷地内ニ一社ヲ建立シ、毎年九月十一日祭禮有之。

一同十二日於神前御能有之。御奉行所ヲ初諸役人棧敷ニ勤仕ス。則恒例ト成ル一寛永十四年石ノ大鳥居建。正月十九日ヨリ石匠事始リ、八月成就シ、組建ル節惣町中ヨリ人夫二千入差出ス。

一同十六年畑一反廿三步諏方社内ニ寄附アリ。一同二年石ニテ建直ス。

替地

遷宮

神宮寺の稱號 地所寄附

寶殿新築正遷宮

松田氏鐘一口寄附

平戸助左衛門寄附

拜殿建末次平藏寄附

神事御供町六年廻

祝儀能

一正保四年是迄ノ社地狹隘ニシテ祭禮之節不辨ナル旨替地ヲ奉願之處上聞ニ達シ新ニ玉園山ノ地ヲ賜ル。仍テ十一月九日造營事始リ、山崖ヲ穿テ地形ヲ均シ、翌慶安元年八月假御殿ヲ建、舊地ヨリ今ノ地ニ遷宮有之。一此節依願神宮寺ト云寺號御免有之。一慶安三年畑九反三畝八步町地九畝廿一步外ニ野地五千六百九拾三坪寄附有之。

一同年十一月九日寶殿ノ新初、同四年八月十九日造營成就シ正遷宮有之。一同四年當社其節ハ兩部ニテ神宮寺タリシ故松田氏某鐘一口寄附セリ。其後唯一神社ニ成リ此鐘引除之。

一同年石ノ水盥一ツ平戸助左衛門寄附之。

一承應二年拜殿建。但末次平藏寄附之。

一御神事御供町寛永十一年ヨリ七日十一町相勤、九日十町相勤、是迄一ケ年廿

一町ニテ三年廻リ相勤之處、明曆元年ヨリ七日九日兩日一町宛ニテ相勤故

六年廻リト成ル。

一明曆二年四月十二日上様御痘瘡御快氣爲御祝儀於當社御能有之。

青木永安上京

一萬治元年永忠長子永安上京シ吉田兼連卿ニ謁シ三社御神體之御箱安鎮兼連卿御符也永安相續之許狀ヲ賜ル。

社家位階

一同年社家位階之儀傳奏ヲ以テ勅聞ニ達シ蒙

神道大法傳授

勅許正六位下ニ被叙之。卜部兼從卿ヨリ神道ノ大法傳授有之。同閏十二月火

朱印下賜

祭及ヒ清祓等ヲ傳ヘラル。翌二年二月十九日於當社太元火祭ヲ修セラル。

一寛文九年御朱印下シ賜ル

御朱印之寫

一肥前之國彼杵郡長崎之内諏方大明神社境内

山林竹木諸役等免除永不可有相違者也神事

祭禮無怠慢可勤仕者也

一寛文九年二月廿日

一同十年御朱印爲頂戴永忠永安父子江府參上拜禮相勤時服二ツ拜領被仰付

以後此例ト相成ル。

一同十二年是迄惣町六拾三町ニ分シ處ケ所數多キ町ヨリ相願ニ付拾四町相

分リ七拾七町ト成ル。依是御神事御供一ケ年拾一町宛ニテ七年廻リニ相勤

永忠、永安父子江
戸參禮

神事御供七年廻リ
さなる

之。

一延寶六年拜殿舞臺廻廊普請初リ翌年成就ス。

一同八年大門矢大臣、踊場塀成就ス。

一天和三年神宮寺ノ寺號相止唯一之神社ニ仕リ度旨願之通被仰付之。

一同年八月普請成就シ御本社ヲ上壇ニ遷シ奉ル。

一貞享四年末社再興有之。二月二日新初四月廿八日遷宮成ル。毘沙聞ヲ字賀神

ニ改、藥師ヲ少名彥根命ニ改、大黒ヲ太田ニ改、西ノ宮ハ如元始テ大已貴尊ヲ

勸請ス。

一元祿三年三月九日森崎大權現御祭禮始ル囉子三番能五番有之翌年ヨリ同

日能六番有之。

一同四年唐銅ノ燈籠一對高木永貞寄附ス。

一同六年近衛關白基熙公御筆ノ額惣門ニ掛之。

一同年青木作之進蒙 上意神主職被仰付之。同年上京シ吉田殿神道御相傳有

之。青木若狹守從六位下權神主藤原永春ト號ス。

一寶永二年是迄九月御祭禮ノ節諏方住吉二社御旅所ニ渡御有之處、當年ヨリ

拜殿舞臺廻廊普請
大門、矢大臣踊場
塀成就

神宮寺號止む普請
成就、本社を上壇
に移す

末社再興

森崎大權現祭禮始

唐銅の燈籠

近衛公筆額

青木永春上京

江府御窺於京都

勅聞ヲ經テ御免許有之。九月御祭禮ノ節三社共ニ御旅所渡御有之。

一 但翌年ヨリ三月九日森崎御神事ノ御能相止。

一 享保二年本社御普請成就。八月廿七日正遷宮有之。

一 同四年二ノ鳥居建直ル。町々ヨリ人夫寄進アリ。

一 同八年七月五日於京都神主兵部少輔奉願。

一 勅許有之正一位之神位被蒙之。

一 同九年吉田兼敬卿御筆之額拜殿ニ掛之。

一 同十三年八月五日於當社大納言様御瘡瘡御快氣爲御祝儀御能有之。

一 同十五年九月御神事雨天ニテ相延。九日神輿渡御十一日還御成セラル。

一 同十六年石ノ水盥一ツ三宅周防守寄附有之。

一 同十七年五月五日於當社大納言様御婚禮爲御祝儀御能有之。

一 元文元年九月御神事雨天ニテ相延。九日神輿渡御十一日還御成セラル。

一 同三年三月廿二日於當社若君様御誕生爲御祝儀御能有之。

一 同四年九月如例七日神輿渡御。九日十日雨天ニ付十一日還御成セラル。

三社共に渡御始

本社普請

二ノ鳥居建直る

正一位の神位 勅許

吉田兼敬筆額

祝儀能

神事雨天のため延ぶ

三宅周防守寄附

祝儀能

神事雨天順延

祝儀能

祝儀能

神事能四番宛にな

る

神事雨天日延

松浦河内守寄附

神事雨天日延

本社普請正遷宮

祝儀能

神事雨天日延

祝儀能

神事雨天日延

住吉名越祓江府忌

中に付日延

神事能九月十一日

になる

一 寛保二年四月廿二日於當社三御所様御官位御昇進爲御祝儀御能有之。

一 同三年ヨリ御神事御能四番宛ニ相成ル。

一 延享元年九月如例七日神輿渡御九日十日雨天ニ付十一日還御成セラル。

一 寛延二年石ノ水盥一ツ松浦河内守寄附有之。

一 同年九月御神事雨天ニテ相延。九日神輿渡御十一日還御成セラル。

一 寶曆元年九月御本社普請成就シ正遷宮有之。

一 同三年四月十三日於當社大納言様御瘡瘡御快氣爲御祝儀御能有之。

一 同四年九月御神事雨天ニテ相延。九日神輿渡御十一日還御成セラル。

一 同五年三月十一日於當社大納言様御婚禮爲御祝儀御能有之。

一 同年九月御神事雨天ニテ相延。九日神輿渡御十一日還御成セラル。

一 同十年四月廿七日於當社兩御所様御官位御昇進爲御祝儀御能有之。

一 同十一年當社住吉名越祓六月中江府御忌中ニ付相延七月七日八日令修之。

一 同年ヨリ當社御神事御能九月十一日ニ相成ル。但例年十二日ナリシニ江府

御忌日ニ付如此。

一同十二年八月十二日御宿繼到來去七月廿一日

主上崩御に付大門を閉す

主上崩御之旨ニ付今十二日ヨリ九月三日迄當社大門閉ラル祭禮諸式ハ恒例ノ通タリ

祝儀能

一同十三年十一月朔日於當社若君様御誕生爲御祝儀御能有之。

祝儀能

一明和三年九月十六日於當社大納言様御官位御任叙爲御祝儀御能有之。

踊町の内四町類焼に付來年踊町四町當年に繰上げ

一同年二月市中火災ニテ當年踊町ノ内四町類焼ニ付踊仕立難相叶由ニテ來亥年踊町ノ内四町當年ニ繰越相勤シム。第十六卷ニ見ヘタリ

來年踊町の内八町當年に繰越

一明和四年御神事踊町來子年當リ番ノ内八町當年ニ繰越相勤シム。第十六卷ニ見ヘタリ

一同年九月如例七日神輿渡御九日十日雨天ニ付十一日還御成セラル。

社殿間數

本社 入二間半横三間半 祝祠屋 入一間半横七間

渡殿 入七間横一間半 弊殿 入二間横三間

拜殿 入三間横五間 御祈禱殿 入三間半横四間半

末神四ヶ所

末社 四ヶ所

祇園宮

春日大明神 三社相殿 入六尺横六尺

天満宮

三輪大明神

山王大權現

稻荷大明神 五社相殿 入五尺横六尺五寸

太田神社

西宮神社

若宮三所 十一社 同十入四尺横五尺

松尾大明神 一社 入三尺横五尺

御輿庫其他

御輿庫 入三間横四間 御供所 入三間半横七間

神寶藏 入四間横三間半 中十門 入二間横二間

廻廊 幅二間廻リ七十二間 舞臺 入四間半横三間

惣門 入二間半横四間三尺 門戶神 二神

開基以下系統

開基 金重院賢清 再興兩部修驗道宮司

長崎實錄大成 第四卷 神社經營之部 諏訪三所大明神社

寛永元年ヨリ天和三年迄六十年

二代 青木宮内大輔永忠 吉田兼英卿ノ門弟ト成ル

寛永九年ヨリ貞享元年迄五十三年

三代 青木右近將監永安 唯一神社ト成ル

貞享元年ヨリ元祿十五年迄十九年

四代 青木若狹守永春

元祿十五年ヨリ享保十一年迄二十五年

五代 青木兵部少輔永常

享保十一年ヨリ同十七年迄七年

六代 青木若狹守永純

享保十七年ヨリ明和元年迄三十三年

七代 青木若狹守永勇

明和二年ヨリ

諏方社末社

劔山惠美酒社

劔山^{コカチ}惠美酒社

享保元丙申年再興

境内八百坪

浦上淵村 瀬之脇郷之内

小柳五郎左衛門

当社地ハ小柳五郎左衛門ト云者御代官所ニ相願ヒ岸ヲ穿チ小祠ヲ建置年久

柳木内膳

シク相成シ處享保元年周防徳山ノ社人柳木内膳ト云者当社地ノ讓ヲ請五ヶ

五ヶ所商人寄附

所商人中ノ寄附ニテ山地ヲ鑿^キ廣メ海邊ニ地形ヲ築出シ社壇ヲ建造營成就シ

吉田家祠官免狀ヲ相願及御沙汰諏方末社ト成ル

本社 九尺ニ一間

渡殿 一間ニ二間

幣殿 二間四方

拜殿 二間ニ三間半

中興 柳木攝津守 享保二年ヨリ在住三十二年

二代 柳木左膳 寛延元年ヨリ在住四年

三代 柳木攝津守 明和元年ヨリ

諏方社末社

ニモ清淨ノ地ヲ願フヘシトアリ、式部モ其念願ナリシ故、明曆二年黑川氏再勤アリシ時、圓山元諏方ノ地ヲ願出シニ、則江府ニ御窺有テ、同年八月元諏方ノ地ヲ被相渡。則假殿ヲ營ミ、同廿八日宮移成シ奉ル。

但此地ハ寛永初年諏方大明神鎮座ナリシニ、慶安元年諏方社今ノ玉園山ノ地ニ遷移在シヨリ以來此地明地ト成シテ、明曆二年當社天滿宮地ト成ル。

松の森云ふ名稱の由来

神 殿 建 立

歸化唐人魏九官大門建立

一社壇ノ左脇岸上ニ松樹三株同根ヨリ生セシ如ク茂リ合タリ。仍テ牛込氏參詣ノ節三木ハ森ノ字ナレハ松之森ト唱フヘキ旨。是ヨリ松之森社ト稱ス。
一萬治二年黑川氏神殿建立、九月廿五日遷宮成シ奉ル。
一延寶八年牛込氏寶殿再興並幣殿、拜殿、瑞籬其外櫻堂、梅花廊造立有之。又其節魏氏某大門建立。

社 殿 其 他

本社 入二間横二間半
幣殿 入二間横二間半
拜殿 入二間半横三間半
御供所 (三間ニ二間)

大門 壹間半方

末 社

嚴島社 一所

(三尺四方 稻荷社 四所)

(各三尺四方)

幸神社 一所

(三尺四方)

開基以下系統

開基 大脇修理大夫宗也 寛永三年ヨリ慶安四年迄廿六年

二代 後藤式部信清 慶安四年ヨリ寛文六年迄十六年

三代 美濃部肥前信貞 寛文六年ヨリ元祿十二年迄三十四年

四代 美濃部式部信要 元祿十二年ヨリ同十四年迄三年

再職 肥前 元祿十四年ヨリ同十五年迄二年

五代 伊奈石見守信安 元祿十五年ヨリ享保十二年迄廿六年

六代 伊奈石見守信秀 享保十二年ヨリ寶曆三年迄廿七年

七代 伊奈石見守信靜 寶曆三年ヨリ明和四年迄十五年

八代 伊奈修理信成 明和四年ヨリ

附箋(後大學)改

松森社末社

天滿宮梅園社

元祿十三庚辰年建

境内九百八十四坪六合

長崎村 小島郷之内

當社ハ丸山町乙名安田次右衛門ト云者天滿宮ノ小祠ヲ屋敷内ニ建テ朝暮信心厚ク禮拜怠ル事無之。頃ハ元祿十二年次右衛門不慮ノ災難ニ罹シ處神明ノ靈驗ニ依テ其難ヲ遁シ事市中郷村マテ其隠レ無之。參詣群集ヲ成セリ。仍テ翌元祿十三年社地ヲ相願フノ處願ノ通免許有テ小島郷ノ内ニ神社ヲ創建シ梅園社ト號シ次右衛門姓名ヲ神門市之進ト改社職ヲ相勤松森末社ト成ル。

社殿 其他

本社 壹間四方

拜殿 入二間横壹間半

開基以下系統

初代 神門市之進 元祿十三年ヨリ在任十五年

二代 神門刑部 正徳四年ヨリ在任二十年

三代 神門播摩守 享保十八年ヨリ在任五十四年

伊勢大神宮御祈禱所

伊勢大神宮御祈禱所

寛永十六己卯年建

境内五百二坪半餘

伊勢町之内

沿革

當社開基南覺院存祐ハ唐津出生ノ修驗ニテ伊勢檜垣長官ノ方ニ參謁シ肥州長崎ノ地元龜天正ノ頃ヨリ南蠻人渡海シ諸人ニ邪宗門ヲ勸メ入神社悉ク破却セリ依之長崎ニ伊勢太神宮御祈禱所ヲ建日本ノ神徳ヲ仰シメント願訴ヘケルニ長官可然旨許容アリ。仍テ寛永十六年九月新高廉町後年伊勢町ト改ニ假ノ御宮造立有之。

五ヶ所の敷地寄附

一 正保三年伊勢町川端ニ五ヶ所ノ屋敷地ヲ寄附アリ。七月十一日新始同十一月廿八日普請成就シ遷宮成ル。

普請遷宮

一同年出雲國ヨリ島左馬允直重ト云者來レリ。此左馬允ハ出雲大社上官筋目ノ社人ニテ千家北島兩國造衆裁許證文所持セリ。則大神宮爲祠官南覺院養子シテ神職ヲ勤シム。

出雲大社

一 承應二年兩國造衆ヨリ免狀有テ出雲大社ヲ當社内ニ建。

祭禮始

一 明暦元年九月十六日初テ伊勢宮祭禮相勤之。

寛文三年大火のため松森社内に假宮遷座

- 一 寛文三年三月當表大火ニテ御宮燒失ス。仍テ御正體御神寶並末社御正體松森社内ニ假御宮御遷座成ル。
- 一 同四年七月十一日新初同九月十五日正遷宮成ル。
- 一 同八年大社岐神社修復有之。
- 一 延寶六年御宮末社共ニ修復有之。
- 一 寶永七年伊勢町ノ内屋敷地二ヶ所寄附アリ惣町ヨリ爲寄進大勢ノ者土石ヲ運ヒ地面ヲ廣メ御宮拜殿末社共ニ不殘造營有之。
- 一 寶曆二年大橋氏屋敷地一ヶ所寄附都合八ヶ所ト成ル。
- 一 毎年六月六日七日結之御神事始ル。

貼紙〔舞殿 入二間三尺横一間三尺

貼紙〔此桁不用

結の神事

御宮 入一間三尺横二間

幣殿 入一間横一間

拜殿 入三間横六間

神樂所 入二間横二間半
祝祠屋 入一間横一間三尺

社 殿

末社 貼紙〔三所

大社

貼紙〔四尺五寸四方
承應二年建

岐神社

貼紙〔三尺五寸四方
寛文八年建

開基以下系統

多賀社 貼紙〔四尺五寸四方

開基 南覺院存祐

寛永十六年ヨリ正保三年迄八年

二代 島 左馬允直重

正保三年ヨリ天和二年迄三十七年

三代 島 千大夫定重

天和二年ヨリ元祿八年迄十四年

四代 島 千大夫元重

元祿八年ヨリ同十六年迄九年

五代 島 長大夫重彦

元祿十六年ヨリ正徳四年迄十二年

六代 島 隼人政重

正徳四年ヨリ享保六年迄八年

七代 島 兵庫等重

享保六年ヨリ元文二年迄十七年

八代 島 對馬守重直

元文二年ヨリ

八幡大神官社

八幡大神宮社

正保三丙戌年

建境内七百坪

長崎村 中川郷之内

豊後府内の領主日根野織部正

當社ハ正保年中豊後府内ノ領主日根野織部正宿願ニテ長崎ニ同國由須原八幡宮ノ神社ヲ勸請成シ奉タキノ旨ナリシニ當表ニ先年岩原郷上筑後町ノ山

長崎實錄大成 第四卷

神社經營之部 八幡社

上筑後町もこ洪泰寺あまに創建

寛延元年中川郷に移る
一右ノ社地近隣左右共ニ佛寺ノ境地ニシテ。常ニ墳墓儉喪ノ事而已汚穢不淨ナル故。社職ノ者所替ノ宿願多年ナリシ處。寛延元年豊美濃守正種願叶ヘテ中川郷ノ内今ノ地ヲ求メ、山土ヲ穿チ地形ヲ平均シテ、此處ニ神社轉座成シ奉ル。

社 殿

本社 貼紙(入二間半横二間) 貼紙(不用)
幣殿 拜殿 舞殿 入三間横二間

末 社

末社

天満宮 入三尺二寸横二尺八寸
稻荷社 入二尺横一尺五寸

開基以下系統

開基 豊 民部丞祇敬 正保三年ヨリ延寶八年迄三十五年
二代 豊左近將監正方 延寶八年ヨリ享保二年迄三十八年
三代 豊 美濃守正種 享保二年ヨリ寶曆二年迄三十六年

四代 豊 長門守正吉 寶曆二年ヨリ

水 神 社

水神社

境内千三十九坪七合九勺

八幡町 之内
伊良林郷

承應元年爐粕町に創建
元文四年八幡町掛 伊良林郷
當社最初承應元年澁江刑部ト云者爐粕町ノ内ニ創建ス。
一元文四年八幡町掛リ郷地伊良林郷ノ内ニ引移リ假ノ御宮ヲ建、舊地ヨリ此地ニ遷座有之。

○本社 ○幣殿

○拜殿 貼紙(印領府書ニ無之)

開基以下系統

開基 澁江刑部 承應元年ヨリ寛文九年迄十八年
二代 澁江文大夫公姿 寛文九年ヨリ寶永四年迄三十九年
三代 澁江日向守公豊 寶永四年ヨリ享保十八年迄廿七年
四代 澁江近江守公般 享保十八年ヨリ寶曆四年迄廿二年

五代 澁江式部公定 寶曆四年ヨリ同十年迄七年
六代 澁江式部公登 寶曆十年ヨリ〔文化元年迄四十五年
附箋(鎮府ノ書ニ近江守公里ト之有

神崎船魂社

延寶八庚申年建

境內二千五百坪

浦上淵村 木鉢郷之内

神崎魂社
境內坪數
沿革
內田薪休
創建

當社祠內田薪休英貞父祖以來船魂猿田彦大神ヲ信仰セシ處延寶八年牛込氏
在勤之節長崎渡海ノ諸船安穩守護ノ爲湊口木鉢浦ノ內五拾間四方ノ地ヲ寄
附有之石窟ノ內彫入り堅二間横一間三尺ノ社ヲ建猿田彦大神惠美酒大神住
吉大神ヲ相殿ニ勸請成シ奉ル。

神功皇后に關する
傳説

一 舊記ニ神功皇后三韓退治ノ時筑紫ノ海ニ御船ヲ浮ラレシニ難風烈シカリシ
故時津浦ニ上ラセ給ヒ長崎湊ニ暫ク御鎮座在セシ時ノ古跡ナル由此邊神崎
陰神岩陽神岩高銚神ノ島祝島神樂島等ノ名跡アリ其傳説畧之。
一元祿十一年二代內田寬求京都ニ登リ吉田兼敬郷御門弟ト成リ唯一神道御免
狀ヲ賜ル是ヨリ代々神主吉田御免狀ヲ下シ賜ルノ例ト成ル

專女白狐神

石祠建

石燈籠 一對

正德四年申午八月建

石鳥居並石爲籠

享保十六辛亥建

開基 內田薪休英貞

延寶八年ヨリ元祿十一年迄十九年

二代 內田淡路守寬求

元祿十一年ヨリ享保十三年迄三十一年

三代 內田淡路守茂貞

享保十三年ヨリ寶曆元年迄廿四年

四代 內田日向守茂高

寶曆元年ヨリ

聖堂

正保四丁亥年建

境內五百四拾五坪半

伊勢町
馬場郷之内

向井元升
東上町に創建

正保四年馬場氏在勤ノ節向井元升依願東上町掛リノ地ニ聖堂創建有之。
但百六拾三坪ノ地内ニ二拾二坪八合ノ圍塀有テ方二間ノ聖堂建之。

寛文三年大火のた

一 寛文三年市中火災ノ節類焼セシ處延寶四年牛込氏在勤ニテ聖堂再興有之其

め類焼
延寶四年再興
南部草壽

頃元升上京有シ跡ニテ南部草壽ト云者ニ預ケ置ル。此草壽仕官ノ志ニテ越中富山ニ赴ケリ。此地暫ク主宰無之。

向井元成

一延寶八年元升ノ三男向井元成京都ヨリ此地ニ來レリ。最前元升開創ノ由緒ニ依テ元成ニ聖堂令附屬ラル。

寶永七年も中島
鑄錢所内寄附

一寶永七年佐久間氏久松氏在勤ノ節右ノ舊地甚タ狹隘ナル故所替有ヘシトテ今ノ聖堂ハ先年唐國ニ買渡リシ錢令鑄ラル、所ナルヲ其内五百四拾五坪ノ

正徳元年造營成る

地寄附アリ。同十二月新始有テ翌正徳元年造營成就シ、八月廿七日舊地ヨリ今ノ地ニ遷座有之。其日釋菜ノ奠儀有之同日囉子五番有之。

釋奠

一正徳二年在津ノ唐人拜禮之儀相願フニ付是ヨリ毎年釋菜ノ日唐人聖堂ニ參詣シ三跪九叩頭ノ禮ヲ行フ事免許有之

唐人拜禮

一享保元年於聖堂唐通事ノ子弟唐韻勤學ノ會始ル

唐通事子弟唐韻勤學の會

田地寄附

一同三年日下部氏在勤ノ節聖堂ノ後ニアル田地七百廿一坪半追テ聖堂ヲ引直スヘキ爲寄附アリ。

教育料支給

一同六年書生可令訓導旨ニテ教育料被下置之。

二月廿一日釋菜の奠

一元文元年ヨリ毎年二月廿一日釋菜ノ奠儀有之囉子五番有之三四日以後ニ在

囉子止む

館ノ唐人參詣拜禮ス。
一寶曆八年ヨリ釋菜ノ日音樂ヲ奏ス。此後囉子相止。

大門

大門 南面也 櫺星門

福星門

杏壇門 地高五尺 東西七間一尺 南北拾一間半

杏壇門

中央ニ經一章ノ彫屏アリ 左右小門アリ

聖廟

萬仞宮牆扁額アリ 萬世文章祖曆代帝王師 對聯アリ

聖廟

聖廟 四間四面也 地高 廟貌森然蓬海肅陳俎豆修範卓爾崎山尊視衣冠對聯アリ

萬世師表扁額アリ

萬世師表 扁額アリ 廟貌森然蓬海肅陳俎豆修範卓爾崎山尊視衣冠對聯アリ

至聖先師孔子位

至聖先師孔子位 垂繡帳 高案ニ架 燭臺 香爐 花瓶

四配位ノ帳内ニ配列ス。

四配位ノ帳内ニ配列ス。

七十二賢位

七十二賢位 東西卓上ニ配列ス 各繡帳ヲ掛

講堂

講堂 一棟 二間半ニ五間 沈變庵記有之

學 寮
書 庫

學寮 一棟
書庫 一棟

初祖以下

初祖 向井元升以順

正保四年ヨリ
萬治元年迄 在位十二年

先祖肥州神崎郡ノ人也。幼年ノ時父ニ隨テ長崎ニ到ル。生質醇厚明敏ニシテ文學ニ勉強スル事年ヲ經テ尤醫業ニ精シ。其病苦ヲ治療スル事恰モ神ノ如シ。正保四年依願長崎ニ聖堂ヲ創建シ、主宰タル事十二年。萬治元年京都ニ登レリ。於京都醫術甚發興シテ、上皇子後宮公卿大夫ヨリ以下街市鄉村ニ至ルマテ療養ヲ求テ其効驗ヲ得タル者枚舉シ難シ。又松浦、黒田、前田諸家ヨリ聘請有テ令給仕ト欲スレモ、固辭シテ其需ニ應セス。嘗テ四男有之、嫡子元端父ノ業ヲ繼テ其名大ニ著明也。於是勅ヲ奉シテ益壽院法印ノ號ヲ給與セラシ。次男平次郎、三男元成、後年聖堂附屬アリ。四男七郎左衛門外戚家ノ嗣子ト成ル。又元升儒學、醫術、運氣等ノ書籍十八九種ヲ撰述有テ世ニ行ハル。

向井元成

二代 向井元成兼丸

延寶八年ヨリ
享保十年迄 在位四十六年

延寶八年最初元升開創ノ由緒ニ依テ、元升ノ三男元成ニ聖堂令附屬ラル。然

實有詮云唐書

書物改役

向井文平

三代 向井文平兼命 享保十一年在任一ケ年

嗣子無之故内家ヨリ養子御願申上ケ家督被仰付、則父之通御切米御扶持被下置書物改役共ニ相續被仰付之。

向井元仲

四代 向井元仲兼般 享保十二年ヨリ
明和二年迄 在任三十九年

初祖元升ノ嫡子益壽院元端法印ノ孫、元仲養子御願申上ケ家督被仰付、則父祖之通御切米御扶持被下置書物改役共ニ相續被仰付之。

向井齋宮

五代 向井齋宮廷美 明和三年ヨリ

附箋 (後外記ト改之)

明和二年八月元仲退役御願申上之處、翌三年正月願之通御免有之、同日嫡子齋宮家督被仰付御切米御扶持被下置書物改役共ニ相續被仰付之。

修驗道之部

眞言宗當山派 醍醐三寶院末寺

大生山威福寺寶正院

大生山威福寺寶正院

慶長十二丁未年建

境内六百三十二坪半

威福院高順東中町筋違橋の邊に小室を構ふ

慶長十五年八幡町に移り、更に元和九年櫻馬場に移る長崎に於ける神社再興の始山號寺號

當院開基威福院高順ハ、唐津出生ニテ、多年天滿宮ヲ信敬シ、一社建立奉成タキ志願有之、慶長年中當表ニ來シニ、其頃ハ邪宗門ノ者共長崎地内ノ神社一字モ不殘破却セリ。仍テ威福院東中町筋違橋ノ邊ニ小室ヲ構ヘテ密ニ天滿宮ヲ安置シ奉ルノ處、邪宗ノ輩瓦石等ヲ投打テ神祠ヲ破却セント相妨ル故、同十五年八幡町内ニ小地ヲ求テ引移ル。然ル處元和九年長谷川氏馬場村今ノ地ヲ寄附アリ。則天滿宮社造營成就セリ。是當表ニテ神社再興ノ始ナリ

開基 威福院 高順 慶長十二年ヨリ 在任四十九年
代三 寶正院 良慶 元祿十年ヨリ 在任廿一年

代二 高岳院 俊清 明曆二年ヨリ 在任四十二年
代四 寶正院 寛清 享保二年ヨリ 在任五年

代五 同 盛閑 享保六年ヨリ 在任八年

代六 同 信隆 享保十三年ヨリ 在任其年

紙貼 全勝 鎮府ノ書ニ有之 寶曆三年ノ看坊七年
代七 同 猶客 寶曆七年ヨリ 在任十年

天台宗 英彦山靈仙寺末寺

如意山本覺寺

如意山本覺寺

元和元乙卯年建

境内二百八十六坪餘

爐粕町之内

開基大賢坊八百屋町に如意山正覺院神地寺創建三代兼瑞之を爐粕町に移し寂靜院本覺寺と改む

當院開基大賢坊八百屋町ノ地ニ彦山大權現ヲ勸請シ、如意山正覺院神地寺ト稱ス。三代兼瑞爐粕町ノ地ヲ求テ引移リ、寂靜院本覺寺ト改最前妻帶ナリシヲ兼瑞清僧ト成。四代龍賢坊寺地半分賣拂出奔ス。五代覺潭飯盛山豊前坊ヲ勸請ス。六代靈海舞嶽山彦山大權現ヲ勸請ス。又享保四年飯盛山籠ニ庵地四百坪免許アリ。寛延元年舞嶽山道筋ニ垣根山ト云千坪程ノ山ヲ地主若杉氏某寄附セリ。

貼 飯盛山 一萬四百坪
紙 舞嶽山 一萬坪

寬延元年爐粕町に
移る
一寬延元年爐粕町内ニ二百八十坪餘ノ屋敷有之。所持主濱武宗貞宿願有テ寄
附ス。則其地ニ本覺寺ヲ引移セリ。

開基	大賢坊	嚴盛	元和元年ヨリ 在住三十四年
三代	寂靜院	兼瑞	延寶五年ヨリ 在住廿五年
五代	日照坊	覺潭	正徳五年ヨリ 在住四年
七代	安忍坊	雄海	享保六年ヨリ 在住十三年
九代	利益院	廣智	元文五年ヨリ 在住六年
十一代	惠學院	清音	寬延三年ヨリ 看坊三年
附	神光院	延榮	寶曆三年ヨリ 看坊十三年
三十代	眞加院	與瀨	明和二年ヨリ
二	正覺院	長順	慶安二年ヨリ 在住廿九年
四	靜運院	龍賢	元祿十四年ヨリ 在住十五年
六	唯稱坊	靈海	享保四年ヨリ 在住三年
八	淨信院	廣延	享保十八年ヨリ 在住八年
十	修德院	實延	延享二年ヨリ 看坊六年
二十	瑞光院	教海	寶曆二年ヨリ 同二年

無凡山神宮寺

無凡山神宮寺

眞言宗當山派 醍醐三寶院末寺

寬永元甲子年建

八幡町に創造

唐僧木菴禪師無凡
山名つく

寶永二年金毘羅神
を勸請す

正徳三年麓庵地免
許

山號寺號免許
祈禱所拜殿建立
江戸市川團五郎石
燈籠奉納

境内四千六百二十拾五坪餘 浦上山里村 里郷之内

當院ハ當山派修驗常樂院八幡町ノ屋敷地ニ開創シ、二代能授院、三代吉祥院マ
テ凡ソ八十餘年在住セリ。

一當山縁起ニ古昔崇嶽トモ瓊杵山ト云ル由書載セリ。然ルニ明曆年中黒川氏在
勤ノ節、當表ニ唐僧木庵和尚渡海シ、或時木庵此山ニ登臨セシニ、大洋無邊ニ漲
盈シ、衆峯直下ニ峙環レリ。其景致凡俗ヲ離レシ勝境ナレハ、名ヲ題シテ大石ニ
無凡山黃檗木庵書ノ字ヲ筆セリ。遂ニ其字ヲ彫刻シ、是ヨリ諸人無凡山ト唱ヘ
來レリ。其頃ハ草生茂リタル山地ナリシニ、四十餘年ヲ經テ寶永二年右三代ノ
吉祥院此山ヲ願叶ヘテ、山上ノ石窟ヲ穿テ、五尺方ノ内ニ金毘羅神ヲ勸請セリ、
一正徳三年麓庵地免許アリ。享保三年畠地差免サレ、同年百間方ノ地ヲ預ケ置レ
此處ニ神木ヲ植シム。

- 一享保十年五月山號寺號免許アリ。
- 一元文元年麓御祈禱所拜殿建立アリ。
- 一石燈籠一基 高八九尺麓傍傍ニアリ。武州江戸市川團五郎建
- 一石鳥居 享保六年閏七月建。麓ニアリ。

唐人王履階

- 一 上宮窟室並石燈籠一對寶曆六年
- 一 石燈籠一基高一丈餘同八年十一月建。
- 一 石鳥居上宮ニ建。同年。
- 一 法華經書寫塔同十年八月建。
- 降 岳色千春臨福海 聯對アリ。同十一年唐人王履階敬立。
- 觀 神額アリ 波光萬里乘靈風
- 一 石燈籠一基高一丈餘同十二年三月建。

開基以下系統

- 開基 常樂院 快清 寛永元年ヨリ 在任廿二年
- 代三 吉祥院 長慶 天和三年ヨリ 在任五十一年
- 代二 能授院 幸元 正保二年ヨリ 在任三十八年
- 代四 吉祥院 鳳鼎 享保十九年ヨリ 在任四十二年

真言宗當山派 醍醐三寶院當末寺

金剛院

寶正山如意輪寺金剛院

寛永十七庚辰年建

境内三百二十五坪餘

此内百二十五坪ハ小島村之内、二百坪ハ丸山町之内。

本石灰町に創建
長崎稻荷社の始
寛文十二年今の地
に移る

當院開基良圓寛永十七年本石灰町ノ内ニ社地ヲ願請テ稻荷社ヲ創建ス。當地稻荷社ノ始也。
一 開基良圓ハ清僧ナリシニ、二代實精ヨリ妻帶ト成ル。寛文十二年今ノ地ニ引移ル。

赤色の法螺貝

一 當御役所陣貝三ツアリ。其内赤色ノ法螺貝一ツハ、當表修驗中ニ順次ニ預ケ置レシニ、近來ハ其貝當院ニ留リ預リ置ク。
貼紙(不用)
一 稻荷大明神 一 仁徳天王

- 開基 金剛院 良圓 寛永十七年ヨリ 在任二十年
- 代三 同 實玄 元禄十二年ヨリ 在任十七年
- 代五 同 實相 元文四年ヨリ 在任六十年
- 代二 同 實精 萬治二年ヨリ 在任四十一年
- 代四 同 實榮 正徳五年ヨリ 在任廿一年

真言宗當山派 醍醐三寶院末寺

聖壽院

大福山寶輪寺聖壽院

寛永十八辛巳年建

境内三百坪餘

高野平郷之内

長崎實錄大成 第四卷 修驗道之部 金剛院 聖壽院

新紙屋町に創建
延寶四年高野平郷
に移る

當院寛永十八年修驗増慶新紙屋町ニ後ニ八幡町ト改草創シ、本尊大黒天ヲ鎮祭セリ。
二十餘年ノ後延寶四年高野平村ノ内今ノ地ニ引移ル。

一代々當山派袈裟頭ニ被仰付之。

白色の法螺貝

一當御役所ニ陣貝三ツアリ。其内一ツハ御役所ニアリ。其内白色ノ法螺貝一ツハ

當院ニ御預ク、音ヲ吹入シムヘキ旨仰付置ル。尤御奉行所巡見之節時々差出之

明和三年二月類焼

一明和三年二月市中火災有テ院内悉ク類焼ス。

開 聖壽院

基 増慶 寛永十八年ヨリ
在住四十三年

代二 同

寛賢 天和三年ヨリ
在住三十五年

代三 同

寛隆 享保二年ヨリ
在住四十一年

代四 同

寛應 寶曆七年ヨリ
在住四十五年

眞言宗當山派

不動院

前熊山南光寺不動院

寛永十八辛巳年建

境内百十八坪餘

今籠町之内

當院ハ寛永十八年不動院快元開創ニテ、本堂觀世音菩薩祈禱所、不動明王脇立
毘沙門天、辨才天アリ。又院内ニ稻荷社ヲ勸請ス。

明和三年二月類焼

一明和三年二月市中火災有テ院内悉ク類焼ス。

開基以下

基 不動院

快元 寛永十八年ヨリ
在住廿四年

代二 同

快慶 寛文五年ヨリ
在住三十五年

代三 同

快圓 元祿十三年ヨリ
在住九年

代四 同

賢隆 享保二年ヨリ
在住四十五年

看坊 伍寶院 寶曆十一年ヨリ
看坊九年

天台宗本山派

白川聖護院末寺

廣徳山大行寺

萬治元戊戌年建

大 行 寺

境内百七十二坪半

今博多町之内

流法庵と稱す

此地寛永三年天満宮鎮座ナリシニ、明暦二年松森ノ地ニ天満宮ノ社遷座成シ
奉リ、其跡ニ草庵ヲ建、弘才ノ僧ヲ住セシメ、旦暮經論ヲ講セシメ、安禪寺ノ正光
院モ此處ニ退隱セリ。其後モ才徳アル僧ヲ住セシメ、流法庵ト稱ス。然ルニ享保
八年八幡町地内ノ修驗般若院此地ノ讓リヲ請テ天満宮ノ社ヲ建立シ、本山ニ

享保八年廣徳山大
行寺と改稱す

願請テ廣徳山大行寺ト號ス。

開 大行院 常學 萬治元年ヨリ
在住廿三年

代二 大行坊 秀清 延寶八年ヨリ
在住三年

長崎實錄大成 第四卷

修驗道之部 不動院 大行寺

三 中興 般若院 映澄 天和二年ヨリ 在任四十七年
代 般若院 英澄 寶曆六年ヨリ 在任四十六年

四 地徳院 吟寛 享保十三年ヨリ 在任廿五年

天台宗本山派 白川聖護院末院

能滿堂大教院

正保三丙戌年建

境内二百七十坪

伊勢町之内

大 教 院
伊勢大神宮鎮座の地より長にあたりて朝熊岳虚空藏安置の例に準し建立

當院草創ノ根元ハ、勢州山田神宮鎮座ノ地ヨリ長ニ當テ朝熊岳虚空藏安置有之例ニ準シ、長崎伊勢宮ヨリ異ニ當テ虚空藏堂建立成シタキ旨相願フ之處、願之通免許有テ、能滿堂大教院ノ號ヲ給リ、正保三年玄與法印當院ヲ開創セリ。

開基 大教院 玄與 正保三年ヨリ 在任三十二年
代三 同 玄政 天和三年ヨリ 在任廿三年
代五 同 明學 享保十六年ヨリ 在任五十四年

代二 一樂院 能元 延寶六年ヨリ 在任五年
代四 智教院 永官 寶永三年ヨリ 在任廿五年

泉 良 院

當山派泉良院

慶安四辛卯年建

境内百十九坪八勺

今籠町之内

慶安四年開創
明和三年二月類焼

當院慶安四年泉良院快春開創ニテ、本尊妙見尊、不動明王、辨才天ヲ安置ス。一明和三年二月市中火災有テ、院内悉ク類焼ス。

代一 泉良院 快春 慶安四年ヨリ 在任三十九年
代三 同 正觀 享保七年ヨリ

代二 同 了觀 元祿二年ヨリ 在任三十四年
代四 永觀 寶曆十一年ヨリ 在任五年

貼 一代 泉良院快春 慶安四年ヨリ 在任三十九年
二代 泉良院了觀 元祿二年ヨリ 在任三十四年
三代 泉良院正觀 享保六年ヨリ 在任三十三年
紙 四代 泉良院永觀 寶曆五年ヨリ 看坊六年
大光院 寶曆十一年ヨリ 在任五年
明和二年ヨリ 看坊三十三年

金 藏 院

當山派金藏院

延寶五丁巳年建

境内四十二坪二合四勺四才

今籠町之内

當院延寶五年金藏院良快明定院ノ跡ヲ繼キ本尊不動明王、辨才天ヲ安置シ天

滿宮稻荷社五社大明神ヲ勸請ス。

明和三年二月類燒 一明和三年二月市中火災有テ院內悉ク類燒ス。

代一	金藏院	良快	延寶五年ヨリ 在住四十一年	代二	同	詮惠	享保二年ヨリ 在住廿七年
代三	同	快惠	寬保三年ヨリ				

貼	開基	明定院快養	萬治元年ヨリ 在住二十年
一代	金藏院其快	延寶五年ヨリ 在住四十一年	
二代	金藏院詮惠	享保二年ヨリ 在住二十七年	
三代	金藏院快惠	寬保三年ヨリ 在住四十七年	
紙	後改名惠海	寬政元己酉年威福寺エ轉住以後兼帶	

大學院

本山派大學院

元祿三庚午年建

境內七十八坪餘

八幡町之内

大學院存永

當院元祿三年大學院存永快教院ノ跡ヲ繼キ本尊不動明王ヲ安置シ天滿宮ヲ勸請ス。

代一	大學院	存永	元祿三年ヨリ 在住十三年	代二	同	長盛	元祿十五年ヨリ 在住廿二年
代三	同	惠天	享保九年ヨリ				

貼	開基	快教院行德	寬文十二年ヨリ 在住十九年
一代	大學院存永	元祿三年ヨリ 在住十三年	
二代	大學院長盛	元祿十五年ヨリ 在住二十二年	
三代	大學院惠天	享保九年ヨリ 在住五十四年	

快行院

當山派快行院

享保八癸卯年建

境內八十八坪

高野平郷之内

當院享保八年快行院胤種和光院ノ跡ヲ繼キ本尊不動明王ヲ安置ス。

明和三年二月類燒

一明和三年二月市中火災有テ院內悉ク類燒ス。

貼	開基	雄瑞	寬永十八年ヨリ 在住四十四年
二代	雄辨	貞享元年ヨリ 在住三十一年	
看坊	圓乘院	正德五年ヨリ 在住八年	
紙	後年自此至看坊圓乘院増入鎮臺ノ書ニ一代作胤種		
	○按當院世代可隨鎮臺書乎 續編四代自寬航創ム		

長崎實錄大成 第四卷 修驗道之部 大學院 快行院

明和三年二月類焼

寶泉坊

長崎實錄大成 第四卷 修驗道之部 快行院 寶泉坊

一六〇

代一	快行院	暇種	享保八年ヨリ 在住十八年	代二	同	寛雄	元文五年ヨリ 在住九年
代三	同	機明	寛延元年ヨリ 在住十九年				

社僧寶泉坊

寛永十一甲戌年建

境内百九十坪三合

爐粕町之内

當院開基寶泉坊量海寛永十一年弘法大師作ノ荒神ノ尊像ヲ安置ス。其後當地安禪寺ノ末院トナル。

代一	寶泉坊	量海	寛永十一年ヨリ 在住四十五年	代二	同	正海	延寶七年ヨリ 在住十一年
代三	同	深量	元祿三年ヨリ 在住廿三年	代四	同	深海	正徳三年ヨリ 在住三十七年

(五代) 寶泉坊深量 實曆四年ヨリ在住五十七年
(後興善院ト改)

長崎實錄大成 第五卷

田邊八右衛門茂啓編輯

黄檗山唐僧歷任概要

寺院開創之部 上

黄檗山唐僧歷任之畧記

嚴有院様御在世之時、承應元年、古昔足利家ノ例ニ準セラレ、日域ニ禪刹一字被創建唐國ヨリ道徳優良ノ僧ヲ可令住持旨 上意有之、當表興福寺ノ住持逸然方ヨリ唐國經山寺費隱和尚ノ法嗣福州府黄檗山ノ住持隱元和尙方ニ請待ノ儀再三申シ入。則許諾有テ承應三年七月當表興福寺ニ到着有之。仍テ明曆元年城州宇治郡大和田ノ地ニ一寺開創有之、隱元和尙開基ノ初祖ニ被仰付、黄檗山萬福寺ト稱ス。此後長崎三ヶ寺在住ノ内、徳義アル僧ヲ撰ヒ、代々可被令繼席旨

被仰渡之。

開山 隱元琦禪師 明曆元年開創

承應三甲午年渡海、長崎興福寺ニ在着セリ。唐國ヨリ隨從ノ僧二十人有之、其内、大眉、獨言、獨知、獨湛、獨吼、獨立、良演、惟一、恒修、無上、此十人ハ始終陪侍セリ。其外十人ハ翌月歸唐ス。

翌明曆元乙未年、城州宇治黃檗山萬福寺ニ至リ、開基ノ初祖ト成ル。則大光普照國師ノ號ヲ賜ル。

二世 木庵瑠禪師 寬文元年繼席

明曆元乙未年渡海、長崎福濟寺ニ在住セリ。萬治三庚子年攝州普門寺ニ入、寬文元辛丑年黃檗山ニ登リ、二世繼席ト成ル。

三世 慧林機禪師

隱元渡海ノ初ヨリ隨侍セシ僧衆ノ内、獨知名ヲ慧林ニ改、第三世ノ繼席ト成

四世 獨湛瑩禪師

校訂者記す。隨侍の僧は獨言、獨知、大眉、獨湛、良演、獨吼、無上、惟一、良靜、良哉、良健、誠善、宗範、惟滿、惟聽、雪機、元福等にして大眉、良演、獨吼、獨言、獨知、獨湛等を除き自餘の唐僧は追々歸唐したり。

隱元ニ隨侍セシ僧衆ノ内、第四世ノ繼席ト成ル。

五世 高泉激禪師

寬文元辛丑年渡海、直ニ本山ニ登リ、第五世ノ繼席ト成ル。但慧門ノ弟子也、慧門ハ隱元ノ弟子也。

六世 千默安禪師 元祿八年繼席

萬治三庚子年渡海、長崎崇福寺第二代ノ住持ト成リ。元祿八乙亥年黃檗山ニ登リ、第六世ノ繼席ト成ル。

七世 悅山宗禪師 寶永二年繼席

寶文年中木庵ニ隨侍シテ本山ニ至リ、寶永二乙酉年第七世ノ繼席ト成ル。

八世 悅峰章禪師 寶永四年繼席

貞享三丙寅年渡海、長崎興福寺第三代ノ住持ト成ル。寶永四丁亥年黃檗山ニ登リ、第八世ノ繼席ト成ル。

九世 靈源脈禪師 享保元年繼席

元祿六癸酉年渡海、長崎崇福寺ニ在住セリ。享保九丙申年黃檗山ニ登リ、第九世ノ繼席ト成ル。

十世 旭如蓮禪師 享保二年繼席

正徳元辛卯年渡海、長崎興福寺ニ在住セリ。享保二丁酉年黃檗山ニ登リ、第十世ノ繼席ト成ル。

十一世 獨文炳禪師 享保五年繼席

元祿六癸酉年渡海、長崎福濟寺第五代ノ住持ト成リ、享保五庚子年黃檗山ニ登リ、第十一世ノ繼席ト成ル。

十二世 果堂昶禪師 享保七年繼席

享保六辛丑年渡海、長崎興福寺第六代ノ住持ト成リ、同七壬寅年黃檗山ニ登リ、第十二世ノ繼席ト成ル。

十三世 竺庵印禪師 享保十九年繼席

享保八癸卯年渡海、長崎興福寺第七代ノ住持ト成リ、同十九甲寅年黃檗山ニ登リ、第十三世ノ繼席ト成ル。

十四世 和僧龍統棟禪師 元文五年繼席

生緣河内國ノ僧、長門國東光寺ノ住持ト成リ、元文五庚申年黃檗山ニ登リ、第十四世ノ繼席ト成ル。

十五世 大鵬鯤禪師 延享元年繼席

享保七壬寅年渡海、長崎福濟寺第七代ノ住持ト成、延享元甲子年黃檗山ニ登リ、第十五世ノ繼席ト成リ、寛延元戊辰年伏見保壽庵ニ退隠ス。

十六世 和僧百癡拙禪師 寛延元年繼席

奥州仙臺ノ産、江戸深川海福寺ノ住持ト成リ、寛延元戊辰年黃檗山ニ登リ、第十六世ノ繼席ト成ル。

十七世 和僧祖眼明禪師 寶曆四年繼席

江州産根ノ産、江戸白金シロカナクイ臺瑞聖寺住持ト成リ、寶曆四甲戌年黃檗山ニ登リ、第十七世ノ繼席ト成ル。

十八世 大鵬鯤禪師 寶曆七年再住

寛延元戊辰年伏見ニ退隠之處、蒙 上意、寶曆七丁丑年再住有テ、第十八世ノ繼席ト成ル。

十九世 和僧千岩嵩禪師 寶曆十三年應召

奥州仙臺大年寺ニ住持シ、退隠ノ後京都鷹ヶ峰ニ閑居有シヲ、應召寶曆十三年江府ニ至リ、程ナク遷化アリ。然レトモ一應蒙 上意レシ故千岩ヲ第十九

校訂者云ふ。伯珣照浩は崇福寺開法即非より數ふれば開法第九代、開基超然より數ふれば第十一代也

世ノ籍ニ被相立之。

二十世 伯珣浩禪師

明和二年繼席

享保七壬寅年渡海、同九甲辰年長崎崇福寺第七代ノ住持ト成リ、寛延三年迄貼紙(二十七年ヲ歴テ退隱セシニ明和二年)二十七年其後明和二年黄檗山ニ登リ第二十世ノ繼席ト成ル。

淨土宗鎮西本山

筑後善導寺末寺

終南山悟真寺

慶長三戊戌年建

境内一萬坪

浦上淵村 稻佐郷之内

元龜天正ノ頃長崎ニ南蠻人着船シテ諸人ニ切支丹ノ邪宗門ヲ勸メ剩メ剩メ神社佛寺一字モ殘ラス破却シテ恣ニ横行セリ。其頃市中ニ神官修驗僧尼ノ輩徘徊スレハ、邪徒ノ者共種々障碍ヲ成ス事手ニ及カタシ。然ルニ慶長ノ初筑後善導寺ノ弟子聖譽立故ト云僧長崎ニ來リシニ、諸人惡執染着ノ者而已ナレハ何トソ佛道ニ引接シ、邪心ヲ離シメン事ヲ欲スト云ヘトモ、容易ニ其事遂カタシ。依之稻佐郷村ノ地ニ庵室ヲ攝ヘテ懇切ニ淨土ノ法門ヲ教導有シニ、日ヲ經テ正道ニ信服スル者追々數多ニ成リ、遂ニ一寺ヲ開創シテ悟真寺ト稱シ、善導寺ノ

聖譽立故

長崎佛寺再興の始

末寺ト成ル。是長崎佛寺再興ノ始ナリ。

唐人歐華宇之悟真寺

一先年歐華宇ト云テ、長崎住居ヲ許サレシ唐人在津ノ唐人其子稻佐萬六ト云者アリ死亡ノ時埋葬スヘキ菩提所ヲ相願フノ處稻佐村ノ内百間四方ノ地ヲ相與ヘラル。則此地内ニ悟真寺ヲ建、唐船主共ヨリ緣銀又ハ寄進ノ品、香花料等ヲ寄附セリ。但唐人町宿ノ時ハ此等ノ墳墓ニ參詣弔禮スル者多シ。然ルニ元祿ノ初唐人屋敷ニ在住セシメ、唐人護リニ出行成リ難キニ付、此寺ニ參詣スル者稀ニシテ、其以後ハ唐三ヶ寺ニ墳墓ヲ建、或ハ唐館内ニ三ヶ寺ノ僧徒ヲ迎ヘテ誦經供養ヲ成セリ

緣銀寄進

然レトモ當寺ニ緣銀寄進等ヲ贈寄スル事前例ノ通タリ。

梵鐘

一延寶六戊午年四月當寺鐘一口鑄造。元祿二己巳年重鑄。

終南山の豎額

一増上寺第三十四世前大僧正雲臥書終南山豎額アリ。

開基以下住持

- 開基 聖譽 慶長七年ヨリ 在任廿九年
- 代一 專譽 寛永七年ヨリ 在任十六年
- 代二 法譽 正保二年ヨリ 在任二十年
- 代三 仰譽 寛文四年ヨリ 在任三十二年
- 代四 信譽 元祿八年ヨリ 在任十八年
- 代五 稱譽 正徳二年ヨリ 在任十六年
- 代六 誓譽 元文元年ヨリ 在任十六年
- 代七 關譽 享保十二年ヨリ 在任十年
- 代八 誓譽 元文元年ヨリ 在任十六年

九貫譽 貫譽寶曆二年ヨリ 在住八年
十教譽 寶曆九年ヨリ 在住七年
十一進譽 進譽明和二年ヨリ〔在住四年〕

一向宗 京都佛光寺末寺

光壽山正覺寺

慶長九甲辰年

建境内千三百三坪六合八勺

長崎村 小島郷之内

開基道知
當寺開基道智慶長ノ頃當表ニ來シニ其頃ハ邪宗門發興シテ神社佛寺悉ク破却セリ。依之道智諸處ニテ說法教化有テ邪心ヲ翻シ正法ニ歸服スル者甚多シ。此旨御奉行小笠原氏一寺開創スヘキ旨免許アル故最初芋原ト云所ニ當寺草創セリ。是當表市中佛寺創建ノ始也。則西本願寺ノ末派ト成。其後類燒セシ故延寶四年今ノ地ニ當寺ヲ移セリ。
一元祿十一年佛光寺末寺ト成留主居職院家ニ申付ラレ仍テ寺家ヲ願フノ處免許有テ廣濟寺達相寺二ヶ所ヲ建。
一寶永五戊子年八月當寺鐘一口鑄造有之。
佛光寺末寺なる
廣濟寺と達相寺
梵 鐘

開基道智	慶長九年ヨリ 在住廿二年	二了悅	寛永三年ヨリ 在住二十年
三聚海	正保三年ヨリ 在住五十二年	四淨遍	元祿十一年ヨリ 在住二十八年
五淨超	享保十年ヨリ 在住三十四年	六憲瑞	寶曆九年ヨリ 在住二年
七徵瑞	寶曆十一年ヨリ 〔在住十七年〕		

一向宗 京都西本願寺兼帶所

大谷山大光寺

慶長十九甲寅年建

境内五千九百八十八坪

長崎村 高野平郷之内

開基慶了俗名三浦彌助
西本願寺末寺
二代西詠
本願寺門跡の兼帶所なる
留主居
當寺開基俗名三浦彌助出家ヲ遂ケ慶了ト名ヲ付上京シテ西本願寺ノ末寺ト成ル。慶長十九年ヨリ正保四年マテ住職三十四年。
二代西詠慶安元年住持セシニ同二年當寺ヲ本山ニ差シ上是ヨリ本願寺御門跡ノ兼帶所ト相成リ御坊ノ法式ニテ長崎一派ノ觸頭ト成リ住職ニテハ無之留主居ト相成リ慶安二年ヨリ延寶四年マテ二十八年也。此以後本山ヨリ輪番僧在寺ニテ公用寺法共ニ相勤ル。

番僧

輪番僧 西圓寺 妙覺寺 教宗寺 金剛寺

三代西祐 一三代西祐寛文九年ヨリ留主居ト成リ、元祿元年マテ在任二十年。

梵鐘 一寛文十二年四月當寺鐘一口鑄造有之。

四代西順 一四代西順元祿二年ヨリ留主居ト成リ、享保五年マテ在任三十二年。

五代鳳瑞 一五代鳳瑞享保五年ヨリ留主居ト成リ、元文三年マテ在任十九年。

六代慶榮 一六代慶榮元文四年ヨリ留主居ト成リ、延享三年マテ在任八年ナリシニ、故有テ

本山ヨリ追院申シ付ラル。

本山の使僧光蓮寺 一延享三年六月ヨリ同四年四月マテ本山ノ使僧光蓮寺相勤ル。

坊隨心 一延享四年五月ヨリ九月マテ看坊隨心相勤ル。

輪番開光寺 一同年九月ヨリ寶曆三年五月マテ輪番開光寺相勤ル。

看坊豁聞 一寶曆三年五月ヨリ同四年三月マテ看坊豁聞相勤ル。

輪番稱名寺 一同四年三月ヨリ輪番稱名寺相勤、同十一年六月マテ在任八年。

輪番隨專寺 一同十一年六月ヨリ輪番隨專寺相勤、(明和二年正月迄。

輪番長專寺 一明和二年正月ヨリ輪番長專寺相勤、(天明元年六月迄在勤十七年。

一向宗 京都東本願寺末

光永寺 無山號 光永寺

慶長十九甲寅年建

境内七百六十五坪八合六勺

桶屋町古町之内

開基慶西

當寺開基慶西唐津出生ニテ、慶長ノ頃當表ニ來リ、在々所々ニテ眞宗ノ法門ヲ説テ數多ノ男女ヲ正法ニ歸服セシム。此旨御奉行長谷川氏聞及レ一寺可有建

立由免許有テ、京都東本願寺末寺ト成リ、當寺開創セリ。

御坊格 一天和三年四代專順在任ノ時本山ヨリ御坊格ニ被申付、依之爲役僧寺家ヲ相願

ノ處、願之通免許有之、聞名寺、光明寺ニケ所寺中ニ建之。

寺鐘 一當寺鐘一口鑄造有之、但銘字無之、故建立ノ年月施主等相知レス。

一正徳元年五代圓隆在任ノ時、本山ヨリ院家昇進免許有之。

歴代住持

開慶西 慶長十九年ヨリ
基 在任廿五年

二慶傳 寶永十六年ヨリ
在任十四年

三教順 承應元年ヨリ
在任八年

四專順 萬治三年ヨリ
在任三十八年

五圓隆 圓隆元祿十一年ヨリ
在任十八年

六圓忠 圓忠享保元年ヨリ
在任四十七年

長崎實錄大成 第五卷 光永寺

(七圓篤 寶曆十二年ヨリ 在任廿七年)

禪宗曹洞派 肥前佐嘉玉林寺末寺

御朱印地 勅賜海雲山普昭暗臺寺

元和元乙卯年建

貼紙(鎮府書二萬千六百二十八坪下有之)

長崎村 伊良林郷之内

龜翁

最初笠頭山洪泰寺

當寺最初慶長年中平戸ヨリ龜翁トテ僧筑後町山手岩原郷ノ内ニ開創シ笠頭山洪泰寺ト稱ス。然ル處元和元年肥前佐嘉玉林寺勅願所住持一庭和尚京都ニ被爲召登爲 上意長崎南蠻人着船シテ邪宗門發興ノ地ト成ル其方彼地ニ於テ諸人ヲ佛法ノ正道ニ信服セシメ邪心ヲ離シムヘシ則洪泰寺ノ住職ヲ被仰付之旨蒙 命令一庭御請申シ上當寺ニ住持シテ說法教導誠心ヲ盡シ先ツ長崎ノ頭人タリシ數家ヲ始市中諸人檀家ニ隨從スル者枚舉シ難シ。從是年月ヲ經ルニ隨ヒ邪執ノ風俗漸々ニ消滅ス。

高野平村ニ移轉

もこ洪泰寺址に入幡社建立

鈴木三郎九郎

一寛永三年高野平村ノ内今ノ地ニ寺ヲ移シ一庭中興開山ト成ル。但元ノ洪泰寺明地ト成シニ正保年中八幡宮社建立セリ。一同十五年島原天草一揆征伐ノ後御代官鈴木三郎九郎天草ニ在勤アリ。正保ノ

天草の國照寺

初當寺ノ一庭和尚ヲ招請シ天草中ノ諸民一庭和尚ノ教導ヲ請ケ末寺一ヶ寺草創シ國照寺ト稱ス。但此寺天草中ノ本寺トシ末寺追々九ヶ寺建之。後年國照寺暗臺寺ヲ離末セント公事ニ及フト云ヘトモ根元末寺タル故彌末寺ニ相極レリ。

暗臺寺改稱一庭
了外廣覺禪師の
號を賜ふ

一同十九年江戸參府御目見被仰付其上達

明正帝叡聞同年閏九月十七日參内有テ勅賜了外廣覺禪師ノ號紫衣並海雲山普

昭暗臺寺ト黃紙ノ 御繪旨頂戴有之則暗臺寺ト改稱ス。

一同年九月當寺鐘一口鑄造有之。

末寺三ヶ寺開創

一正保三年一庭依願當表ニ末寺三ヶ寺開創有之。

松平隱岐守陣所ニ
なる

一同四年南蠻船來津ノ節當寺ノ境地ヲ以テ其節ノ上使松平隱岐守陣所ト相成

御朱印下賜

一逐年切支丹殘黨屏息ノ段 大猷院様達 御聞慶安元年御朱印被下賜之。

御朱印之寫

肥前國彼杵郡長崎之内暗臺寺境内山林竹木等令免許畢永不可有相違者也

佛事勤行不可怠慢者也

正保五年二月十七日

一慶安二年一庭和尚隱居後住之御願申上當表ハ大切ノ場所ニテ切支丹令斷滅
 正法ニ可令歸服之役寺ニ被仰付上ハ後住ノ儀道徳兼備ノ僧ヲ相撰ヒ以テ上
 意住職被仰付被下度奉願之處則願之通御免ニテ同年常州長興寺ノ住持雪山
 和尚爲上意江府エ被爲召於御前御老中御列座ニテ今度長崎皓臺寺住職被
 仰付之條彼地ハ異國本朝要津之地別シテ勤行不怠慢邪宗門禁絶シ再發無之
 様嚴密ニ可相勤旨被仰渡黒田筑前守ニ被仰付長崎ニ被送届入院有之以後代
 々住持交代之節諸國大地古跡ニ限ラス當寺ヨリ以書付後住相願フニ於テハ
 御吟味ノ上御老中連署ノ御奉書ヲ以テ住職被仰付私領ハ長崎御奉行所ヨリ
 被仰通其領主ヨリ差送ル事以後ノ定例ト成ル

一三代月舟和尚安藝國廿日市東雲寺住持ナリシヲ明曆二年閏四月御老中連署
 ノ以御奉書皓臺寺住職被仰付松平安藝守ヨリ被差送之

一繼目御禮參府登城ノ節於御白書院一束一卷献上御目見被仰付御暇被成下節
 於檜之間時服三ッ拜領被仰付代々住職右ノ例ニ被仰付之

一貞享四年

常州長興寺の住持
雪山和尚

安藝國廿日市東雲
寺の住持月舟和尚

繼目御禮參府

月舟大機盤空禪師
の謚號を賜はる

東山院御宇四代玄光依願三代月舟遷化之後勅賜大機盤空禪師ノ謚號ヲ下シ給
ル。

寺格由緒
別席の格

大音寺主座

一古來ヨリ年始八朔御禮諸寺社ノ列ニ不混雜別席ニ相勤ノ處寶永四年 常憲
 院様御代護持院末寺大德寺御取立ニ付大德寺ヲ首座ニ可被仰付之處當寺先
 代ノ勅書殊以テ上意代々住職被仰付ニ付皓臺寺ノ次ニ大德寺相勤其次ニ大
 音寺本蓮寺青木若狹守相勤之處寶永七年九代雲外在住ノ節皓臺寺ノ次ニ大
 音寺相勤シム然ル處正徳三年大音寺願之筋有之ニ付此後大音寺皓臺寺ト次
 第可仕旨以御書付被仰出ニ付翌年皓臺寺十代笑巖古來ノ寺格由緒ヲ以テ先
 格之通奉願之處一旦被仰出之事御免無之仍テ笑巖當寺 東照宮神慮之趣有
 之。

別日の御禮

明正帝之勅書被成下御老中連署ヲ以後住被仰付等由緒有之處此節若先格ヲ御
 改被仰出ニ於テハ拙僧住職被召上其上ニテ寺格被仰付被下様ニ奉願レリ先
 ツ窺書ハ被差返別日之御願申出ルニ於テハ何方ニモ不相障寺格モ宜シク相
 立可申之御内意有之ニ付則其通願書差上ノ處願之通別日ノ御禮ニ被仰付之
 尤惣而御朱印地寺社參會之節ハ皓臺寺上座ニテ或ハ願書窺書等差上ノ節ハ

暗臺寺ニ寺社中寄合申談スルノ格也。

大佛殿建つ 一延寶五年五代逆流代大佛殿建之。

末寺妙相寺開創 一同七年同五代逆流在住ノ時妙相寺ヲ開創シ末寺トス。

山門建つ 一同八年同代山門建唐國道需書。

大門建直し石段坂路等築立 一同年最初ハ大門磨屋町口ニ有之處今年銀屋町口ニ引移シ藪林ヲ剪拂ヒ坂道石段等築立今ノ所ニ大門建直ス。

長崎奉行大澤左兵衛逝去送葬 一貞享四年丁卯五月廿八日長崎御奉行大澤左兵衛基哲於當表卒去當寺塔頭聯磴院境内葬送。

同上法號 法號 慈照院殿性才自能大居士

七佛如來石像 一享保十七壬子年山王ニ七佛如來石像建。

貼 一享保廿乙卯秋於官衛井上河内守新傳命准干國僧錄並免常法幢。

紙 一明和五戊子年再建大佛殿間數准干舊規。

此二桁御奉行所ノ書ニ除キ有之ニ付後來書加ニ不及事。

歷代住持

了外廣覺禪師 開基 一庭 元和元年ヨリ 在住三十五年

代二 雪山 慶安二年ヨリ 在住三年

大機盤空禪師 代三 月舟 明曆二年ヨリ 在住十三年

代四 立光 寛文八年ヨリ 在住六年

代五 逆流 延寶二年ヨリ 在住十年

代六 湛元 貞享元年ヨリ 在住十二年

代七 了譚 元祿八年ヨリ 在住七年

代八 重關 元祿十四年ヨリ 在住十年

代九 雲外 寶永七年ヨリ 在住三年

代十 笑巖 正徳二年ヨリ 在住九年

代二 古岳 享保六年ヨリ 在住十八年

代三 一丈 元文三年ヨリ 在住十六年

代三 一枝 寶曆三年ヨリ 在住七年

代四 愚谷 寶曆十年ヨリ 在住十一年

當時塔司

聯磴院 代々卯塔爲監護五代逆流代建。

院内ニ觀音堂、稻荷社有之。

真珠院 本寺其外他方ノ來客爲宿坊同代建。

松心院 後藤氏先祖位牌所同代建。

海藏庵 大佛殿經藏爲守護同代建。

耕雲庵 山中爲守護六代湛元代建。

町年寄後藤氏位牌所

一向宗 京都西本願寺末寺

東林山深崇寺

境内千四百七十坪

長崎村 伊良林郷之内

東林山深崇寺
開基 淨慶

當寺開基淨慶ハ唐津出生ノ僧、當表諸處ニテ說法教化シ、初ハ今博多町ニ住シ又磨屋町ニ移レリ。其後此地讓ヲ請タリ。

東林山東禪寺開祖及び眞宗の僧了信

山號は元のまゝ

附 淺岡源太郎梵鐘寄

一 當寺ノ地元ハ禪宗東林山東禪寺開祖ト云僧一寺草創スト云ヘトモ、檀家甚稀ニシテ相續成カタキ故寺ヲ捨テ當表ヲ退去セリ。其後眞宗了信ト云僧此地ニ一寺取立ルト云ヘトモ、猶又信仰ノ者少クシテ在任不相叶故此地ヲ淨慶ニ讓レリ。依之淨慶西本願寺ニ相願フノ處、願之通免許アリ、山號ハ元之通ニテ寺號ヲ改元和元年當寺開創セリ。

一 施主淺岡源太郎當寺鐘一口鑄造有之。年代不記。

歴代住持

開基 淨慶 元和元年ヨリ
在任十四年
三不入 正保二年ヨリ
在任廿五年

二了益 寛永五年ヨリ
在任十八年
四了水 寛文九年ヨリ
在任四十年

五梅隆 寶永五年ヨリ
在任十年
七雅榮 元文五年ヨリ
〔在任廿一年〕

六春翁 享保二年ヨリ
在任廿四年
八俊靈 明和二年ヨリ
在任二十年

眞言宗 京都御室仁和寺末寺

醫王山延命寺

境内千八百坪

長崎村 伊良林郷之内

醫王山遍照院延命寺云ふ。
開基龍宣ハ岡山の人也。

當寺開基龍宣、京都仁和寺ニ登山シ、當表ニ眞言法義ノ一寺創建仕タキ旨相願フノ處、願之通免許アリ。仍テ當寺ヲ開創シ、本尊藥師如來ヲ安置シ、則仁和寺ノ末寺ト成ル。猶又本山ニ於テ法流一通リ相傳ヲ受ケ、代々新義常法談所ニテ所化ヲ集テ論議指南スヘキ格ノ免許狀ヲ授リ來リ、永々院家兼帶ヲ免サル。

一 當表ニ於テ法弟ノ内萬福寺、青光寺、能仁寺、圓福寺法義相傳ヲ受テ各一寺ヲ建當寺ノ末寺四ヶ所建之。

一 當寺内役僧寺家ヲ相願フノ處、免許有テ、普門院、愛染院二ヶ所建之。

一 高野本山智莊嚴院ヨリ長崎表ニ使僧入來ノ節爲宿坊高野庵建之。

一 辨才天堂 池中ニ建。

高野庵
辨才天堂、天満宮
地藏堂

長崎實錄大成 第五卷 東林山深崇寺 醫王山延命寺

校訂者云ふ。
寛永十八年四月十七日山號寺號免許承應三年二月十八日院號免許。

梵 鐘 一 正德五乙未年七月當寺鐘一口鑄造有之。

一天滿宮社 一地藏堂

歷代住持

開基	龍宣	元和二年ヨリ 在任三十三年	二尊覺	慶安元年ヨリ 在任十七年
三覺真	寬文四年ヨリ 在任廿四年	四寬雄	貞享四年ヨリ 在任廿六年	
五晃雄	正德二年ヨリ 在任廿四年	六鳳雄	享保二十年ヨリ 在任十九年	
七德雄	寶曆三年ヨリ 〔在任十三年〕			

〔看坊 圓成 明和二年ヨリ 看坊九年〕

淨土宗 京都智恩院末寺

正覺山大音寺

元和三丁巳年建

境内二萬三千六百三十坪

長崎村 伊良林郷之内

開基傳譽

當寺開基傳譽上人ハ安部家ノ末葉父ヲ安武八郎ト云リ兵亂ノ頃討死有之嫡子小太郎母子筑後瀬高ニ流落シ九歳ノ時正覺山來迎寺證譽上人ヲ頼ミ出家ヲ遂ケ十四歳ノ時爲修學關東ニ赴キ廿七歳ノ時當表ニ來レリ頃ハ慶長十九

伊勢屋傳之丞

年野母村長崎ヨリ藏徳寺城譽上人法縁ノ先輩タル故此寺ニ落着長崎表切支丹ノ魔民共ヲ何トソ佛道ノ正法ニ可令歸正念願ニテ當表ニ來リシ處古町乙名伊勢屋傳之丞ト云者惠心作ノ阿彌陀佛ヲ我家ニ安置シ厚ク尊敬シ佛道信心專ラナル旨聞及ヒ傳譽上人被處ニ尋行キ傳之丞ニ對面シ件ノ阿彌陀佛ヲ禮拜アリ傳之丞懇ニ響應シ何トソ御奉行所ニ訴ヘ出テ一寺ヲ建立有之法力ヲ以テ愚民共邪見ヲ翻シ正道ニ令歸服ヘシ先ツ此家ニテ說法有之ハ我同意ニ信心ノ者共ヲ集メ聽聞致サセ度旨其夜十六七人相集リ三夜ノ說法ニ四十餘人信服歸依ヲ成ス事淺カラス夫ヨリ傳之丞野母ニ附添行歸宅ノ上同意ノ人數ヲ語ラヒ御奉行長谷川氏へ委細言上セシ處隨分執持邪徒ノ者共正法ニ教導可有之由ニテ同年七月長谷川氏對談有タキ旨傳之丞上人ヲ同道シ御奉行所ニ參謁アリ長谷川氏野母ヨリ行違ヒ路次モ苦勞ニ相成ヘシ先ツ信心ノ者共申シ合小庵ヲ構ヘ諸人ニ教化有シメヨト有ケレハ傳之丞地内ニ二間ニ三間半ノ庵ヲ造リ阿彌陀佛ヲ安置シ上人ヲ住セシム又藏徳寺城譽上人ヲ招請シ數日說法教導有テ段々正道歸依ノ者多アリシト也此時中道院ノ號ヲ給ハル于今本堂中道院ノ額是也

中道院の號

吉利支丹の妨害

一 翌年元和乙卯年七月長谷川氏上人同道ニテ可罷出旨ニ付傳之亟附添參謁ス。暫時對談有之。此時途中ニテ魔民共石瓦ヲ投打種々惡行ヲ成セシ由言上ス。長谷川氏向後歸依ノ者共三四人モ上人ニ附添ヒ往來スヘシ帶刀可被差免間若重テ惡人共妨ヲ成サハ五人モ十人モ切捨ヘキ旨被仰付帶刀ニテ附添往來セリ。是ヨリ惡行ヲ成ス者無之。

慈惠院ミゼリコル
ザヤの址を寺地として與へらる

江戸 參禮

京都智恩院末寺なる

大音寺坂

本博多町より現在の地に移る

一元和二年於江府長谷川氏當表傳譽上人段々說法教化ニ依テ數多ノ人民佛道歸依ノ者有之旨被達。上聞ノ處殊ノ外御褒賞ノ上當地本博多町ニ有之切支丹寺燒捨ノ跡ヲ寺地ニ與ヘラレ同三年諸堂塔造營成就ス。同年九月上人江府ニ參上アリ。首尾能御目見被仰付御暇被成シ下節時服ニツ拜領被仰付直ニ京都智恩院ニ相願ヒ則末寺ト成リ正覺山大音寺ノ號ヲ授ラル。但此寺地今下町ヨリ坂ヲ登リ本博多町ニ出ル角屋敷ノ地也。後年寺移ノ以後迄モ此坂ヲ大音寺坂ト云習セリ。
一 寛永十五年島原一揆退治ノ後松平伊豆守當表ニ被立越數年來傳譽教化ニ依テ邪宗門ノ者共大勢佛法ノ正道ニ歸服セシ旨委細聞届ラレ此寺市中ニ有テハ類燒ノ事無覺束由ニテ此年今ノ地ニ寺移セシメ爲引料銀百枚被相與之。

一同十七年御朱印ノ儀奉願ノ處同十八年願之通被仰付之。

御朱印之寫

御朱印

寛永十八年九月廿七日

御奉書之寫

御奉書

先年吉利支丹宗弘之刻雖爲御制禁密々不斷絶之處大音寺事於長崎淨土宗門弘之歸伏之輩數多有之由。臺徳院様被開召届於彼所敷地山林並竹木等被下之畢然而今度右旨趣達上聞彌佛法紹隆不可怠慢之旨被仰出候敷地之御朱印被成下者也仍如件

堀式部少輔直之

松平出雲守勝隆

安藤右京進重長

寛永十八年巳九月廿八日

大音寺

切支丹寺の鐘

一 當寺鐘一口寄送アリ。但此鐘元切支丹ノ鐘ナリシ由銘字無之。同時喚鐘一口双

長崎實錄大成 第五卷 正覺山大音寺

御信牌所 一延寶二年御位牌所造營被仰付之。

山門 一同年檀中施主有之山門建。

天滿宮社 一天滿宮社貞享四年建。

觀音堂 一觀音堂元祿元年建。數年ノ後破損ニ付延享二年建替之。

一延享三年丙寅三月廿七日長崎御奉行松波備前守正房於當表卒去。當寺葬送。

長崎奉行松波備前守埋葬 法號 玄智院殿英譽正房察彥大居士

大岡美濃守同斷 一明和元年甲申六月十二日長崎御奉行大岡美濃守忠移於當表卒去。當寺塔頭影

照院境内葬送。

法號 敬光院殿深譽忠移心巖大居士

明和三年二月大門影照院、常照庵等類焼

一同三年丙戌二月市中火災有テ當寺大門並塔頭影照院常照庵北比良地共ニ類焼ス。

歷代住持

- 開傳譽 元和三年ヨリ 在任三十三年
- 基傳譽 在任三十三年
- 法譽 寛文元年ヨリ 在任十五年
- 廣譽 慶安二年ヨリ 在任十三年
- 顏譽 延寶三年ヨリ 在任十七年

- 五眞譽 元祿四年ヨリ 在任廿五年
- 七忍譽 享保十一年ヨリ 在任十五年
- 九冥譽 寛延元年ヨリ 在任二十二年
- 六談譽 正徳五年ヨリ 在任十一年
- 八惟譽 元文五年ヨリ 在任八年

塔頭

當寺塔頭

影照院 寛永十七年開基傳譽代建。

專修院 正保四年右同代建。

常照院 慶安三年二代廣譽代建。

常念佛堂 延寶七年四代顏譽代建。

法華宗 京都本國寺末寺

聖林山本蓮寺

御朱印地 聖林山本蓮寺

元和六庚申年建

境内一萬十坪

長崎村 岩原郷之内

開基日懸

當寺開基本瑞院日懸聖人ハ肥後熊本ノ出生ニテ大村ノ本經寺ニ住職アリ。元和ノ頃長崎表ニ來リシニ其頃邪徒ノ者絶サリシニ聖人法華ノ法門ヲ談義演

長崎實錄大成 第五卷 正覺山大音寺 聖林山本蓮寺

寺地としてサン、
シヨアン、パウチ
スタ寺の址四反九
畝十五歩を授けら
る

説有シニ彼徒或ハ其場ニ瓦石等ヲ投打種々妨^{サマタケ}ヲ成ス者多シト云ヘトモ、元ヨ
リ不惜身命ノ誓願ヲ發シ誠心ヲ盡シ教導有シニ、遂ニ邪心ヲ翻シ法華ノ正道
ニ歸服スル者數百人ニ及ヘリ。此旨御奉行所ニ達シ、此寺地ハ昔年切支丹寺有
之焼捨ニ成シ舊地ナリシヲ聖人ニ授ラレ當寺開創シ、聖林山本蓮寺ト稱シ、京
都本山ニ相願ヒ則本國寺末寺ト成レリ。
一慶安元年二代日感江府拜禮參勤之處 御目見被仰付御朱印頂戴被仰付、向後
代々御繼目拜禮可相勤旨ニテ時服三ツ拜領被仰付之。

御朱印

御朱印之寫

肥前國彼杵郡長崎之内本蓮寺境内山林竹木諸役等令免除之訖永不可有相
違者佛事勤行不可怠慢者也

正保五年二月十七日

寺鐘

一正保三丙戌年十月當寺鐘一口鑄造有之。

元祿十一年類焼
寶永二年地形を廣
め堂塔造營
靈瑞道場の四字は
高支岱筆也

一元祿十一年當寺類焼シ數年假屋ヲ立置シニ、寶永二年九代日隨在住ノ時、山地
ノ内ヲ鑿入レ地形ヲ廣メ、寺中諸堂塔不殘造營有之。本堂ニ靈瑞道場之額ヲ上
ル。

長崎奉行細井因幡
守次男細井賴母逝
去當寺へ葬送

一元文元年丙辰六月廿日細井賴母於長崎卒去當寺葬送。
法號 寬裕院瓊心日淨居士 因幡守次男

長崎奉行細井因幡
守逝去當寺へ葬送

一同年九月十八日長崎御奉行細井因幡守安明於當表卒去當寺葬送。

法號 珪棍院殿仁山安明日融大居士

山門建

一寶曆三年十二代日應代山門建。

首題塔建
歷代住持

一同十一年五月同代門内ニ首題塔建。

二代日感慶安二年
迄在職八年

本瑞院
開基 日慧

元和六年ヨリ
在任廿三年

一性院
二日感

寶永十九年ヨリ
在任七年

三 日周

慶安二年ヨリ
在任十二年

知足院
四 日精

萬治三年ヨリ
在任十三年

五 日逗

寛文十二年ヨリ
在任十六年

妙一院
六 日迨

貞享四年ヨリ
在任七年

七 日道

元祿六年ヨリ
在任八年

本地院
八 日芳

元祿十三年ヨリ
在任七年

九 日隨

寶永二年ヨリ
在任二十年

眞源院
十日誠

享保十年ヨリ
在任六年

長崎實錄大成 第五卷 聖林山本蓮寺

日弘延亨二年迄在職十六年
日應明和元年迄在職十九年

龍雄院 享保十五年ヨリ
代日弘 在住十五年
隨義院 延享三年ヨリ
代日應 在住十八年
明和元年ヨリ〔在住廿年〕

塔頭

當寺塔頭

一乘院 萬治三年三代日周代建
本光院 寛文三年四代日精代建
大乘院 延寶六年五代日返代建
成就坊 元祿元年六代日迨代建
達心院 享保六年九代日隨代建
唯幸坊 同七年日隨閑居所建

久松院 春光院 坊跡破壊

唐僧開場 禪宗臨濟派

東明山興福寺

東明山興福寺

元和六庚申年建

境内五千九十四坪

長崎村 伊良林郷之内

校訂者云ふ。開基唐僧真圓覺和尚、俗稱劉覺

校訂者云ふ。俗に南京寺またナシキニ稱す

唐僧默子如定 唐僧逸然性融

媽祖祭禮

當寺開創ノ事ハ、元和六年唐僧真圓當表ニ渡來リ三ケ年ノ間今ノ興福寺境内ニ庵室ヲ結ヒ住居セリ。其頃邪宗門御制禁嚴厲ナリシ時節、日本渡海唐人ノ内天主耶蘇教切支丹ヲ信敬スル者混シ來ルノ由風聞專ラナリシ故南京方ノ船主共相議シ、唐船入津ノ最初ニ天主教ヲ尊信セサルヤ否ノ事ヲ緊シク穿鑿ヲ遂ケ、且ツ海上往來平安ノ祈願又ハ先主菩提供養ノ爲、右真圓ヲ開基ノ住持トシテ禪院ヲ創建成シタキ旨、御奉行所ニ相願フノ處免許有テ、東明山興福寺ヲ開創シ、諸船主共布施寄進縁銀及ヒ香花料ヲ進呈シ、佛殿並船神、媽祖堂ヲ造立シ、每船持渡ル處ノ佛神ノ像ヲ殘ラス寺内ニ持來シメ、住持真圓ヲ始寺中ニ役僧ヲ立置委細可遂吟味ヲ旨第一肝要ノ寺役ニ被仰付之、市中ニテ南京寺ト稱ス。

一寛永九年唐僧如定渡海ス。是ヲ第二代ニ住持セシム。正保元年同逸然渡海ス。是ヲ第三代ノ住持トシ、年々諸船主化縁ヲ以テ諸堂塔伽藍山門等全ク造營成就セリ。

一毎年三月廿三日ハ船神天后ノ祭禮ナル故、在津ノ唐人共出館シテ當寺ニ參詣禮拜スル事ヲ免サル。

寺鐘鑄造

唐僧隱元隆琦の來朝

承應元年四月及び八月兩度、承應二年三月三回招請、承應二年八月逸然は僧古石を遣して隱元の東渡を請ふ

隱元禪師を中興開山と尊稱す

黃檗山萬福寺創建

當寺より黃檗山繼席

但以後福濟寺、崇福寺創建有テ、三ヶ寺同格ト成リ、毎年三月、七月、九月、廿三日、毎ニ輪番ニ媽祖祭有テ、在津ノ唐人參詣ヲ成ス。

一 寬永十七庚辰年九月當寺鐘一口鑄造有之。

一 承應元年爲 上意古昔足利家ノ例ニ準シ、城州宇治ニ唐寺一基開創有テ、道德優長ノ名僧ヲ可被請待旨被仰出之。當寺住持逸然大願心ヲ發起シ、唐國經山寺費隱和尚ノ法嗣隱元和尙ヲ請待シ、日本禪法再興有タキ旨三年ノ間一晝夜唐國ニ向ヒ三百禮拜シ、古石ト云僧ヲ使トシテ令唐渡事三度ニ及シ處、其懇請ニ感シ許諾有テ、承應三年隱元和尙當表ニ來朝アリ、僧徒二十人隨侍有テ、當寺ニ安住セリ。其時日本他門他派碩學ノ僧三百餘員相集リ、祝國開堂說法執行有之。則隱元和尙ヲ當寺中興開山ト尊稱セリ。

一 明曆元年宇治郡大和田ノ地ニ禪刹一基創建有テ、黃檗山萬福寺ト稱シ、隱元和尙ヲ開山初祖ト崇敬ス。僧徒二十人共ニ登山セリ。其内十人ハ後年マテ始終和尚ニ隨侍セリ。其内十人ハ翌年歸唐セリ。

一 後年八世悅峰、十世旭如、十二世杲堂、十三世竺庵各當寺ヨリ黃檗山繼席有之。以後繼席之事省略之。

妙應閣 隱元塑像

福州府萬福寺仲祺和尚招請の計

一 妙應閣享保七年當寺六代杲堂在住ノ時建之。隱元和尙塑像ヲ安置シ、開山堂ト稱ス。

一 享保十一年有 上意宇治黃檗山ニ隱元滴派ノ名僧ヲ可被招請旨唐國三所ニ書翰ヲ令相渡ル處、船主柯萬臧翌十二年福州府萬福寺仲祺和尚可渡來返翰持來レリ。仍テ同十三年愈々可有渡海旨再翰聘儀等令差遣ラル。

但同年仲祺來朝爲用意、當寺内ニ寮舍數ヶ所新ニ造立有之。

一 同十三年船主尹心宜杭州府福嚴寺明遇法弟鐵船和尚可渡來返翰持來レリ。依之同年此方ヨリ再翰被相渡、其趣去年六月仲祺返翰渡來リ、當申二月鐵船返翰渡來リ、其間數月後レシ故、鐵船招請ノ事ハ後年ノ沙汰ニ及ヘシ、然レトモ仲祺事七十餘歳ノ由若ハ變モ可有之ニ付不被捨置ヤウニ可有心得旨被仰聞之。但三所ノ内靈隱寺ハ華嚴派ナル故取合説之。

一 同十四年入津ノ船風無ニ去年仲祺僧徒共ニ普陀山川口マテ連出ル處、改役人搜シ出シ、柯萬臧ハ入牢僧徒ハ本山ニ令歸ラル、由翌十五年鄭恒鳴渡來リ、仲祺ハ先達テ遷化ノ由、外ノ僧徒可渡ノ勅許ヲ蒙シ由、又同十六年魏弘丹仲祺渡海ノ事官府表相濟ニ付僧衆自宅ニ養置ノ由、又同年鄭恒鳴渡來リ、仲祺遷化ノ

支那靈隱寺は華嚴派なるにより取合なし

唐僧仲祺來朝の計

企失敗に歸す

唐僧鉄船招請の計
企も亦失敗に歸す

唐人の偽計

事實説ノ由申出ル。段々被_レ遂御詮議ノ處、是迄數人ノ唐人自分ノ利欲ヲ貪リ種々偽計ヲ巧_クミシ由令露顯ニ付、柯萬臧、魏弘丹渡海禁制被_レ仰付、此事廢亡セリ。一享保二十年十一月沈杏村鐵船返翰ノ由持來レリ。仍テ披見有シ處、此方ヨリ鐵船德義ヲ慕ヒ聘請之禮儀丁寧ナリシニ、少モ辭宜謙退ノ文言ハ無之、其身渡海ニ付テハ過分ノ雜費入用ナル故、大港ノ信牌等餘計ノ利分ヲ與ヘラルヘシト也。則江府言上有之、處人柄不相應ノ書面信用シ難シト云ヘトモ、返翰トアル故、信牌ハ相與ヘシ、若鐵船ニテ無之、僧渡來ル歟、假令實ノ鐵船ナリトモ、道德學才無之、僧渡來ルニ於テハ即刻追返シ、信牌可被_レ沒收、旨被_レ仰渡夫ヨリ八年ヲ經テ寬保二年鐵船事モ相滯ル由ニテ、信牌返上セリ。是又年來唐人共往返偽計ニシテ實義無之、故遂ニ滅却セリ。

開眞圓 元和六年渡來
在任十三年

二如定 寬永九年渡來
在任十年

三逸然 正保元年渡來
在任八年

中興開山隱元和尙

承應三年渡來。明曆元年城州宇治ノ地ニ黃檗山開創初祖ト成ル。唐國ヨリ隨侍ノ僧二十人渡來。其内大眉、獨言、獨湛、獨吼、獨立、良演、惟一、恒修、無上、右十人ハ始終後年迄隨侍セリ。良健、良靜、獨痴、誠善、宗範、惟聽、惟滿、元福、古石、良哉、右十人ハ翌年歸唐セリ。

一六二頁參照

二澄一 明曆元年渡來
在任三十五年

心越 延寶五年渡來。以後
招請ニテ水戸ニ到ル

慧雲 延寶五年渡來。
招請ニテ伊豫ニ到ル

三悅峰 貞享三年渡來。元祿三年ヨリ在任十八年
寶永四年黃檗山第八世繼席ト成ル

四雷音 元祿六年渡來。
寶永五年ヨリ在任三年。

五旭如 正徳元年渡來、在任七年。
享保二年黃檗山第十世繼席ト成ル。

六泉堂 享保六年渡來、在任一年。
同七年黃檗山第十二世繼席ト成ル。

七竺庵 享保八年渡來、在任十二年。
同十九年黃檗山第十三世席ト成ル。

和僧 大倫 享保十九年ヨリ
監寺十九年

和僧 環堂 寶曆二年ヨリ
〔監寺六年〕

和僧 志通 寶曆七年ヨリ
〔監寺十二年〕

末

庵

當寺末庵

東廬庵 寬永二十年二代如定代建

本寺内

桃林庵 慶安三年三代逸然代建

寺門前

永興院 延寶二年中興二代澄一代建

右同

長崎實錄大成 第五卷 東明山興福寺

永福院 貞享三年同代建

本寺内

資福庵 元祿七年中興三代悅峰代建

右同

〔圓通庵〕

伊良林

〔希運庵〕

中川郷

淨土宗 當地大音寺末寺

三佛山法泉寺

元和七辛酉年建

境内二百三十八坪〔六合一〕合九勺

下筑後町之内

當寺開基信譽ハ大音寺傳譽上人ノ弟子ニテ、上人談義說法ノ場ニ於テ邪徒ノ輩種々障礙ヲ成スト云ヘトモ、此信譽始終附添ヒ羽翼ト成テ誠心ヲ盡シ、遂ニ正道ニ歸服セシムル者日々ニ多ク成シニ、大音寺ヨリ程遠キ町所ニ末寺ヲ建テ普ク諸人ヲ令教導ヘキ旨相願フノ處、願之通此所ニ法泉寺ヲ建末寺トシテ猶々佛法興隆ノ志願ヲ發起セリ。

- 開基信譽 元和七年ヨリ 在任十四年
- 二雄譽 寛永十一年ヨリ 在任十八年
- 三應譽 慶安四年ヨリ 在任十一年
- 四欣譽 寛文元年ヨリ 在任十八年

- 五單譽 延寶六年ヨリ 在任七年
- 六十譽 貞享元年ヨリ 在任十三年
- 七法譽 元祿九年ヨリ 在任三十年
- 八廓譽 享保十年ヨリ 在任十一年
- 九等譽 享保二十年ヨリ 在任十年
- 十梁譽 延享元年ヨリ 在任十五年
- 子瑞譽 寶曆八年ヨリ 在任六年
- 三緣譽 明和元年ヨリ (在任七年)

眞言宗 兼 帶 總本寺南都興福寺 法相宗 兼 帶 京都清水寺末寺

長崎山清水寺

元和九癸亥年建

境内五千四百七十三坪半

長崎村 高野平郷之内

當寺開基慶順ハ城州八幡出生ノ僧ニテ千手觀音ノ像ヲ背負テ諸國ヲ行脚シ當表ニ來シニ其頃モ猶邪宗門ノ餘類絶サリシニ慶順眞言ノ深意ヲ講説シ大慈大悲ノ誓願ヲ示シ教ケルニ邪見ヲ翻シテ正道ニ歸服スル者甚多シ。此旨御奉行長谷川氏聞及レ一寺建立アラハ地形ヲ與フヘシト有シニ、其頃慶順ハ小島村ニ寄宿セシニ、夜々東方ニ當テ清白タル光氣見ヘシヲ不測ニ思ヒ尋行シニ叢ノ中ニ尋常ナラヌ大石有テ瑞氣アタリニ盈リ。是則靈地ナルヘシトテ長谷川氏ニ願シニ今ノ地ヲ給リ、地面ヲ引均シ堂塔ヲ造營シ、千手ノ像ヲ安置セ

開基慶順
瑞光石

二代亮 愿

一 二代亮愿、顯密ノ聖教通曉セスト云事ナク、此代ニ清僧ト成リ、爲修學、京都ニ登リシニ、或夜ノ靈夢ニ任セ急キ長崎ニ歸來シニ、其頃在留ノ唐人何兆晋ト云者、本堂破壊ニ及シ故再興ノ志願ヲ起シ則資財ヲ喜捨シテ遂ニ堂塔造營成就ス。寛文八年堂後ニ石碑ヲ置テ其重建ノ緣由ヲ記セリ。

唐人何兆晋

重建緣由の碑、獨立碑文を撰す

一 寛永十九壬午年三月當寺鐘一口寄附アリ。鑄工京都三條釜ノ座伊豆守藤原直次銘アリ。

一天滿宮社

一 稻荷社

一 岸上ニ三十三所觀世音ノ石像アリ。

一 奥之院

一 寶曆九年十一月朔日ヨリ同日迄、十萬枚ノ護摩供、長賢勤行アリ。

一 大師堂寶曆十年十一月建。

一 大門額寶曆十一年唐人王履階改寄附之。

唐人王履階大門額寄附

歴代住持

開慶順	元和九年ヨリ 在任三十四年	二 亮愿	明曆二年ヨリ 在任二十八年
三 實榮	天和三年ヨリ 在任三十五年	四 瑞桂比丘	享保三年ヨリ 在任九年
五 長賢	享保十一年ヨリ 在任十七年	六 洞賢	寛保二年ヨリ 在任三年出奔ス
七 長賢再住	延享二年ヨリ 〔在任二十八年〕		

淨土宗 京都智恩院末寺

萬年山三寶寺此經院

貼紙〔鎮府ノ書院號省之〕

境内二千二百六十三坪

元和九癸亥年建

長崎村 伊良林郷之内

開基轉譽
當寺開基轉譽上人、慈覺大師作ノ阿彌陀佛ヲ背負當地ニ來リ、只今ノ地ニ小庵ヲ結ヒ安置セシニ、其頃モ猶更邪宗門ノ餘類絶サリシ故、上人破邪顯正ノ說法ヲ演テ淨土法門ニ歸誠スル者數多ニ成レリ。此事御奉行長谷川氏聞及レ一寺可令創建旨免許アリ。仍テ京都智恩院ニ登山シテ相願シニ山號寺號院號等ヲ授ラレ、則智恩院末寺トシテ當寺開創セリ。

一元祿五壬申年九月當寺鐘一口鑄造有之

一 當寺第三代ノ住持總檀越ノ靈牌所ヲ造立シテ助心庵ト號セシ一字雖及破壊

貼紙

修造難成取疊ミ置シヲ此度有施主再興ヲ催ス處地藏堂モ亦及大破兩宇ノ修造相兼ル事不能カ故合セテ一字トシ坪數ヲ縮メ四間四方トシテ後口ニ一間ノ指卸ヲ附ク地藏尊ヲ安置シテ檀越ノ靈牌ヲ居ヘ常念佛ヲ修行仕度旨明和五年ノ冬願之通免許有リ翌春再興之。

歷代住持

- 開基 轉譽 元和九年ヨリ 在任十一年
- 三 高譽 正保四年ヨリ 在任十五年
- 五 顯譽 延寶八年ヨリ 在任九年
- 七 稱譽 享保十一年ヨリ 在任廿一年
- 九 頂譽 寶曆十二年ヨリ 在任五年
- 二 法譽 寬永十年ヨリ 在任十四年
- 四 深譽 寬文二年ヨリ 在任十八年
- 六 專譽 元祿二年ヨリ 在任三十七年
- 八 相譽 延享四年ヨリ 在任十六年
- 十 騰譽 明和三年ヨリ 在任八年

淨土宗 唐津淨泰寺末寺

東雲山 淨安寺理藥院

淨安寺 寬永元甲子年建 長崎村 伊良林郷之内

開基 當寺開基誓譽上人元和ノ頃ヨリ此地ニ小庵ヲ結ヒ聖德太子御作ノ藥師如來

寺 鐘

一元祿五壬申年四月當寺鐘一口鑄造有之

ヲ安置セリ。寬永元年市中ニ猶又邪徒ノ餘類斷絶セサル故誠心ニ念佛門ヲ勸テ正道ニ引接スヘキ旨御奉行所ヨリ免許アリ。同年山號寺號院號等ヲ授リ當寺開創シテ專ラ諸人ヲ教導說法ヲ勤行セリ。

- 開基 誓譽 寬永元年ヨリ 在任三十六年
- 三 然譽 延寶八年ヨリ 在任二十年
- 五 攝譽 元祿十四年ヨリ 在任十年
- 七 心譽 正德三年ヨリ 在任十二年
- 九 澤譽 延享二年ヨリ 在任四年
- 十一 實譽 明和四年ヨリ 在任五年
- 二 英譽 萬治三年ヨリ 在任二十年
- 四 授譽 元祿十三年ヨリ 在任一年
- 六 學譽 正德元年ヨリ 在任二年
- 八 稟譽 享保十年ヨリ 在任十九年
- 十 津譽 寬延二年ヨリ 在任十九年

天台宗 江戸東叡山末寺

寶樹山現應寺延壽院

現應寺 寬永三丙寅年建 長崎村 高野平郷之内

境內千三百九十四坪半

長崎實錄大成 第五卷 東雲山淨安寺理藥院 寶樹山現應寺延壽院 一九九

開基高覺院

長崎實錄大成 第五卷 寶樹山現應寺延壽院

二〇〇

二他觀了坊盛宥
三代玄證、安禪寺
を開創す

四代吉祥院寬純の
時山號、寺號、院
號を賜はる

當寺開基高覺院ハ、肥前佐嘉出生ノ先達山伏ニテ、本山當山ノ山伏惣頭巾頭ヲ
相勤、寛永三年今籠町ノ内ニ居住シ、祇園社ヲ鎮座成シ奉リ、同十五年高野平村
ノ内今ノ地ヲ給リ、祇園社ヲ移建セリ。貼紙〔祇園社ノ字鎮府書ニ無之〕
一二代觀了坊盛宥清僧ト成リ、頭巾頭ヲ伊勢宮南覺院ニ讓レリ。
一三代正光院玄證去ル正保二年安禪寺ヲ開創シテ、其後寛文元年當寺三代ノ往
持ト成リ、當寺ヨリ安禪寺ヲ兼帶セリ。

一四代吉祥院寬純江戸東叡山ニ登リ、依願山號寺號院號ヲ賜リ、東叡山末寺ト成
リ、國家安全當所繁榮ノ御祈禱無怠慢可抽丹誠旨御奉書頂戴並ニ宮様御書拜
領被仰付之。

一彦山權現

一神明宮

一稻荷社

一天滿宮

一辨才天祠

千團子の祭禮

一元祿十五壬午年七代舜雄在任ノ時於當社千團子ノ祭禮相勤ル。最前ハ四季ニ
相勤ルノ處、其後ハ三月七日ヨリ同十八日迄祭禮相勤、市中惡病爲退散神輿巡
廻有之。

明和三年二月類焼

類焼ス。

一享保十四己酉年正月當寺鐘一口鑄造有之。

一明和三丙戌年二月市中火災有テ當寺本屋庫裡共ニ大門鳥居門前ノ小家共ニ

開基 修驗
高學院 寛永三年ヨリ
正光院 在任廿四年
玄證 寛文元年ヨリ在任
常泉坊 七年安禪寺兼帶
宗海 貞享三年ヨリ
舜雄 元祿十一年ヨリ
隆澄 在任十三年
興雄 寶永八年ヨリ
在任十二年
享保十九年ヨリ
三十八年

觀了坊 慶安二年ヨリ
盛宥 在任十三年
吉祥院 寛文七年ヨリ
寬純 在任二十年
吉祥院再任 元祿八年ヨリ
在任四年
隆峰 寶永七年ヨリ
在任二年
慶興 享保八年ヨリ
在任十一年

淨土宗鎮西本山 筑後善導寺末寺

聖德寺

天王山聖德寺法輪院

寛永三丙寅年建

境内千二百五十坪

浦上淵村馬込郷之内

開基專譽

當寺開基專譽ハ筑後善導寺ノ法弟ニテ山里村淵村ノ邊ニテ說法教化有リ、兩

長崎實錄大成 第五卷

寶樹山現應寺延壽院 天王山聖德寺法輪院

二〇一

村ノ百姓等各歸依信服シ、銘々父祖菩提所ヲ相願フニ付、免許有テ善導寺ヨリ山號寺號院號ヲ授リ、當寺開創セリ。

一稱名院代々爲隱居所建。

一攝取院 寛文中三代一譽代建。

一無量院 右同代建。

一享保十三戊申年二月當寺鐘一口鑄造有之。

寺 無 攝 稱
量 取 名
院 院 院
鐘 院 院

開 專 譽 寛永三年ヨリ

代 二 法 譽 正保二年ヨリ

基 一 譽 寛文元年ヨリ

代 四 積 譽 延寶八年ヨリ

代 五 稱 譽 貞享二年ヨリ

代 六 方 譽 寶永九年ヨリ

代 七 教 譽 正徳四年ヨリ

代 八 棟 譽 享保十七年ヨリ

代 九 啓 譽 延享三年ヨリ

代 十 延 譽 寶曆二年ヨリ

代 十 濟 譽 寶曆五年ヨリ

代 三 練 譽 明和元年ヨリ

代 十 濟 譽 寶曆五年ヨリ

代 三 練 譽 明和元年ヨリ

一向宗 京都西本願寺末寺

觀 善 寺

向南山觀善寺

寛永三丙寅年建

境内二百六十二坪半

長崎村 岩原郷之内

開 基 淨 念

當寺開基淨念ハ、筑後出生ニテ俗名高光甚左衛門ト云者、長崎ニ來リ出家ヲ遂ケ、一寺建立ノ念願アリ、京都東本願寺ニ相願フノ處、則免許アリ、寛永三年當寺開創セシ處、其地形不宜故、寛文十一年今ノ地ニ引移レリ。

一寶永二乙酉年五月當寺鐘一口鑄造有之。

一當寺開基以來東本願寺末派ナリシニ享保七年七代法音在住ノ時故有テ西本願寺末寺ト成ル。

寺 鐘

開 基 以 下

開 淨 念 寛永三年ヨリ

代 二 淨 玄 寛永十九年ヨリ

基 淨 信 正保二年ヨリ

代 四 淨 秀 慶安元年ヨリ

代 五 月 擔 天和二年ヨリ

代 六 月 秀 元祿六年ヨリ

代 七 法 音 元祿十二年ヨリ

代 八 淨 忍 享保十七年ヨリ

代 九 聖 峰 寶曆三年ヨリ

代 八 淨 忍 享保十七年ヨリ

(在任四十一年)

眞言宗 京都御室仁和寺末寺

鉢性寺

施無畏山法界體性寺

寛永三丙寅年建

境内五百五十八坪半

長崎村 岩原郷之内

開基宥道

當寺開基宥道高野山ヨリ此地ニ來リシニ、御奉行水野氏當地安全ノ祈願所一寺令建立タキ由志願有シニ、宥道此意旨ヲ領掌シ、京都仁和寺ニ登山シ、右ノ趣ヲ相願シニ、則願之通免許有リ、山號寺號、又寶王院ト號シ、院家職淨名院兼帶ヲ免サレ當寺開創セリ。

鎮守天滿宮

一鎮守天滿宮舊跡ヲ有シ、寛永十五年御奉行馬場氏再興造營之。

一觀音堂

一稻荷社

一護摩堂

開基以下

- | | | | |
|------|-------------------|------|-----------------|
| 開基宥道 | 寛永三年ヨリ
在任二十八年 | 二 快眞 | 寛文四年ヨリ
在任十四年 |
| 三 法源 | 延寶五年ヨリ
在任十五年 | 四 萬龍 | 元祿五年ヨリ
在任十九年 |
| 五 智嶺 | 正徳元年ヨリ
在任三年 | 龍瑞坊 | 正徳三年ヨリ
看坊十二年 |
| 六 現阿 | 享保九年ヨリ
在任二十年 | 七 興道 | 寛保三年ヨリ
在任八年 |
| 八 宥亨 | 寛延三年ヨリ
(在任二十年) | | |

長崎實錄大成 第六卷

寺院開創之部下

田邊八右衛門茂啓編纂

唐僧開場 禪宗臨濟派

分紫山福濟寺

分紫山福濟寺

寛永五戊辰年建

境内三千拾坪

長崎村 岩原郷之内

唐僧覺海

當寺開創ノ事、寛永五年唐僧覺海當表ニ渡來レリ。其頃漳州方ノ船主共相議シ、唐船入津ノ最初ニ天主教ヲ尊信セサルヤ否ノ事ヲ緊シク穿鑿ヲ遂ケ且ツ海上往來平安ノ祈願又ハ先亡菩提供養ノ爲其頃薩州ニ住居セシ唐人陣冲一、同子藤左衛門ヲ檀越ノ頭取ニテ右ノ覺海ヲ住持トシテ禪院ヲ創建成シタキ旨去ル元和六年南京方興福寺建始有シ例ニ準シ御奉行所ニ相願フノ處、免許有

大檀越陣冲一、穎川藤左衛門

漳州寺チヤウヂウヂラと稱す

唐僧了然及び覺意

船神媽祖の祭禮

寺鐘鑄造

唐僧蘊謙來朝し、重興開山となる

唐僧木庵禪師樂山第二世繼席

分紫山福濟寺ヲ開創シ、諸船主共布施寄進縁銀及ヒ香料ヲ進呈シ、佛殿並船神媽祖堂ヲ造立シ、每船持渡ル處ノ佛神ノ像ヲ不殘寺内ニ持來シメ、住持覺海ヲ始寺中ニ役僧ヲ立置、委細可遂吟味旨第一肝要ノ寺役ニ被仰付之。市中ニ漳州寺チヤウヂウヂラト稱ス。
一 同年唐僧了然、覺意兩人覺海ニ隨侍シテ渡海セシ處、覺海退去以後、覺意監寺タル事十三年。

一 毎年三月廿三日船神天后ノ祭祀ナル故、唐三ヶ寺輪番ニ三月、七月、九月、廿三日毎ニ在津ノ唐人共出館シテ參詣禮拜スル事ヲ免サル。

一 正保四丁亥年九月當寺鐘一口鑄造有之。

一 慶安二年唐僧蘊謙渡海アリ。是ヲ重興開山ト稱シ、在任廿四年ニシテ、桑蓮居ニ退隱ス。

一去ル承應年中、有上意城州宇治郡ニ黃檗山ヲ創建アリ。隱元和尙開山初祖ト成。其後長崎唐三ヶ寺ノ内學行德義兼備ノ僧ヲ可令繼席旨被仰付之。仍テ明曆元年渡海有シ、木庵和尙萬治三年攝州普門寺ニ入、寛文元年黃檗山ニ登リ、第二世ノ繼席ト成ル。以後黃檗山繼席ノ事畧之。

唐僧慈岳

天和の飢饉ニ慈岳の施粥

浴室失火

辨天堂失火

開基以下住持

一 慈岳和尙明曆元年木庵ニ隨侍シテ渡海アリ。當寺二代ノ住持タリシ時、天和元年長崎表三四年以來米穀拂底フツダイニテ市中甚飢饉ニ及シ處、慈岳和尙僧徒ヲ托鉢ニ出シ、酉正月十七日ヨリ施粥有之、一日凡ソ三千人ニ及ヘリ。數十日ノ事ニテ米穀相續サル故、公儀ヨリ米五百俵ヲ買調ラレ、當寺ニ相渡サレ、段々施粥有之。
一 寶永二年二月朔日夜當寺内浴室一軒失火。
一 寶曆五年十一月三日夜寺内辨才天堂一字失火。

開基 覺海 寛永五年渡來 在任十年

了然同年隨身渡來 覺意監寺十三年

重興開山 蘊謙 慶安二年渡來諸伽藍造營 在任廿四年桑蓮居ニ退隱ス

木庵 明曆元年渡來萬治三年攝州普門寺ニ入 寛文元年黃檗山第二世繼席ト成ル

二 慈岳 明曆元年渡來木庵隨身ニテ黃檗ニ登山 寛文十二年ヨリ當寺在任十八年

悅山 明曆三年渡來直ニ木庵ニ隨侍シ 寶永二年黃檗山第七世繼席ト成ル

三 東瀾 延寶元年渡來元祿二年ヨリ在任七年 寶永三年喝浪死後再住

四 喝浪 元祿七年渡來同八年ヨリ 在任十二年

五 獨文 元名梅山 元祿六年渡來寶永六年ヨリ在任五年 享保五年黃檗山第十一世繼席ト成ル

和僧 克傳 寶永四年ヨリ 監寺

六代 全巖 寶永七年渡來正徳五年ヨリ
 在任十年桑蓮居ニ退隱ス
 七代 大鵬 享保七年渡來同九年ヨリ在任廿二年
 延享元年黃檗山第十五世繼席ト成ル
 和僧 廓堂 延享二年ヨリ
 監寺十六年
 和僧 活宗 寶曆十一年ヨリ
 監寺七年
 和僧 禪覺 明和四年ヨリ
 監寺〔四年〕

大鵬 寶曆七年再住黃檗山
 第十八世繼席ト成ル
 當寺末庵

末

庵

桑蓮居 寛文十二年重興開山蘊謙代建 女夫川村内
 永聖院 延寶三年二代慈岳代建 本寺内
 光明庵 同四年同代建 稻佐村内
 興徳庵 天和元年同代建 本寺内
 靈鷲庵 元祿七年四代喝浪代建 同前
 紫雲庵 寛保三年七代大鵬代建 同前 下筑後町内
 大慈庵 西暦百三十四年 同前
 法源齋 同前
 松林庵 同前

松濤庵

唐僧開場 禪宗臨濟派

聖壽山崇福寺

寛永六己巳年建

境内七千四百三十四坪

長崎村 高野平郷之内

當寺開創ノ事寛永六年唐僧超然當表ニ渡來レリ。其頃福州方ノ船主共相議シ
 去ル元和六年南京方ニ興福寺寛永五年漳州方ニ福濟寺開創有シ例ニ準シ、唐
 船入津ノ最初ニ天主教ヲ尊信セサルヤ否ノ事ヲ緊シク穿鑿ヲ遂ケ、且ツ海上
 往來平安ノ祈願、又ハ先亡菩提供養ノ爲、林仁兵衛ヲ檀首ニテ右ノ超然ヲ住持
 トシテ禪院ヲ創建成シタキ旨、御奉行所ニ相願フノ處、免許有テ聖壽山崇福寺
 ヲ開創シ、諸船主共布施寄進縁銀及ヒ香花料ヲ進呈シ、佛殿並ニ船神媽祖堂ヲ
 造立シ、每船持渡ル處ノ佛神ノ像ヲ不殘寺内ニ持來シメ、住持超然ヲ始寺中ニ
 役僧ヲ立置委細可遂吟味旨、第一肝要ノ寺役ニ被仰付之。但市中ニテ福州寺ト
 稱ス。

俗に福州寺と稱ス

天后の祭禮 一毎年三月廿三日船神天后ノ祭祀ナル故唐三ヶ寺輪番ニ三月、七月、九月廿三日

寺鐘鑄造

唐僧即非當寺中興開山たり

小倉に廣壽山福聚寺を開創す

天和の飢饉に際し唐僧千駄施粥

崇福寺の大釜

唐僧千駄巖山第六世繼席

每ニ在津ノ唐人共出館シテ參詣禮拜スル事ヲ免サル。一正保四丁亥年八月當寺鐘一口鑄造有之。

一明曆三年即非和尚渡海アリ。則隱元和尙ノ法嗣ニテ、道德學解他ニ超シ名僧ナル故、當寺中興開山ト尊稱ス。寛文三年黃檗山ニ登リ、同四年長崎ニ歸來レル時、豊前小倉城主小笠原家厚ク請待有テ彼地ニ於テ廣壽山福聚寺ヲ開創有テ、主法四年ニシテ、寛文八年長崎ニ歸住セリ。

一天和元年當寺中興二代千駄和尚寺中ノ僧徒ヲ集テ、近年飢饉打續キ諸人困窮ノ由聞及ヘリトテ先ツ自分ノ什物墨蹟書籍衣服等賣拂ヒ和尚自カラ市中ニ鉢ヲ勸メ、當年九月十五日ヨリ寺中ニテ施粥有之。年ヲ越テ猶々飢饉甚シ仍テ天和二年三千人ニ與フル程ノ粥ヲ炊ク大釜一ツ鑄サシム。釜ノ高サ六尺五寸徑五尺五寸、重サ千九百六十五斤、釜ノ縁廻リニ聖壽山崇福禪寺施粥巨鍋天和貳年壬戌仲春望後日ノ字アリ。當時ノ遺物也。

一去ル承應年中有 上意城州宇治郡ニ黃檗山ヲ創建アリ。隱元和尙開山初祖ト成、其後長崎唐三ヶ寺ノ内ヨリ學行德義兼備ノ僧ヲ撰ヒ可令繼席旨被仰付之。仍テ萬治三年渡海有シ千駄和尚元祿八年黃檗山ニ登リ、第六世ノ繼席ト成ル

以後黃檗山繼席ノ事畧之。

一當寺山門ハ唐國製作ニテ、彼方ノ工匠等雕鏤シテ組合セ、當寺ニ於テ造立ス。施主年數分明ナラス。

十六觀圍屏 一元文元年唐船主林達升九品淨土圖縫ノ屏風ヲ寄附ス。是ヲ十六觀圍屏ト稱セリ。風年涅槃會盂蘭盆會等ノ節諸人ニ閱見毎シム。

一明和三年丙戌二月廿七日火災之節當寺大門燒失。

明和三年二月廿七日火災の節大門燒失

開基 以下 開 超然 寶永六年渡來、在任十六年 普定 寛永十六年渡來、監寺二年、明曆元年歸唐

二 百拙 正保三年渡來、在任四年 淨達 正保三年渡來、監寺二年、明曆元年歸唐

三 道者 慶安四年渡來、在任八年 覺開 正保三年渡來、監寺二年、明曆元年歸唐

中興開山即非 明曆三年渡來當寺ニテ開法有レ之、寛文三年黃檗山ニ登ル同四年豊前小倉小笠原家ヨリ請待有テ廣壽山福聚寺開創有テ主法四年、寛文八年長崎ニ歸住セリ

代 二千 萬治三年渡來、在任五年、元祿八年 玉岡 延寶二年渡來、監寺十九年 雪堂 延寶二年渡來、招請ニテ伊豫松山ニ到ル

靈源 元祿六年渡來享保元年、黃檗山第九世繼席ト成ル

三大衡 元祿六年渡來 寶永六年渡來
 在任十七年 在任一年
 代五義勝 寶永六年渡來 享保四年渡來
 正徳元年ヨリ在任六年 在任六年
 享保七年渡來 寛延三年ヨリ
 同九年ヨリ在任廿七年 監寺十五年
 明和二年黃檗山 明和元年ヨリ
 第二十世繼席ト成ル 和僧 龍雲 監寺十五年

末 庵

當寺末庵

廣福庵 寛文八年二代千駄代建 本寺内
 廣善庵 同年同代建 同前
 廣徳院 延寶五年同代建 同前
 祇樹林 貞享二年同代建 西山村内
 竹林院 同三年同代建 本寺内
 清涼庵 元祿元年同代建 同前
 大悲庵 同六年靈源代建 西山村内
 緣蘿庵 同八年三代大衡代建 本寺内
 養源院 同十一年同代建 片淵村内

曇華院 同十二年同代建 高野平村内
 極樂庵 同十四年同代建 同前
 接雲庵 寶永二年同代建 中川村内
 上善庵 享保元年五代義勝代建
 寶授庵 同十五年七代伯珣代建 中川村内

禪宗五山派 京都建仁寺末寺

華嶽山春徳寺

寛永七庚午年建

境内六千六百二十六坪半

長崎村 夫婦川郷之内

當寺開基泰室ハ、京都建仁寺先住三江弟子ニテ、寛永七年岩原村ノ内ニ一寺開
 創セリ。其寺地甚タ狹隘ナリシ故、同二十年壇越末次茂貞損資有テ、今ノ地ハ昔
 年領主長崎氏居住有シ舊地ヲ取立テ當寺移建セリ。

一境内ニ唐醫陳明德碑銘アリ。安東省庵撰之。
 一慶安三庚寅年七月鐘一口鑄造有之。

一同年十月十七日御奉行山崎氏於長崎卒去アリ。法號節功立忠居士。當寺ニ葬送

唐醫陳明德碑
 寺鐘鑄造
 長崎奉行山崎權八
 郎逝去

唐通事東海氏墓所

一山上ニ唐通事東海氏徐敬雲墳墓アリ。墻壁ノ間ニ花卉ノ雕鏤有テ、石匠尤其巧ヲ盡セリ。

貞享二年三月本堂失火全焼

一貞享二年三月十八日當寺本堂ヨリ出火有テ、客殿庫裏寺中殘ラス焼失ス。

鱗形屋寄附

一藏經一部土藏小庵共ニ鱗形屋某寄附之。

城跡

一後山ニ城跡ト云傳ヘシ巖岨アリ。

開基以下

開基 泰室

二 欽嶺 慶安三年ヨリ在任二年

三 心傳 慶安四年ヨリ在任十六年

四 喝門 寛文六年ヨリ在任三年

五 桃悟 寛文八年ヨリ在任十三年

六 月岑 延寶八年ヨリ在任十七年

七 天震 元祿九年ヨリ在任十六年

八 萬江 元祿十四年ヨリ在任廿七年

九 法洲 享保十二年ヨリ在任廿七年

洞天 寶曆四年ヨリ監寺三年

十 泰嶽 寶曆六年ヨリ在任二年

二 謙叟 明和元年ヨリ在任二年

三 舜道 明和二年ヨリ在任十二年

洞天 寶曆七年三月ヨリ監寺七ヶ月

不凡 寶曆七年ヨリ監代三年 但春徳寺世代ニ書入之事

洞天 寶曆九年ヨリ監代三年

祖欽 寶曆十一年ヨリ監寺四年

法華宗 當地本蓮寺末寺

光榮山長照寺

寛永八辛未年建

長崎村 伊良林郷之内

光榮山長照寺開創 開基本通院日興

當寺開基本通院日興ハ、本蓮寺日慧聖人ノ弟子ニテ、此寺地ハ柳屋正兵衛屋敷ナリシヲ茶屋深入ト云者讓リテ請、日慧聖人ト相談シ當寺ヲ建テ末寺トシ、當表法華檀家ヲ二ツニ分ケ、川筋ヨリ西ヲ本蓮寺檀家トシ、東ヲ長照寺檀ニセントノ事ナリ。然レトモ此事其以後ニ至リ東西ノ分チナク、銘々有來ノ檀家タリ。

寺鐘 鑄造

永代聖人さなる

圓乗坊、渡大道院

- 一 延寶四丙辰年十二月當寺鐘一口鑄造有之。
- 一 十二代日中ノ時永代聖人地ト成ル。
- 一 圓乗坊 開基日興代建。後稱大道院。

長崎實錄大成 第六卷 華嶽山春徳寺 光榮山長照寺

仙壽坊
久本院
七面山
首題塔

一仙壽坊 第七代日成代建。
一久本院
一七面山
一享保十六年十月十一代日遵代門内ニ首題塔建。

開基以下

開基	本通院	寬永八年ヨリ
聖境院	在住廿六年	
日遠	延寶二年ヨリ	
無住	在住四年	
日照院	貞享二年ヨリ	
行明院	同三年マテ	
蓮成院	元祿二年ヨリ	
日秀	元祿十五年ヨリ	
大長院	在住七年	
資成院	享保二年ヨリ	
日中	在住十年	
日勤	元文五年ヨリ	
本量院	在住十三年	
日勤	寶曆十一年ヨリ	
日勤	在住二年	
日勤	明和元年ヨリ	
日勤	在住三十二年	
圓通院	明曆三年ヨリ	
日融	在住十七年	
智濕院	延寶六年ヨリ	
日穿	在住七年	
再住	貞享四年ヨリ	
日遠	在住二年	
光耀院	貞享四年ヨリ	
日成	元祿八年ヨリ	
唯圓院	在住七年	
日證	寶永六年ヨリ	
本高院	在住八年	
日遵	享保十二年ヨリ	
大珠院	在住十三年	
日明	寶曆二年ヨリ	
知見院	在住九年	
日曉	寶曆十三年ヨリ	
日曉	在住二年	

淨土宗西山派 京都誓願寺末寺

天靈山龍淵寺

寬永八辛未年建

境内三百八坪八合四勺

伊勢町之内

天靈山龍淵寺
もこ日天山雲光寺
と移す

堂堺再興
寺鐘鑄造

當寺開基誓壽上人一寺開創シ、日天山雲光寺ト號ス。然ルニ當寺無緣地ニテ寶
永正徳ノ頃ニ至リ堂塔悉ク破壊シ、寺跡モ退轉スヘキノ處、六代靈空指月長老
七代天靈龍淵上人說法教導懇切ナリシ故、日々ノ聽衆夥シク、信心歸依ノ者各
資材ヲ寄送シテ遂ニ堂塔再興セリ。此時山號寺號ヲ改テ天靈山龍淵寺ト稱ス。
一享保十四己酉年正月當寺鐘一口鑄造有之。

開基以下

開基	誓壽	寬永八年ヨリ
基	在住四十五年	
三	白準	元祿十二年ヨリ
代	在住九年	
五	思立	正徳三年ヨリ
代	在住九年	
七	龍淵	享保十年ヨリ
代	在住二年	
九	卓立	元文三年ヨリ
代	在住二年	
二	清覺	延寶三年ヨリ
代	在住廿五年	
四	清岸	寶永四年ヨリ
代	在住七年	
六	指月	享保六年ヨリ
代	在住五年	
八	善仲	享保十一年ヨリ
代	在住十三年	
十	萬明	元文四年ヨリ
代	在住六年	

長崎實錄大成 第六卷 天靈山龍淵寺 瑞雲山西勝寺

二一八

代二 實印 延享二年ヨリ
在任十年

代三 圓超 寶曆四年ヨリ
在任六年

代三 隣道 寶曆十年ヨリ
在任八年

靈誠 [明和四年ヨリ看坊]

一向宗 京都西本願寺末寺

瑞雲山西勝寺

寛永九壬申年建

境内二百二十六坪

東中町之内

貼紙〔二百四十五坪九合〕

開基 守 讚

寺鐘 鑄造

當寺開基守讚親鸞上人直筆ノ六字名號ヲ保持シテ多年尊信セシニ諸人傳ヘ
聞禮拜恭敬ヲ願フ者數ヲ知ラス一寺創建有タキノ旨相勸メシ故京都西本願
寺ニ相願フノ處願ノ通山號寺號ヲ授ラレ末寺ト成テ當寺開創セリ。

開基 以下

開基 守 讚 寛永九年ヨリ
在任十七年

代二 松清 慶安元年ヨリ
在任十七年

代三 松岸 寛文四年ヨリ
在任十七年

代四 了玄 延寶八年ヨリ
在任三十八年

代五 智巖 享保二年ヨリ
在任三十二年

代六 大壽 寛延二年ヨリ
在任七十年

眞言宗 當地延命寺末寺

寶珠山萬福寺

寶珠山萬福寺

寛永十一甲戌年建

境内七千五百二十五坪

浦上淵村 竹ノ久保郷之内

延命寺の開基龍宣
法印當寺を創建す

八月七日祭禮

當寺ハ延命寺ノ開基龍宣法印稻佐村ノ内ニ一寺創建シテ辨才天社ヲ勸請シ
延命寺ヨリ兼帶スル事二十四年萬治元年ニ至テ法嗣龍盛ヲ第二代ノ住持ト
シ延命寺ノ末寺ト成レリ。毎年八月七日祭禮アリ。

寺鐘 鑄造

一 正徳元辛卯年五月當寺鐘一口鑄造有之。

一 稻荷社 惠美酒社 聖天堂 虚空藏堂

開基 以下

開基 龍宣 寛永十一年ヨリ
延命寺兼帶
代三 快言 延寶八年ヨリ
在任廿一年
代五 鳳雄 享保元年ヨリ
在任廿一年
代七 普雄 元文三年ヨリ
在任十年
代九 快雄 寛延二年ヨリ
在任二十年

代二 龍盛 萬治元年ヨリ
在任廿三年
代四 覺岸 元祿十三年ヨリ
在任十七年
代六 清雄 元文元年ヨリ
在任三年
代八 宥雄 延享四年ヨリ
在任三年

長崎實錄大成 第六卷 寶珠山萬福寺

二一九

一向宗 京都西本願寺末寺

魏巍山光源寺

魏巍山光源寺

寛永十四丁丑年建

境内五百九十五坪七合五勺

長崎村 伊良林郷之内

開基 松吟

當寺開基松吟ハ筑後柳川ノ僧當表ニ於テ說法教化有テ歸依ノ者甚多シ。仍テ御奉行馬場氏一寺創建スヘキ旨免許有シ故、本國ニ歸リ柳川ノ光源寺ハ弟ニ譲リ京都西本願寺ニ相願末寺ト成、山號ヲ授リ元ノ寺號ニテ當寺開創セリ。一寛文六年二月十七日御奉行稻生氏於長崎卒去。法號孝山淨忠大居士。當寺ニテ茶毘アリ。

延寶四年もこの寺地銀屋町より伊良林郷に移る寺鐘鑄造

一延寶四年火災有テ元ノ寺地銀屋町類焼セシ故今ノ地ニ寺ヲ移セリ
一元祿十五壬午年六月當寺鐘一口鑄造有之。

開基 以下

開基 松吟 寛永十四年ヨリ 在任廿四年

二最田 寛文元年ヨリ 在任十八年

松吟再住四年

三覺雲 天和三年ヨリ 在任八年

代四 一源 元祿四年ヨリ 在任二年

五西性 元祿六年ヨリ 在任五十八年

代六 報瓊 寛延三年ヨリ 在任七年

代七 執圭 寶曆七年ヨリ 在任廿六年

眞言宗 肥前黒髮山大智院末寺

寶壽山眞福寺文殊院

寛永十八辛巳年建

境内九百九十一坪四合八勺

長崎村 高野平郷之内

寶壽山眞福寺夕殊院 最初今籠町に創建 寶永十八年高野平郷に移る

當寺最初今籠町ノ内ニ草創有之處、寛永十八年快尊高野平村ノ内今ノ地ニ引移レリ。但肥前黒髮山ノ末寺ニテ代々住持官職色衣等ノ願ハ惣本寺京都大覺寺ノ宮ヨリ免許有之。

一天滿宮社 一辨才天堂

一稻荷社 一聖天堂

開基 以下

開基 快尊 寛永十八年ヨリ 在任十年

二覺宥 慶安三年ヨリ 在任十年

代三 英範 萬治二年ヨリ 在任十一年

代四 覺典 寛文九年ヨリ 在任十一年

代五 曉遍 延寶七年ヨリ 在任二十年

代六 覺雅 元祿十年ヨリ 在任九年

七 代 眞隆 寶永二年ヨリ
 在任三十年
 八 代 泰運 元文元年ヨリ
 在任四年
 九 代 寛隆 元文四年ヨリ
 在任二年
 十 代 義峯 元文五年ヨリ
 〔在任三十八年〕

眞言宗 京都御室仁和寺末寺

愛宕山願成寺

寛永二十癸未年建

愛宕山願成寺
境内坪數

境内七千三百十七坪

長崎村 高野平郷之内

右ノ内七百五十六坪ハ清水寺境ニ有之一ノ鳥居場ヨリ上宮マテノ道筋。横一間餘、縦七百二十間。並垢離取場共ニ。殘六千五百六十一坪社地境内山林畑地。

開基 宥慶
愛宕大權現火防の守護神、軍神

當寺開基宥慶京都御室ニ登山シ一寺建立相願ノ處、願之通免許有テ愛宕山願成寺ヲ開創シ、仁和寺末寺ト相成リ、上宮峯ニ愛宕大權現ヲ勸請セリ。但大權現ハ火防ノ守護神、軍神ニテ長崎惣町安全ノ御祈禱可抽丹誠旨。境地七千三百坪御免除ノ御墨付被下置、御老中御添狀有之。

三代 覺宥
寺鐘鑄造

一 三代覺宥在任ノ時本山ヨリ院跡兼帶淨光院御免ニテ院家地ニ被仰付之。
一元祿十七甲申年當寺鐘一口鑄造有之。

開基 以下

開基 宥慶 寛永二十年ヨリ
 在任十六年
 三 代 覺宥 萬治三年ヨリ
 在任三十一年
 五 代 義雄 元祿十一年ヨリ
 在任八年
 七 代 快英 延享二年ヨリ
 在任十八年
 二 代 宥貞 萬治元年ヨリ
 在任二年
 四 代 覺譽 元祿四年ヨリ
 在任八年
 六 代 快雄 寶永二年ヨリ
 在任三十七年
 〔躰性寺 寶曆十三年ヨリ兼帶十六年〕

眞言宗 京都御室仁和寺末寺

寶盤山聖無動寺

正保元甲申年建

境内四百三十二坪七合七勺 長崎村 岩原郷之内

當寺開基利生院專音一寺草創シ、不動明王ヲ尊信シ、在任十五年ノ後、二代宥昌京都仁和寺ニ相願ヒ末寺ト成リ、寺號ヲ聖無動寺ト改ル。三代覺賢上京ノ時代ニ院家兼帶被仰付院跡ヲ授ラル。
一天滿宮社 惠美酒堂 〔護摩堂〕

校訂者云ふ。俗にシヨンドウウシと云ふ。

開基利生院專音
二代宥昌ミ寺號
三代 覺賢

開基 專音 正保元年ヨリ
 在任十五年
 二 代 宥昌 萬治元年ヨリ
 在任四年
 三 代 覺賢 寛文元年ヨリ
 在任三十三年
 四 代 增貞 元祿六年ヨリ
 在任十七年

長崎實錄大成 第六操 文殊院 聖無動寺

五代快嚴 寶永六年ヨリ
 在任十七年
 七代宥興 寶曆三年ヨリ
 在任八年
 九代宥忍 寶曆十一年ヨリ
 在任四年
 六代快元 正保十年ヨリ
 在任廿九年
 八代宥智 寶曆十年ヨリ
 在任二年
 泰立 明和元年ヨリ看坊七年

禪宗關山派 京都妙心寺末寺

河東山禪林寺

河東山禪林寺

正保元甲申年建

境内千四百七十二坪

長崎村 伊良林郷之内

開基石峰書籍吟味

當寺開基石峰ハ博識多才ノ僧ニテ御奉行所ヨリ書籍吟味ノ事ニ付其功アルヲ以テ一寺令創建ラル。但寺地ハ穎川官兵衛別業ナリシヲ寄送セリ。仍テ當寺

寺地も穎川官兵衛別業

開創シ京都妙心寺末寺ト成ル。此官兵衛出家ヲ遂ケ獨健ト稱ス。

東京船主魏氏石壇喜捨

一慶安三年東京船主魏毓禎石壇喜捨ノ銘アリ。

寺鐘

一寶永二乙酉年十二月當寺鐘一口鑄造有之。

一天滿宮社

藏堂

一地藏堂寶永二年建。延享二年再興。

開基以下

開基	石峰	正保元年ヨリ 在任十四年	二嶺	萬治元年ヨリ 在任十四年
三定海	寛文十一年ヨリ 在任十五年	四大震	貞享二年ヨリ 在任廿一年	
五唱山	寶永三年ヨリ 在任五年	六玄密	正徳元年ヨリ 在任八年	
七仁山	享保三年ヨリ 在任八年	八提州	享保十年ヨリ 在任五年	
九東嶺	享保十五年ヨリ 在任十六年	十虎堂	延寶三年ヨリ 在任六年	
十二泰州	寶曆元年ヨリ 在任廿二年			

禪宗關山派 京都妙心寺末寺

開寶基池山德苑寺

寶池山德苑寺

正保元甲申年建

境内四百十三坪

八幡町之内

開基周教
も徳苑院ニ稱す
延寶六年禪僧眞常
徳苑院ニ讓受
林仁兵衛

當寺開基周教二代圭琢マテ修驗者ニテ徳苑院ト號セリ。延寶六年眞常ト云禪僧當院ノ讓ヲ請京都妙心寺ノ末寺ト成リ、山號寺號ヲ授ラレ、中興開山ニテ當寺建營ス。其時ノ檀越林仁兵衛專ラ助資セリ。後出家ヲ遂獨振ト稱ス。

放生池
熊野權現

一寺内ニ横五間、長二十七間ノ放生池アリ。中島ニ熊野權現祠アリ。
一地藏堂 元祿元年建 延享三年再興

地藏堂 一稻荷社

開基以下

開基	周敷	正保元年ヨリ	在任十六年	代二	圭琢	萬治二年ヨリ	在任二十年
中興	眞常	延寶六年ヨリ	在任十年	代四	鼎山	元祿元年ヨリ	在任十一年
代五	敬山	元祿十二年ヨリ	在任十五年	代六	龍天	享保元年ヨリ	在任廿九年
代七	泰州	延享元年ヨリ	在任八年	祖源	看坊	寶曆元年ヨリ	十六年
代八	祖約	明和三年ヨリ	在任十五年				

延命寺末寺

眞言宗 當地延命寺末寺

寶林山青光寺

寶林山青光寺

正保二乙酉年建

境內二百九十七坪

出來大工町之内

延命寺の開基龍宣
と當寺開基慶順

當寺ハ延命寺ノ開基龍宣法印眞言新義法流相傳有シ法嗣慶順ヲ開基トシテ

一寺創建シ青面金剛ヲ恭敬セリ則延命寺ノ末寺ト成ル。

不動明王石僧

一元祿九年門前ニ石像ノ不動明王建。

寺 鐘

一同十五壬午年十一月當寺鐘一口鑄造有之。

開基以下

開基	慶順	正保二年ヨリ	在任十六年	代二	龍勢	寛文元年ヨリ	在任三年
代三	龍觀	寛文三年ヨリ	在任三十一年	代四	覺智	元祿六年ヨリ	在任十四年
代五	觀陳	寶永三年ヨリ	在任十三年	代六	龍圓	享保三年ヨリ	在任十六年
代七	覺應	享保十五年ヨリ	在任二十年	代八	春靜	寶曆四年ヨリ	〔在任廿七年〕

一觀音堂 聖天堂

天臺宗 江戸東叡山末寺

松岳山安禪寺

松岳山安禪寺正光院

正保二乙酉年建

境內二千七百三十四坪

長崎村 西山郷之内

開基支證治印

當寺開基支證法印正保二年此地ニ草庵ヲ結ヒ居タリシニ承應元年江戸東叡山ニ登リ長崎表ニ末寺御願申上シ處山號寺號院號御免許有テ則東叡山末寺ニ被仰付之。東照宮御尊影狩野宗貞ニ爲寫ラレシヲ賜リ又大猷院殿ノ御稱號宮様御染筆ニテ頂戴被仰付之。

寺 鐘

一寛文十三癸丑年三月當寺鐘一口鑄造有之

延寶元年大普請

一 同年改元延寶元年御宮、御靈屋、二王門、鐘樓、安禪寺ノ本堂、庫裏、僧房、浴室、念佛堂、多開院共ニ御普請有之。則東叡山護國院ニ準シ多開院ニ御伽念佛令勤行ラル

延寶六年岡野氏當寺に假住

一同六年西御役所燒失ノ時岡野氏此寺ニ假住有之。

二代 玄海

一天和元年二代玄海東叡山ニ登リ嚴有院殿ノ御稱號御門主御染筆ニテ頂戴被仰付之。

奉行交代前當寺に引移

一 貞享四年以後御奉行所交代前當寺ニ引移ラル。

爐粕町の人家買入

一元祿四年爐粕町ノ家一ヶ所買入門前ノ馬場ニ加ラル。

新地藏の土神祠其
他支配唐船置銀

一同十二年新地藏ノ土神祠、辨才天、大黒天社當寺ニ支配被仰付、唐船ヨリ置銀等差出之。

四代 舜雄

一 正徳元年四代舜雄東叡山ニ登リ常憲院殿ノ御稱號御門主御染筆ニテ頂戴被仰付之。其後東叡山一乘院ニ轉住。此時興舜ト改。

七代 興慶

一 寶曆二年七代興慶東叡山ニ登リ有徳院殿ノ御稱號御門主御染筆ニテ頂戴被仰付之。

東照宮百五十回神忌

一 明和二年四月 東照宮百五十回 御神忌ニ付當住願ヒニ依テ御法會有之。

開基以下

開基 正保二年ヨリ
元祿八年ヨリ同十六年マテ
多開院著坊九年

四代 興舜 享保七年ヨリ
在任四年

五代 舜證 享保十六年ヨリ
在任十二年

七代 興慶 延享四年ヨリ
在任十八年

二代 玄海 寛文七年ヨリ
在任廿九年

三代 寛海 元祿十六年ヨリ
在任二十年

六代 舜海 元文元年ヨリ
在任十二年

八代 慶格 明和元年ヨリ
〔在任五年〕

當寺境内

常念佛堂多開院

正保年中豪傳上筑後町内小庵ニ住シ安禪寺 東照宮御靈屋ノ別當相勤ルノ處、延寶元年安禪寺御普請ノ時、境内ニ被引移、常念佛堂ヲ造立有テ御伽常念令勤行ラル。

初代豪傳廿五年 二代觀教十一年 三代放光八年 無住廿三年 四代觀

雄七年 五代快覺十二年 六代舜道廿三年 七代豪賢六年 八代興賢十

三年 無住十八年

禪宗曹洞派 當地皓臺寺末寺

瑞光山永昌寺

境內八百五坪

正保三丙戌年建

長崎村 岩原郷之内

當寺ハ皓臺寺開基一庭和尚年來說法教化有テ諸人ヲ正法ニ歸服セシメシ大
功ヲ立猶々曹洞ノ學派ヲ普ク世間ニ令流布ヘキ念願ヲ御奉行所ニ訴ヘ免許
有テ正保三年末寺三ヶ寺ヲ開創ス其内一寺永昌寺是也則法嗣ヲ撰ヒ泉益ヲ
二代ノ住持トシ皓臺寺ノ末寺トス。

一正徳二壬辰年四月當寺鐘一口鑄造有之。

- 開基 一庭 正保三年 創建
- 三 愚門 寛文八年ヨリ 在任十一年
- 五 義堂 延寶八年ヨリ 在任廿八年
- 七 丹林 享保七年ヨリ 在任八年
- 八 祥香 享保十六年ヨリ 在任廿八年
- 看坊 梅瑞 明和四年ヨリ
- 二 泉益 正保三年ヨリ 在任廿三年
- 四 戒瑤 延寶六年ヨリ 在任三年
- 六 洞禪 寶永四年ヨリ 在任十六年
- 洞禪再住 享保十四年ヨリ 在任三年
- 九 玉瑞 寶曆八年ヨリ 在任十年
- 十 禪瑞 明和四年ヨリ 在任十一年

禪宗曹洞派 當地皓臺寺末寺

德光山高林寺

德光山高林寺

正保三丙戌年建

境內百五十坪

長崎村 西山郷之内

正保三年皓臺寺開基一庭末寺として當寺を創建

當寺ハ皓臺寺開基一庭和尚年來說法教化有テ諸人ヲ正法ニ歸服セシメシ大
功ヲ立猶々曹洞ノ學派ヲ普ク世間ニ流布セシムヘキ念願ヲ御奉行所ニ訴ヘ
免許有テ正保三年末寺三ヶ寺ヲ開創其内一寺高林寺是也則法嗣ヲ撰ヒ天察
ヲ二代ノ住持トシ皓臺寺ノ末寺トス。

一稻荷社

勸音堂

天滿宮社

一享保十乙巳年八月當寺鐘一口鑄造有之

- 開基 一庭 正保三年 創建
- 三 全覺 寛文八年ヨリ 在任廿一年
- 五 古天 享保六年ヨリ 在任五年
- 七 一枝 元文四年ヨリ 在任七年
- 二 天察 正保三年ヨリ 在任廿三年
- 四 全超 元祿二年ヨリ 在任三十三年
- 六 鐵柱 享保十年ヨリ 在任十五年
- 八 愚谷 延享二年ヨリ 在任四年

長崎實錄大成 第六卷

德光山高林寺

九 岱山 寛延元年ヨリ 在住三年
 十 又玄 寛延三年ヨリ 在住十四年
 十一 智源 寶曆十三年ヨリ 在住十一年
 十二 普曉 天明二年ヨリ 在住九年

禪宗曹洞派 當地皓臺寺末寺

月桂山光雲寺

正保三丙戌年建

出來大工町之内

皓臺寺開基一庭末寺として創建

寺 鐘

世 代

開基 一庭 正保三年 創建
 三 見室 明暦元年ヨリ 在住七年
 五 周存 延寶五年ヨリ 在住廿五年
 二 宗融 正保四年ヨリ 在住八年
 四 碩外 寛文二年ヨリ 在住十五年
 六 素道 元祿十五年ヨリ 在住三十三年

當寺ハ皓臺寺開基一庭和尚年來説法教化有テ諸人ヲ正法ニ令歸服シ大功ヲ立猶々曹洞ノ學派ヲ普ク世間ニ流布セシムヘキ念願ヲ御奉行所ニ訴ヘ免許有テ正保三年末寺三ヶ寺ヲ開創ス。其内一寺光雲寺是也。同四年法嗣ノ内宗融ヲ二代ノ住持トシ皓臺寺ノ末寺トス。
 一寶曆五乙亥年十月當寺鐘一口鑄造有之。

七 滿眼 享保二十年ヨリ 在住十四年
 九 實仙 寶曆八年ヨリ 在住六年
 八 良美 寛延元年ヨリ
 十 元峰 明和元年ヨリ 在住十五年

真言宗 當地延命寺末寺

梅檀山能仁寺

正保四丁亥年建

境内四百坪

長崎村 西山郷之内

開基 長音
 桶屋町に創建初め妙音院と稱す
 二代尊覺之を西山に移す
 津田又左衛門

當寺開基長音桶屋町ノ内ニ草創シ妙音院ト稱ス。二代尊覺西山村今ノ地ニ引移レリ。本尊ハ長崎ヨリ津田又左衛門ト云者暹羅國ニ渡海シ歸朝ノ時持來リシ赤稱檀ニテ雕刻セシ釋迦如來ヲ安置セリ。則梅檀山能仁寺ト改號シ延命寺ノ末寺ト成レリ。

辨才天堂

一辨才天堂 毎年十月亥猪ノ節祭禮アリ。

一塔頭功德院

世 代

開基 長音 正保四年ヨリ 在住十六年
 二 尊覺 寛文二年ヨリ 在住十六年
 三 忍識 延寶五年ヨリ 在住十二年
 四 神賢 元祿元年ヨリ 在住六年

長崎實錄大成 第六卷 月桂山光雲寺 梅檀山能仁寺

五 雲松 元祿六年ヨリ
 在任廿一年

六 龍陳 正生三年ヨリ
 在任三十五年

七 智興 延享四年ヨリ
 在任八年

八 覺亮 寶曆四年ヨリ
 在任八年

淨深 寶曆十一年ヨリ
 〔看坊四年〕

〔寬山 明和三年ヨリ〕
 看坊十六年

〔辨眞 明和元年ヨリ〕
 看坊三年

眞言宗 當地延命寺末寺

白巖山圓福寺

白巖山圓福寺

慶安元戊子年建

境內三千九百坪

浦上村 里郷之内

延命寺開基龍宣當寺創建、山王權現勸請

當寺ハ延命寺ノ開基龍宣法印山里村ノ内ニ一寺創建シテ山王權現社ヲ勸請シ、慶安元年ヨリ延寶七年マテ二十二年延命寺ヨリ兼帶シ、延寶八年法嗣覺忍ヲ二代ノ住持トシ、延命寺ノ末寺ト成レリ。

一享保元丙申年八月當寺鐘一口鑄造有之

世 代

開基 慶安元年ヨリ
 龍宣 延命寺兼帶
 元祿十六年ヨリ
 延寶三年

二 覺忍 延寶八年ヨリ
 在任廿三年
 寶永二年ヨリ
 在任六年

三 智傳 元祿十六年ヨリ
 在任三年

四 祐性 寶永二年ヨリ
 在任六年

五 舜雄 正徳元年ヨリ
 在任十一年

六 覺演 享保六年ヨリ
 在任十五年

七 德雄 享保二十年ヨリ
 在任十九年

八 寬隆 寶曆三年ヨリ
 在任五年

紙貼 萬福寺 寶曆七年ヨリ兼帶十二年

禪宗五山派 當地春徳寺末寺

東淵山雲龍寺

東淵山雲龍寺

承應二癸巳年建

境內八百八十坪

長崎村 馬場郷之内

春徳寺第三代心傳創建
 山岡吉兵衛

當寺地ハ山岡吉兵衛ト云者屋敷ナリシヲ、春徳寺第三代ノ住持心傳ニ寄附セリ。仍テ舊寺ノ跡有シヲ此地ニ於テ再興セリ。但此心傳ハ春徳寺開基泰室ノ法脈ナル故、當寺則春徳寺末寺ト成レリ。

一正徳六丙申年八月當寺鐘一口鑄造有之。

世 代

開基 承應二年
 心傳 在任一年

二 月岑 承應三年ヨリ
 在任廿一年

三 仁甫 延寶二年ヨリ
 在任十三年

四 祖欽 貞享三年ヨリ
 在任三年

五 祖關 元祿元年ヨリ 在住四年
 六 宗源 元祿四年ヨリ 在住六年
 七 元割 元祿九年ヨリ 在住十一年
 八 玉潭 享保四年ヨリ 在住四年
 九 惠忠 寶曆四年ヨリ 在住四年
 無住 寶永三年ヨリ 在住十三年
 無住 享保七年ヨリ

〔寶曆七年以來春德寺ヨリ兼帶〕

禪宗臨濟派 城州宇治黃檗山末寺

萬壽山聖福寺

萬壽山聖福寺

延寶五丁巳年建

境内五千坪

長崎村 岩原郷之内

鐵心和尙開創

當寺開基道胖字ハ鐵心俗姓陳氏長崎出生ノ僧也。唐僧木庵和尚ニ從テ嗣法シ
 寛文元年木庵黃檗山第二代ノ爲繼席進山有シ時、鐵心侍司ト成テ相隨ヘリ。其
 後長崎ニ歸リ、福濟寺境内ニ山庵ヲ構ヘテ居住ス。然ル處當表ニ黃檗山ノ末寺
 一ヶ寺開創有ヘキ旨免許アリ。然ルニ此寺地ハ元和九年創建有シ智覺院ト云
 修驗者アリシニ其後退轉シテ五十餘年ニ成シ舊跡ナリシヲ、延寶五年此地ヲ
 取立テ鐵心一寺ヲ開創シ、萬壽山聖福寺ト稱シ、則鐵心開山ト成レリ。寶永元年

靈芝發生

マテ廿八年住持セシ處、同二年江府ヨリ招請有テ白金臺瑞聖寺ノ住持ト成レ
 リ。四ヶ年在住シ、夫ヨリ退隱ヲ相願テ、當寺聖福寺ニ歸住セリ。
 一元祿元年當寺地内ニ靈芝數十莖出生ス。諸人其嘉瑞ヲ祝セリ。于今當寺什物ト
 成ル。

流佛

一寶永六年唐津呼子浦ニ十太夫ト云漁人海中ヨリ長七尺許唐造リト見ヘシ木
 佛一體流レ寄シヲ引揚ル。則城主土井家ヨリ件ノ流佛ヲ長崎ニ送來ル。仍テ唐
 人共ニ見セシムレトモ分明ニ知ガタシ。此旨江府ヘ言上有之。其時節當寺開山
 鐵心在江戸ニテ寺社御奉行ニ直ニ取合有之。右ノ流佛聖福寺内ニ引請ケ安置
 セシムヘキ旨被仰出之。

寺鐘

一當寺鐘一口元祿七年五月鑄造有之。其鐘短少ナリシ故、享保二年十月施主有
 テ再タヒ大長ノ鐘ニ鑄直セリ。

關帝祭

一享保十九年唐船主中海上往來安全祈願ノ爲當寺ニテ毎年五月十三日關帝祭
 會有之。節在津ノ唐人共當寺ニ參詣シテ禮拜ヲ行フ事願ニ依テ免許有之。

流佛像を鐘樓下に安置、寺社方より取上げ

一寶曆四年當寺ニ安置シ來リシ流佛ヲ鐘樓ノ下ニ移シ市中ヨリ參詣群集ヲ成
 セリ。此事寺社方ニ届ケ出サル故取上ケニ成ル。

世代

開基 鐵心 延寶五年ヨリ寶永元年迄當寺在住廿八年
寶永三年ヨリ江戸瑞聖寺ニ四ヶ年住職アリ

二 曉岩 寶永七年ヨリ
在住十七年

三 岳宗 享保十八年ヨリ
在住十二年

四 曉宗 延享元年ヨリ
在住七年

五 大雄 寶曆七年ヨリ
在住四年

六 智光 寶曆十年ヨリ
〔在住八年〕

未庵

當寺末庵

松月院 延寶六年開基鐵心代建 本寺内

○普門院 天和二年同代建以後曉岩再建 同前

○淨操庵 同三年同代建以後大雄再建 寺門内

清淨庵 貞享三年同代建 同前

○四休庵 元祿元年同代建 以後岳宗再建 本寺内

紙貼 ○印三庵再建ノ事 鎮臺ノ書ニ不見

禪宗曹洞派 當地皓臺寺末寺

瑠璃光山妙相寺 延寶七己未年建

境内四千坪餘 長崎村 本河内郷之内

皓臺寺五代逆流本寺今籠町に創建

寶永四年當寺三代毒龍本河内郷に移す

秋葉山權現

龜井天滿宮

寺鐘

一山上ニ秋葉山權現ノ窟社アリ
一川上ニ龜井天滿宮社アリ其傍ニ瀧ノ水アリ
一享保十七壬子年八月當寺鐘一口鑄造有之

世代

開基 逆流 延寶七年ヨリ
在住十六年

三 毒龍 元祿十一年ヨリ
在住三十年

五 智順 元文三年ヨリ
在住十八年

二 湛元 元祿八年ヨリ
在住三年

四 石淵 享保十三年ヨリ
在住十年

六 玄海 寶曆五年ヨリ
在住十年

長崎實錄大成 第六卷 瑠璃光山妙相寺

七代 默傳 〔明和元年ヨリ
在住八年〕

眞言宗 江戸護持院末寺

青龍山大德寺慈眼院

御朱印地 青龍山大德寺慈眼院

元祿十六癸未年建

境内千三百七十坪餘

長崎村 小島郷之内

元祿十六年月珍比丘山號寺號其他讓受初め十善寺村梅ヶ崎に創建

當山寺號ハ伊勢町内ニ有之修驗者ニテ京都勝仙院末寺ナリシヲ元祿十六年月珍比丘右ノ山號寺號共ニ讓ヲ請勝仙院方ハ離末シ江府護持院末寺ト成テ長崎ニ一寺創建セント當表梅ヶ崎荒木氏某ノ茶屋屋敷山上ノ天滿宮社地共ニ讓ヲ請テ寶永元年於江府十善寺村梅香崎大德寺ノ地ヲ相願フノ處同四年寺社御奉行ヨリ願之通御免許有之則御朱印ヲ下シ賜ル

御朱印之寫

肥前國彼杵郡長崎十善寺村梅香崎大德寺之境内千三百七拾坪餘今度附屬之訖山林竹木諸役等免除之永不可有相違者可抽國家安泰之悃祈者也

寶永四年八月十五日

寶永五年小島郷に移る

一寶永五年梅ヶ崎寺地不可然由ニテ十善寺村ノ内本籠町ノ岸上ニ當テ藥師寺

中川村ノ内三日市

氏ノ茶屋屋敷有シヲ寺地ニ開創セント最前梅ヶ崎ニテ讓ヲ請シ茶屋屋敷ノ地ニ中川村ノ内三日市ト云郷地ヲ相添テ藥師寺氏方ニ替地ニ相渡シテ今ノ地ニ當寺ヲ建創セリ

一享保四年舊地山上ノ天滿神ヲ當寺ニ移建有テ梅香崎天滿宮社建之

一寛保二年觀音堂建之本尊ハ聖德太子作ノ十一面觀世音常憲院様御拜佛護持

院隆光大僧正ヨリ附屬有之シヲ安置成シ奉ル

觀音堂

世代

基開	月珍	元祿十六年ヨリ 在住四年	二	光津	寶永四年ヨリ 在住四年
代三	裕如	寶永七年ヨリ 在住二十年	代四	快亮	享保十四年ヨリ 在住七年
代五	裕元	元文元年ヨリ 在住四十一年			

禪宗臨濟派 城州宇治黃檗山末寺

白鳩山大覺寺

白鳩山大覺寺

寶永元甲申年建

境内六百五十五坪

八幡町之内

修驗大覺院存性八幡宮勸請

當寺號元天台宗ノ修驗大覺院存性城州八幡本宮ノ社務善法寺ヨリ勸請狀ヲ

長崎實錄大成 第六卷

青龍山大德寺慈眼院 白鳩山大覺寺

八幡町の名稱

長崎實錄大成 第六卷 白鳩山大覺寺 天長山太平寺

二四二

二代良寶院存慶
黃檗大頂
黃檗山末寺なる

請ケ承應二年此地ニ八幡宮社ヲ創建セリ。其以前此町ヲ新紙屋町ト云シヲ御宮勸請以後八幡町ト改ル。元祿六年二代良寶院存慶依願白鳩山大覺寺南岳院ト改號免許有之。然ル處寶永元年黃檗派ノ僧大頂當山號寺號境地共ニ讓ヲ請ケ同五年黃檗山第八代ノ唐僧悅峯和尚ノ弟子和僧理端ニ住持セシメ黃檗山末寺ト成ル。

正八幡宮

一正八幡宮 寶殿拜殿南岳院當寺内ニ兼帶ス

世代

中興開山唐僧悅峯
三 岷嶺 享保十七年ヨリ
在任二十年

二 理端 寶永五年ヨリ
在任廿五年
四 太雅 寶曆元年ヨリ
在任廿七年

禪宗曹洞派 當地皓臺寺末寺

天長山太平寺

天長山太平寺

寶延三庚午年建

境内十八坪餘

新橋町中紺屋町之内

はじめ長福山玖崎寺と稱す

當寺根元武州鈴法寺ノ末寺ニテ當地八百屋町ニ虛無僧住所ヲ免サレ長福山

其後古町に移る

玖崎寺ノ號ヲ授ル。其後古町ニ引移レリ。初代門的、二代及察、三代秀水、四代清山

五代角豊、六代伯山早世シ、寛保二年ヨリ弟子探心看坊ス。

離末の上皓臺寺なり、天長山天平寺と改稱

一右之通虛無僧寺退轉ニ及フヘキノ處、當地皓臺寺ノ弟子廬山住持セシムヘキ旨鈴法寺ヨリ皓臺寺ニ取合有之故、廬山鈴法寺ニ行向ヒ離末ノ願相叶フニ於テハ可爲住持旨相願フノ處、願之通離末有之則廬山其讓ヲ請、皓臺寺末寺ト成猶又山號寺號改ノ事モ差免ルニ付、天長山太平寺ト稱ス。

一其節皓臺寺第十二代一丈和尚廬山法系傳來ノ先師ヲ相續スヘキ旨ニ付同十代笑巖和尚ヨリノ法脈ヲ授リ來ル由ヲ記載セリ

世代

先皓臺寺十代 笑巖
三 鐵舟弟子 本立

二 笑巖弟子 鐵舟
四 本立弟子 廬山 寛延三年ヨリ
在任三十九年

長崎實錄大成

第七卷

田邊八右衛門茂啓編輯

南蠻船渡海同御制禁之部

隅州種子島南蠻船來着之事

南蠻船大薩隅國種子島へ來着

一天文十二癸卯年八月大隅國種子島之内西村ト云所ニ南蠻船一艘來着セリ。所

ノ者見之船中ノ人物奇異ノ行粧ナル故如何ナル者ゾト尋問シニ南蠻國ヨリ

商賣ノ願ニ依テ日本ニ渡船セシ由答之。則陸上ニ揚リ所ノ者ニ出會ヒ數月滯

船ス。在留ノ内蠻人共長サ二三尺ノ小筒ニテ鳥獸ヲ打取リ食物トス。此地ノ者

共其打様ヲ習得テ重寶ナル物也トテ其名ヲ重寶ト云習セリ。後年小キ鐵砲ヲ

種子ヶ島ト云ルハ此由來也。此船程ナク歸帆シ翌年又着船シ此度ハ細工人等

ヲ連レ來リ鐵砲大小造リ方玉藥ノ製法等ヲ委細ニ傳授セリ。其頃泉州堺ノ橘

鐵砲

堺の橘屋又三郎

屋又三郎ト云者此處ニ居合テ其法ノ秘密ヲ習得タリ。則右ノ傳來ニテ後年堺ノ地ニ鐵砲ノ細工人有之ト也。

九州諸處ニ南蠻船渡來之事

九州諸處ニ南蠻船渡來

大友宗麟

小西行長

一其後弘治永祿數年ノ間薩摩肥後肥前豊後豊前諸處ニ蠻船渡來リ商賣ニ事寄セ密ニ切支丹ノ邪宗門ヲ勸入ケリ。就中豊後大友宗麟深ク邪宗門ヲ信敬シ城下白杵ノ地ニ蠻船ヲ滯留セシメ領内ニ切支丹等ヲ造立有シニ依テ國中ノ者郷村卑賤ノ男女ニ至ルマテ邪教ニ立入ル者甚多カリシト也。又肥後小西攝津守モ邪宗門ヲ信仰セシ故領地又ハ同國天草ノ者其外肥前島原郷村ノ者共多ク邪宗門ニ立入レリ。是寛永年中天草島原ノ一揆蜂起セシ災殃ノ根元也。

長崎湊ニ南蠻船着岸恣ニ横行之事

長崎港へ南蠻船入津

一元龜元庚午年長崎湊ニ南蠻船着岸ス。去ル天文年中種子ケ島ニ來着以後二十八年ノ間諸處ニ住來シ今年初テ長崎津ニ入船セリ。蠻人共當湊ノ地勢ヲ考ヘ見ルニ四方ニ高山峙チ環リテ風波ノ難ヲ凌キ海底深クシテ舟楫ノ進退安穩

大村理專

吉利支丹寺建立

長崎を耶蘇會寺領
みなす

也。向後此地ヲ渡リノ湊ニ定タキ旨領主大村理專ニ願ヒ訴ヘケリ。然ルニ彼蠻人共本來貪慾無道ニシテ邪智深ク表ニハ商賣ニ來レリト云ヘトモ内心ハ他方ノ國土ヲ奪ヒ取ヘキ謀計ニテ諸人ニ金銀財寶ヲ與ヘテ恩惠ヲ施シ或ハ奇怪ノ妖術ヲ成シテ愚民ヲ感服セシメ機ヲ見テ切支丹ノ邪法ヲ教ヘ導キシ故其宗門ニ歸依スル者甚多ク惡執染着ノ餘リ神社佛寺一字モ不殘破却シ剩ヘ長崎地内ニ切支丹寺數ケ所造立シ猶又市町郷村共ニ寺領ニセン事ヲ願フト云ヘトモ理專承引無リシヲ種々難題ヲ仕掛ケ巧計ヲ盡セシ故理專モ是非ナク許容有テ此地ヲ彼徒ニ與ヘタリ。是ヨリ彼等當地領主ノ如ク仕置等キモ取捌キ恣ニ横行シ暴惡無道ノ仕業年月ヲ經ルニ隨テ甚勇猛ナリシト也。

舊記ニ大友宗麟初ヨリ數年我領地ニ蠻船ヲ相着シ處國中兵亂ノ事有テ暫ク交易ヲ成サシメ難キ故大村理專ハ大友幕下ナレハ宗麟方ヨリ大村ニ云送レルハ長崎ハ船繫好キ湊ナレハ入船スヘシト告知スル故此津ニ着船セリト云々。

評ニ曰蠻船九州諸處ニ入船シ此地ノ形勢ヲ考ヘ見テ長崎ヲ渡リ湊ニ定タル事諸ノ舊記ニ見ヘタリ。然ルニ最初ヨリ豊後ノ地ニ數年彼徒ヲ相着ケ宗

麟深ク邪教ヲ尊信シ其以後ニ至リ宗麟方ヨリ差圖有テ長崎湊ニ着岸セシト云事甚未審事也。

又說ニ蠻人共邪教ヲ説テ長崎ヲ切支丹寺領ト成セシ事甚左衛門龍造寺家ト大村家ト合戦有シ時助力セントテ元龜元年軍器ヲ拵フヘキ爲長崎ノ地ヲ蠻人方質物ニ出シ銀ヲ借用シタル故甚左衛門退去以後大村家有馬家ト相談シテ借銀ノ代リニ長崎ノ地ヲ南蠻寺領ニ渡セリト云々。

評ニ曰南蠻人本ヨリ他方ノ國土ヲ奪取ヘキ巧計ニテ彼國ヨリ珍奇ノ器物或ハ金銀財寶ヲ持來リ恩惠ヲ施シ或ハ種々妖術ヲ成シテ愚民ヲ驚動感伏セシメ九州四國ハ云フニ不及南海山陽ノ諸道畿内ニ至ルマテ邪教徧滿セシ處ニ秀吉公彼徒カ密謀ヲ明察在テ邪徒ノ輩悉ク本國ニ追返サレ切支丹宗門御制禁嚴厲ナリシ故於今諸國山陽ノ邊隅ニ至ルマテ餘殃全ク斷滅セリ。然ルニ元龜元年ニハ甚左衛門退去セシ以後ニテ則此地ハ大村家ニ被給タル所ナルヲ前年甚左衛門蠻人ノ銀ヲ借用シタル其代リトシテ長崎ノ地ヲ輒ク彼徒寺領ニ渡セシト云事甚以テ信用シ難シ。其頃ハ諸國九州共ニ大ニ亂レシ時節十二代マテ相續ノ長崎氏遂ニ他ノ幕下ニ不屬トアレハ是

レ相應ノ智謀勇畧モ有テ甲冑弓箭ノ類モ事足りヌヘキ也。凡ソ軍陣ノ道安危存亡ヲ天運ニ任セ命ヲ塵芥ヨリモ輕ク義ヲ金錢ヨリモ重クシテ武名ヲ後代ニ輝シ郡國ヲ討從ヘテ子孫ノ後榮ヲ期スヘキ事ナルニ甚左衛門如何ナル心成ニヤ他家ノ爲加勢武器ヲ調ヘントテ我領地ヲ爲質物畜獸ニ齊シキ蠻賊ノ銀ヲ借用シ其返却叶サル時ハ我領地ヲ蠻人ニ渡シテ進退ノ度ヲ失フニ至ルヘキ事豈其理有ン哉。是記スル者共傳聞ノ當否ヲ辨明セス謾ニ虛誕ノ鄙説ヲ傳フル者ト見ヘタリ。

信長公京都ニ南蠻寺被令造立之事

一或書ニ曰。天正二甲戌年織田信長公御前ニテ近年長崎ニ南蠻國ヨリウルガンバテレント云奇妙ノ異國人渡來レル由言上セシ者有シニ信長公急キ其者ヲ召寄ヘシト彼異人ヲ召レシニ日ヲ經テ江州安土ニ參着セリ。彼異人種々ノ寶物ヲ献上シ信長公ノ御前ニ罷出ル。汝何ノ爲ニ日本ニ來ルヤト御尋有シニ彼者佛法ヲ弘メン爲ニ渡來レル由。重テ御召有ヘシト城下妙法寺ニ差置ル。其後大老肥近衆ヲ召レ御評議有シニ一人ノ儒者刑部正則ト云者進ミ出彼等ノ體

織田信長南蠻寺を
建立せしむ

相誠ニ戎狄ノ輩ニテ人倫ノ正道ヲ知タル者ニハ非ルヘシ。後年如何ナル災ヲ成サンモ計リ難キ者ナレハ速ニ本國ニ被追返可然旨言上ス。然ルニ信長公暫ク御思案有テ仰出サル、ハ夫昔年百濟國ヨリ佛像經卷ヲ渡セシヨリ以來今以テ佛法繁昌セリ。若又最上ノ佛法ニテモ可有ヤト家臣ニ仰テ洛陽四條坊門通リニ四町四方ノ地ヲ與ヘ一寺ヲ造立セシメ寺領五千貫ヲ與ヘ侍者等ハ本國ヨリ可呼寄旨被仰付。仍テ長崎往來ノ蠻船本國ニ通達セシニヤ翌年フヲテン、パテレン、ケリコリヤリス二人ヲ初メ數人渡來リ猶又献上物數ヲ盡シ捧ケケリ。信長公御目見被仰付彼等ヲ在住セシメラル。是ヲ南蠻寺ト稱ス。

一斯テ寺中ニ於テ教論說法等ノ事ハ無之洛中洛外ノ諸人或ハ野山ニ行倒レタル乞食非人難病ノ者廢疾者等ヲ寺中ニ集メ衣類食物ヲ與ヘ其病症ニ依テ内科外科ノ藥方ヲ用ヒ悉ク平癒セシメ又ハ貧窮ノ者ヲ寺中ニ置キ妻子等迄養育シケレハ其慈悲厚恩ヲ感スル者幾千萬ト云數ヲ知ラス。彼療養ノ内ニ蠻人等語リケルハ汝等難病貧苦ヲ受ルハ生得ノ因果ニ依レリ。我南蠻國ノ人民ハ天帝ノ教ヲ守ル故病苦貧窮ノ者一人モ無之汝等我教ヲ信用セハ現世後世共ニ安穩快樂ヲ得ヘシト。怪シキ宗門ノ唱言等ヲ教ヘ奇異ノ法術ヲ見セシムル

故愚痴蒙昧ノ者共皆其法ニ歸服スル事甚深重ナリシト也。年月ヲ經テ三好松永高山ヲ初大名旗本ノ歷々地頭代官其以下畿内諸國ノ人民彼宗門ニ傾キ靡ク者際限無リケレハ信長公此事聞及ハレ惣シテ佛法ヲ尊信スル檀家ノ者ハ謝儀禮物ヲ捧テ其教ヲ授カル習ナルニ彼徒ハ檀家ニ財物ヲ與ヘテ法ヲ勸ルハ心得難キ事ナリ。其上最初日本ニ渡來ルハ商賣ノ爲ナル由ナレハ金銀利倍ヲ貪リ求ムヘキ事ナルニ病苦ノ者ヲ療養シテ許多ノ費ヲ厭ハス遠海ヲ凌キ來リ無益ノ慈悲ヲ施スハ是唯事ニ非ズ。必定己ガ恩惠ヲ以テ此國ノ人民ヲ味方ニ懷ケ遂ニハ我國土ヲ奪ヒ取ヘキ謀計ナルヘシ。先年刑部正則カ詞ニ少モ違ハスト。大ニ後悔在テ彼寺ヲ破却シ蠻僧等ヲ罪科ニ行ハント甚タ忿激ノ御氣色成シカトモ諸國騷亂ノ時節故暫ク差置ル。折節秀吉公毛利輝元ト對陣ノ時明智日向守ニ後詰被仰付。信長公ハ京都本能寺ニ御出駕之處。明智逆心ヲ起シ信長公ヲ討奉ル。秀吉公程ナク明智ヲ滅シ給ヒ其事空シク成シト也。

秀吉公南蠻寺破却之事

豐臣秀吉 一天正十五丁亥年秀吉公筑前御滞留ノ時長崎頭人共推參シ數年南蠻人邪法ヲ

耶蘇會寺領を沒收し長崎を御料所となす

鍋島飛騨守信生(後鍋島加賀守直茂)長崎代官なる

南蠻寺破却

廿六聖人殉教

授ケ神社佛閣ヲ破却セシ事委細御聞ニ達シ藤堂佐渡守ヲ長崎ニ被差越伴天連共早々可令歸國旨御條目ヲ以テ被仰渡翌十六戊子年長崎ヲ御料所ニ被仰付爲御代官鍋島飛騨守ニ當所ヲ御預ケ置ル旨御條目ヲ以テ被仰出之。第一卷ニ見ヘタリ

一其後秀吉公諸臣ヲ集メ被仰出ハ去ル弘安年中蒙古韃子軍船數千艘ヲ催シ九州迄襲ヒ來ルト云ヘトモ諸處ノ神社各靈驗在テ神風大ニ起リ彼軍船悉ク沈溺シ兵卒各滅亡セリ然レハ異國ヲ恐ル、ニハ足ザレトモ此國ノ人民正道ヲ捨テ佛神ヲ破却シ邪法ヲ信用スル者ナラハ後年必國ノ騷亂ト成ヘキ事ナレハ切支丹ノ邪法急度禁制スヘキ旨ニテ増田右衛門尉ニ軍兵千餘人被差添京都四條坊門ニ被差遣伴天連共搦捕テ長崎ニ送リ南蠻寺ヲ燒拂ヒ五畿内ヲ初諸國ニ於テ邪宗門ニ傾キシ者共一々改宗セシメ若難澁スル者アラハ急度死罪ニ行ハルヘキ旨被仰出之。

一文祿三甲午年京大坂ニ隱レ居タル伴天連六人黨類ニ拾餘人搦捕テ長崎ニ送リ斬罪セラル。

邪教主意訴人出事

耶蘇教徒訴人

一慶長十六辛亥年肥後八代ヨリ僧一人駿府ニ參上シ訴訟ヲ願フ者アリ某ハ前

邪教の根源

大帳

ノ肥後國主小西攝津守造立有シ切支丹寺ノ住僧ナリ然ルニ當住ノ僧某ニ無體ノ難題ヲ申掛ケ寺ヲ追出セリ仍テ彼僧ヲ召レ是非ヲ御糺明被成下ナハ爲御忠節切支丹宗門ノ主意ヲ言上可仕由依之相手ノ僧ヲ駿府ニ召レ委シク御詮議有シニ相手ノ僧非分ナル御裁判ノ上令追罰ラル伴ノ僧御高恩ヲ有難ク奉存切支丹邪教ノ根源ヲ言上仕ケルハ抑彼南蠻國王己カ領地五ヶ國ノ物成ヲ其料ニ當テ毎年商船ト名付テ金銀珍寶織物器物等ヲ日本ニ渡シ諸人ニ邪宗門ヲ勸入ヘキ旨年々伴天連入滿方ヨリ大帳ヲ作り何ノ年ニハ何千何百人ヲ勸入タル由其人數ニ應シテ褒美ノ諸品ヲ與フ昔年ヨリ此方術ニテ南海ニ有之呂宋國ノビスパンヤ國々モ南蠻人方ヨリ珍奇ノ財物等ヲ贈リ初ハ僅ハカリノ地ヲ借り寺ヲ立密々ニ切支丹ノ法ヲ勸シカハ其國ノ愚民共彼宗門ヲ信用シテ遂ニ南蠻人ニ一味同心シ我國ヲ軼ク蠻人方ニ奪取シメタリ扱其後ハ奪取シ國々ニ蠻人方ヨリ守護人ヲ居ヘ置其地出產ノ諸物金銀一切己カ得分トシ三年目ニ其諸品ヲ本國ニ運送セシメシ由言上ス猶又畿内西國諸處ニ

吉利支丹宗門禁制

隱レ居タル僧徒共數多駿府ニ被召稠シク御穿鑿ヲ遂ラレシニ件ノ僧言上之趣一々明白ナリ。於是切支丹ノ御制度天下ニ一統爲嚴厲之旨被仰出タリ。則五畿内ノ御改ニハ板倉伊賀守ニ被仰出、西國方ノ御改ニハ山崎長門守ニ被仰付、京大坂堺、奈良、伏見、其外諸處ニ於テ改出セシ邪宗門ノ者共悉ク五條河原ニテ斬罪セラレ。尤彼徒ノ内ニモ邪心ヲ翻シ正道ニ歸誠シ改宗ヲ願フ者ヲハ轉ト名付テ助命セラレ。

大久保石見守狂亂

一慶長十八癸丑年大久保石見守狂亂ニテ死失セリ。死後諸國金山ノ御勘定有シニ莫太ノ私慾アリ。所持ノ金銀財物ヲ點檢有シニ寢間ノ下ヨリ二重ナル石櫃ノ内ヨリ一ツノ箱ヲ取出セリ。其箱ノ内ニ南蠻國ニ日本ノ寶物、武器等ヲ渡シタル目錄又彼國ヨリ責來ラシムベキ密通ノ書狀アリ。又大名旗本ノ内一味連判ノ誓書其外年々切支丹宗門弘マリタル趣ノ書狀數百通アリ。此旨御聞ニ達シ其親類不殘嚴科ニ處セラレ、縁者共斬罪或ハ流罪追放等被仰付、其後大名旗本ノ内何タル子細モ定カニ知レス、身上滅亡セシ人々アリ。是皆石見守誓書ニ有シ連判ノ衆中ナリシ由ノ風聞アリ。一同年大久保相模守ニ被仰付、五畿内中國西海諸處ニテ邪宗門ノ黨類共ヲ搦捕

慶長十九年高山右近内藤飛騨守等呂宋へ遠流

阿媽港へ流刑云ふは田邊氏の誤謬

長崎吉利支丹寺破却

切支丹寺燒捨之事

一慶長十九甲寅年山口駿河守ヲ被差越長崎地内ニ建置シ切支丹寺拾一ヶ所、近國諸家ニ被仰付寺内ノ佛像ヲ破裂シ堂塔諸具共ニ悉ク打碎テ燒捨ラル。

鍋島信濃守

西御役所境内ニ二ヶ所

寺澤志摩守

春徳寺地内ニ一ヶ所

有馬左衛門佐

爐粕町ニ一ヶ所

勝山町ニ一ヶ所

桶屋町ニ一ヶ所

十善寺村ニ一ヶ所

松浦壹岐守

本博多町ニ一ヶ所
今町ニ一ヶ所

大村民部少輔

立山御役所境内ニ一ヶ所
本蓮寺地内ニ一ヶ所

右拾壹ヶ所被燒捨。其後駿河守ハ茂木ヨリ乘船ニテ島原ニ渡リ諸處餘黨ノ者稠シク穿鑿有テ直ニ歸府セララル。

阿蘭陀人忠節之事

一元和三丁巳年阿蘭陀船洋中ニテ唐船造リノ船ニ行逢シニ船中ニ伴天連ト思シキ者數人見掛シ故其頃ハ阿蘭陀平戸ニ着船ノ砌ナレハ彼船ヲ引來リ松浦壹岐守ニ此旨訴へ出タリ。壹岐守ヨリ長崎御奉行所ニ申越サル。即刻長谷川權六平戸ニ行向ヒ委細穿鑿ヲ遂ラレシニ此船泉州堺常陳ト云者呂宋ニ爲商賣相渡ル船ナル由船中ヨリ蠻國文字ノ書翰數通搜シ出ス。平戸通詞森助右衛門ニ和解被仰付之處蠻國ヨリ日本ニ隠レ居ル伴天連方ニ遣ハス書狀ニテ日本ニ於テ切支丹宗門ニ傾ク者過半有之ハ即刻注進スヘシ軍船數多可差越ナト

阿蘭陀人忠節

堺常陳のこゝ

ト書述タリ。依之船中ノ伴天連並常陳ヲ長崎ニ搦來リ火焙其外船ノ者不殘斬罪セララル。其節阿蘭陀人ニ忠功ノ御褒美成下サル。

伴天連共流罪之事

寛永七年邪宗門の
乞食七十人呂宋配
流
乞食穢多の宗旨改

一寛永七庚午年大坂ヨリ邪宗門ノ乞食七十人差送ラル。但此者共伴天連ニテ年々宗門改嚴密ナル故御改ヲ受マジキ爲乞食ト成リ諸方ニ隠レ居タルヲ搜出サレ長崎ニ差送ラル。則呂宋ニ流罪仰付ラル。但是ヨリ以後乞食穢多共ニ宗旨改令蹈繪ラル。

地下人正道ニ歸誠シ神社尊敬之事

一去ル天正年中ヨリ邪宗門發興シテ長崎地内ノ神社佛寺殘ラス破却セリ。依之慶長ノ頃ヨリ諸宗ノ僧徒ヲ招キ佛寺數ヶ所開創有テ宗門改ノ證文ヲ出サシム。然レトモ神道ヲ尊敬スル者甚稀ナリシ處寛永ノ初年青木氏金重院當地鎮守ノ諏方社再興有リ。然ルニ地下人ノ内表ニハ改宗ノ證文ヲ出スト云ヘトモ内心ニ猶邪執ヲ離レス空轉スル者共神社造營ノ事ヲ妨ル者間々多カリシト

佛寺復興

青木賢清諏方社再興

造營の妨害
奉行榊原、同神尾
兩氏の英斷

神社尊崇の風初め
て興る

諏方社の祭禮

南蠻人出島に限り
居留を命ぜらる

也。爰ニ寛永十一甲戌年御奉行榊原氏神尾氏惣町中ニ御觸事アリ。年來邪宗門ノ御制禁嚴重ナリト云ヘトモ市中ニ於テ實ニ改宗セシ者ト空轉シタル者トノ差別分明ニ相知兼ル事ナレハ町外ノ地ニ柵ヲ張り外廻リヲ稠シク警固セシメ一人モ殘ラス柵中ニテ燒殺シ市町ニハ他國ノ商人等ヲ招集メテ我朝ノ神德ヲ崇メ鎮守ノ祭禮等ヲ修セシムヘシト急度被相觸ケレハ諸人共ニ恐怖ヲ成シ是迄外道ノ魔術ニ迷ヒ來リシ罪科悔テモ猶餘リ有何トソ御赦免有テ一命ヲ助ケラレナハ自今以後毛頭疑惑ノ餘念無之偏ニ正道ニ歸誠シ御神事御祭禮ノ時地下人皆々誠心ヲ盡シ尊奉仕タキ旨願訴ヘケリ。於是其年諏方大明神ノ御祭禮初リ神輿御旅所渡御同還御共ニ惣町中順番ヲ立御先供ノ踊ヲ勤メ御神樂御湯立流鏑馬等御神事ノ儀式無殘處相調テ諸人全ク神德ヲ尊敬信仰シ奉ル事ト成レリ。

南蠻人出島ニ令在住事

一 寛永十一甲戌年ヨリ海中ニ出島地形ヲ築立シム。但是迄南蠻人當表町宿ニテ諸人ト會合スル事甚不可然トテ今年ヨリ三年ヲ經テ寛永十三年出島屋敷成就ス。仍テ蠻人共不殘出島内ニ在留セシメ表門ニ番人ヲ附置商賣向ノ諸用ニテ往來スル者ノ外一切出入ヲ禁止セラル。

蠻人ノ種子阿媽港ニ被相渡事

蠻人の種子阿媽港
へ放流

一 南蠻人はマテ長崎在留ノ内出生シタル血脈ノ種子共御穿鑿ノ上男女二百八十七人阿媽港ニ被相渡。但親子兄弟相離テ市中可及騒動難計由ニテ大村家ニ被仰遣彼地ヨリ數十人被差越警固有テ乗船セシメラル。

薩摩ヨリ南蠻船送來事

薩摩より南蠻船送
來る

一 寛永十四丁丑年薩摩ヨリ南蠻船一艘送來ル。此船琉球ニ漂着ノ由。松平薩摩守ヨリ琉球ニ遣置シ役人捕之薩摩ニ挽來シヲ直ニ當湊ニ差送ラル。稠シク被遂御穿鑿之處伴天連六人日本人三人邪宗門ヲ弘ムヘキ爲日本ニ忍ヒ渡リタル由白狀ス。則禁獄有テ江府ニ被仰上。此時九州大名中ニ御奉書被成下之。

今度きゞ玄さん宗門爲可弘彼國南蠻人六人日本人三人就差越於松平薩摩守領内捕之遂穿鑿處右之趣白狀然者南蠻人構僞弘宗門ニ付而日本

九州大命中に御奉
書

渡海之儀先年被停止其砌被仰出_ル寫書物進_ル被守書物面之通領内浦々能々可入念旨上意ニ_ハ恐惶謹言

八月十四日

阿部豊後守

松平伊豆守

九州大名中ニ宛所有

邪宗門之者被召捕事

金鑄次兵衛召捕らる

一當地古川町ニ次兵衛ト云者邪宗門ナル由訴人アリ。彼者ハ魔法ヲ覺シニヤ目前ニ有之ト云ヘトモ忽見失フ程ノ者ニテ寛永十二年當地ヲ出奔セリ。近國ニモ被仰越稠シク被遂御詮議ヲ。此時九州諸處ニ關所ヲ居往來切手無之者一人モ通スマジキ旨被仰越。然ルニ寛永十四年六月十五日長崎村片淵助右衛門ト云者訴人ニ出ル故不意ニ右ノ次兵衛召捕之江府御窺ノ上斬罪セラ_ル。彼者常ニ金鑄ノ脇指ヲ差シタル故異名ヲ金鑄次兵衛ト云リ。又戸町御番所ヨリ西ノ山際ニ大岩ノ横ニ裂タル内ニ十四五坪ノ穴アリ。彼者此内ニ隠レ住タル由。後年此所ヲ金鑄谷ト云傳フ。

戸町の金鑄谷

島原一揆征伐之畧記

天草島原の亂
概要原城は益田四郎以下三萬七千餘人籠城

一寛永十四丁丑年十月初頃ヨリ島原領有馬村之内原ノ城ト云古城ノ跡ヲ取立テ島原天草切支丹ノ黨類共天草四郎太夫時貞一説ニ家貞ヲ大將トシ小西攝津守沒落ノ浪人ヲ語ラヒ男女三萬七千餘人一揆籠城セリ。領主松倉氏ハ在府ナル故家老共細川鍋島兩家ニ加勢ヲ乞フ。然レトモ天下ノ御掟ニ隣國如何ナル事アリトモ御下知ナクシテ人數ヲ出スマジキ御定法ナレハ細川内清水伯耆四千餘騎ヲ卒シテ同國川尻ニ控ヘ、鍋島内諫早豊前三千餘騎ヲ卒シテ同國刈田ニ控ヘ、加勢如何ト窺居タリ。又豊後御目付牧野傳藏松平甚三郎林丹波守長崎御奉行所ニモ相届之。

上使板倉内膳正石谷十藏等亂徒鎮壓を命ぜらる

一江府ニハ注進櫛ノ齒ヲ引如クナレハ爲上使板倉内膳正石谷十藏一揆追討ノ仰ヲ蒙リ十一月廿六日島原ニ着シ諸處見分有テ十二月四日有馬表ニ着陣シ細川鍋島黒田有馬立花松浦諸家ニ爲上意一揆爲退治早々可有出陣旨御下知ニ依テ各軍勢ヲ備ヘテ有馬表ニ發向アリ。

一松倉島原城主寺澤天草領主在府ナリシニ御暇ヲ給ハリ夜ヲ日ニ繼テ松倉ハ有馬表ニ

出陣シ寺澤ハ天草ニ押渡ル。

長崎奉行出陣

一長崎御奉行是迄ハ南蠻船滯留中長崎在勤ニテ年々六月上旬長崎ニ着シ十月
中旬歸府アリ。此節兩御奉行共ニ在府ナリシ處上意有テ十二月五日長崎ニ着
同七日有馬表ニ出陣シ馬場氏ハ細川手ニ加ハリ榊原氏ハ鍋島手ニ加ル。長崎
表ハ大村家ニ被仰付家老物頭足輕等大勢差越シ長崎出口五ヶ所ニ番所ヲ居
ヘ堅固ニ相守シム。

長崎出口五ヶ所に
番所を設く

亂徒の善戰

一斯テ寄手ノ諸士山手ニ上リ見分セシニ籠城ノ體甚強盛ニシテ輒ク可攻落共
見エサル故諸手向陣ヲ構ヘ築山ヲ築井樓ヲ組上ケ日々火矢鐵砲ヲ稠シク打
掛レトモ少ム疼ム氣色ハ無リケリ。依之上使御下知ニテ天草丸出崎ヲ鍋島勢
三ノ曲輪ヲ有馬立花松倉責掛ラルヘシトテ、十二月二十日早朝責寄ルニ城中
ヨリ鐵砲ヲ打出シ手痛ク防戰ケル故寄手手負討死多ク後陣モ續カス是非ナ
ク引拂ケリ。

松平伊豆守戸田左
門等派遣せらる

一重而爲御目代松平伊豆守戸田左門頭ヲ可被差向之旨内膳正聞之是迄我等在
陣ノ功モ無之今又御目代ヲ被差越之條誠ニ武門ノ面目難相立仕合也ト一圖
ニ覺悟ヲ極メ十二月晦日諸將ヲ招キ惣攻ノ評議有之。明ル寛永十五年正月元

板倉内膳正戰死

日寅中刻諸勢一同ニ押寄テ関ヲ上ケ敵城ニ攻掛ル。城中ヨリ拋松明ヲ出シ鐵
砲石礮ヲ打炒沙ヲ振ヒ掛ケ種々方術ヲ盡シ防戰フ故味方手負討死數ヲ知ラ
ス。内膳正ハ三ノ丸ト出丸ノ間塀下ニ付諸勢ニ下知セラレシニ城中ヨリ石礮
ニテ兜ノ天邊打碎キ左ノ乳ノ上ヲ鐵砲ニテ打抜キ即時討死也。十藏モ手ヲ負
諸勢皆々力ヲ失ヒ退陣セリ。

松平伊豆守戸田左
門寺に有馬着陣

一正月四日伊豆守左門頭五千餘騎ニテ有馬表ニ着陣アリ。諸家ヨリモ大勢馳加
ハリ諸國ノ使者上下八百餘人都合十二萬四千餘騎原ノ城ヲ圍ム事稻麻竹葦
ノ如シ。

上使井上、兼松、
日根野其他追に有
馬へ到着

一江府ヨリハ爲上使井上兼松日根野石河宮城本郷市橋水野ノ人々追々有馬表
ニ被差越諸將ニ向テ味方ノ人數損セサル様ニ方術ヲ以テ退治有ヘシトノ上
意ニテ敵味方ノ様子見分アリ。兩三日宛逗留シ各歸府アリ。

阿蘭陀船より砲撃

一寄手ノ陣ヨリ晝夜大筒ヲ打掛ケ黒田細川番船ヨリモ稠シク鐵砲ヲ打掛シム。
又平戸ヨリ阿蘭陀船ヲ呼寄セ海手ヨリモ大石火矢ヲ仕掛シムレトモ城高ク
シテ業不成城中ヨリハ見下シテ阿蘭陀人二人討落ス故頓テ平戸ニ歸シム。

水野日向守有馬着

一二月廿三日水野日向守有馬表ニ到着アリ。日向守老功ノ人ナレハ陣中評議ノ

差圖等モ有ヘシトノ上意也。則翌廿四日寄手ノ諸將不殘會合アリ。左門進ミ出テ城中ノ一揆共萬死ニ極メタル者共ナレハ力戰ニテハ叶難カルヘシ殊ニ味方ノ人數不損様ニトノ追々上意ナレハ彼等長陣ノ事兵糧詰ニ致サハ頓テ干殺スヘキ旨申出ラル。日向守兵糧詰モ無例事ニハ非サレトモ去冬以來上使板倉ヲ初諸家歴々ノ武士共多ク討死サセ今ニ成リ其通ニハ成マシ無二無三ニ切崩サレ可然由也。仍テ明後廿六日惣攻ノ評議手配リ等有之皆々陣屋ニ引取ル。其日廿四日暮方ヨリ廿六日晝マテ大雨ナル故城攻延引ス。廿六日夕ヨリ晴天ニ成シ故明廿七日諸將左門頭陣所ニ會合シテ廿八日惣攻有ヘント觸ラレケル。

原城落つ

一二月廿七日早朝戸田左門頭陣所ニ諸將不殘會合シ明廿八日惣攻ノ評議有之己ノ刻ハカリニ皆々可有退出處井樓番ノ者嶮シキ聲ニテ鍋島勢城ニ乗入ノ由呼ハリタリ。各是ヲ見ルニ最早火ノ手ヲ上ケ鍋島勢乗込ケレハ伊豆守此上ハ先陣後陣ノ議論ニモ及ハス諸勢一圖ニ可被攻掛ト有シ故皆々我陣屋ニ歸リ急キ軍兵ヲ備ヘテ混々ト押寄せ堀ヲ乗越ヘ持口ヲ打破リ大ニ挑ミ戰テ城中ノ者殘リ少ニ討捨タリ。陣中ノ事ハ繁多ナル故畧之。段々其日モ暮ケレハ諸將各本丸二ノ丸三ノ丸ニ詰掛テ家々ノ旗印ヲ押立夜ノ明ルヲソ相待ケル。翌廿八日早朝諸勢馳廻リ一揆ノ男女一人モ不殘切殺シ城中悉ク平均ス。中ニモ細川内陣野佐左衛門大將四郎ヲ討取ル。其後諸家ヨリ人夫大勢差出シ城中ノ屋形石垣等悉ク破却シ三月四日五日惣陣拂有之同中句諸將各歸國セララル。一其後大將四郎並大矢野小左衛門有江堅物三人ノ首長崎ニ送來リ出島門前ニ梟首セララル。

天草四郎其他三人の首を出島門前に梟首

松倉氏改易

寺澤氏天草を召上げらる

鍋島氏、長崎奉行、榊原氏軍法に背き、したため閉門

一松倉長門守領内島原ノ者一揆籠城ニ及フ事不念ノ至也トテ父子共ニ御改易被仰付。又寺澤兵庫頭領地天草ヨリ一味同心ノ者有之御答ニ依テ天草四萬石被召上タリ。

一於江府今度鍋島勢御軍法ニ背キ城乗仕ニ付信濃守閉門被仰付又榊原飛騨守モ無調法ノ旨ニテ同前閉門被仰付程ナク御赦免有之。

南蠻船渡海一切御制禁之事

一寛永十五戊寅年太田備中守長崎ニ被差越向後南蠻人日本渡海一切御制禁被仰出。則在津ノ蠻船同出島在留ノ蠻人共一人モ不殘歸國被仰付向後決テ渡來

南蠻人日本渡海一切制禁

マシキ旨稠シク被仰聞。尤去ル天正年中邪宗門ハ御制禁ニテ商賣一偏ニ渡來事ハ御免ニテ猶又去々年ヨリ蠻人ヲ出島屋敷ニ被差置之處一圓邪宗門ノ餘黨斷絶セス。剩ヘ今度島原一揆及籠城事ナル故。右之通急度被仰出之由也。此時出島明屋敷トナル。

南蠻船入津直ニ被追返事

寛永十六年南蠻船入津追返ヘス。蘭、英人混血兒等放流。一寛永十六己卯年南蠻船三艘入津シ前々之通渡海御免被成下タキ願申上タリ。則江府ヘ言上之處井上筑後守當表ニ被差越去年渡海御制禁之趣急度被仰出之處今度押テ渡リ來事甚以不法至極ナリ。此節迄ハ被差免之間若重テ令渡海ハ急度御仕置可被仰付旨直ニ令歸帆ラル。且又此節長崎町中ニ有之諸厄利亞人ノ種子五十人蠻國ニ相渡サル。

南蠻船燒捨之事

南蠻船燒沈 一寛永十七庚辰年五月十七日南蠻船一艘七十四人乗組入津ス。此船又々渡海御免ノ願トシテ渡來ル由即刻江府言上有之處同六月六日上使加令爪民部少輔

南蠻人六十一人切捨
本船は西泊スズレ
の海上にて燒捨

被差越去々年以來渡海御制禁之旨稠敷被仰渡之處又々今年モ渡來リ日本ノ御國法ヲ蔑如スルノ仕方其罰科甚以輕カラス不殘死罪可被仰付ト云ヘトモ日本ノ御法度ヲ本國ノ者共ニ告知シムヘシトテ鬪ヲ取セ六十一人切捨十三人助命アリ。本船ハ積荷物金銀等其儘ニテ西泊前ス。レノ海上ニテ燒捨ラル。彼十三人ハ唐船造リノ小船一艘下シ給リ飯米薪水等相添七月十九日歸帆セシメラル。

薩摩ヨリ邪宗門之者送來事

薩州より伴天連其
他送來る
一同年薩摩ヨリ伴天連五人邪宗門ノ日本人二人領内下飯島洞穴ノ内ニ隠レ居タルヲ其所ノ役人搦捕シ由。當表ニ被差送稠シク被遂御穿鑿之處先年日本ヨリ追返レシ伴天連共阿媽港ニ居住シ今度爲謝禮銀二貫目唐船ニ差遣シ便乞薩摩地方ニ船ヲ寄セ彼島ニ卸シ置唐船ハ行方不知成タル由白狀ス。則江府言上有之處不殘斬罪仰付ラル。

筑前ヨリ邪宗門之者送來事

筑前より伴天連其
他送來る

通伺西吉兵衛同名
村八左衛門

目明 仲庵

西國大名中へ御奉
書

一寛永二十癸未年五月十二日筑前國梶目ノ大島ニ小船一艘十人乗組陸ニ上リ
水ヲ取ル其形月代ヲ剃リ日本風ノ如キ衣類ヲ着シタレトモ眼サシ鼻ノ高サ
常ナラサル故所ノ役人ニ告知シム仍テ捕ヘントスル内急キ船ニ乗リ帆ヲ揚
テ逃出ル跡ヨリ追掛ケ同國地ノ島ニテ捕之筑前城下ニ注進セリ依是松平右
衛門佐方ヨリ右ノ者共長崎ニ差送ラル御奉行山崎氏稠シク被遂穿鑿之處伴
天連共邪宗門ヲ勸ヘキ爲日本人ノ形ヲ學ヒ相渡ル由白狀セリ即刻江府言上
有シ處其者共江府ニ可差越旨被仰付則通詞西吉兵衛名村八左衛門目明シ仲
庵ヲ相添差上ラル此時西國大名中ニ御奉書被成下之

今度筑州大島ニ異國伴天連四人いるまん一人同宿相渡ル處松平右衛門佐
番之者相改捕ル則從右衛門佐長崎奉行山崎權八郎所ニ追々注進ル常々入
念ル故小船を以密々渡ル處早速見出シ搦捕ル儀御機嫌之御事ニル然之先
年被仰付ル通於御領内海上見渡ル所不斷番之者差置彌無油斷穿鑿可有之
旨上意ニル此由可被申達ル恐惶謹言

五月廿九日

阿部豊後守
松平伊豆守

江戸小日向切支丹
屋敷

船付大名中宛所有之

斯テ右ノ者共江府ニ來着シ委細被遂御穿鑿ノ處彼等非義ヲ悔ミ宗門ヲ轉フ
ヘキ旨願訴フ依之江府小日向ニ切支丹屋敷ヲ被立彼者共一生牢下シ仰付ラ
ル

林友官邪宗門之者訴人之事

唐人林友官邪宗門
之者訴人
林有官異名小歌八
兵衛

一正保元甲申年長崎在津ノ唐人林友官異名小歌八兵衛ト云者アリ此者日本ノ
刀脇指ヲ唐國ニ渡スヘキ密事露顯シ入牢被仰付既に御仕置可被仰付ノ處彼
者切支丹訴人ニ可出由ニ付助命被差置處林友官追付跡船ヨリ邪宗門ノ者可
渡來旨訴之然ル處同年八月廣東出ノ唐船一艘入津ス彼船委細被相改處阿媽
港ノ事書シ物ヲ搜出ス船中ノ唐人稠シク拷問有シ處黃五官楊六官其外邪宗
門ノ者四人有之由白狀ス此旨江府言上有之處井上筑後守家老岡島左馬允當
表ニ被差越仍テ御奉行山崎氏立會ニテ稠シク被遂御穿鑿ノ處此五官六官非
義ヲ悔ミ爲御忠節訴出ルハ跡船ヨリ又々黃順娘周辰官ト云邪宗門ノ者可渡
來之旨

黃五官楊六官

黃順娘、周辰官
其他三人
合せて五人

然ル處同十一月廣東出ノ唐船一艘入津ス。則訴人ノ者ヲ見セラレ稠シク被遂御穿鑿之處黃順娘周辰官其外三人都合五人邪宗門ノ者ナル由白狀ス。則船中ノ者入牢被仰付追々江府言上有シ處同十二月林友官外ニ唐人二人共ニ三人通事頼川藤左衛門相添被差越之處於江府猶又御僉議有之處長崎ニテ白狀ノ通訴之。

宗門改の目明

此唐人共阿媽港ニ數年在住シ邪宗門ヲ授リ去ル寛永十七年長崎ニテ蠻船ヲ燒捨ラレ其節十三人助命ニテ被追返シ事等委シク物語ス。猶又此以後邪宗門ノ者渡來事モ可有之トテ六人ノ者ハ命ヲ助ラレ宗門改ノ目明ニ被仰付御扶持方被下長崎ニ歸シメ古川町ニ有之御闕所屋敷ヲ給ル。右邪宗門ノ者九人内二人ハ獄中ニテ病死七人ハ穴釣被仰付二艘ノ唐人共皆々追返サル。但右ノ目明唐人共貞享ノ頃マテハ存命ニテ入津ノ唐船ニ乘リ船中相改ル。段々病死以後目明斷絶ス。

南蠻船二艘入津之事

正保四年南蠻船二艘入津

一正保四丁亥年六月廿四日南蠻船二艘入津セリ。即刻通詞ヲ以テ年來南蠻船渡

海御制禁ノ處何トテ渡來ル哉ト仰聞ラル。蠻人共前々之通渡海御免ノ御願ノ爲ニ南蠻哥阿國ヨリ使者船ヲ差越スノ由申出ル。同廿六日二艘ノ船湊ノ内身投岩ノ前ニ入船セシム。
哥阿ハ南蠻國ノ地名也。南天竺ノ近方ナリ。阿蘭陀人スラアタト云。意大里亞國布留都葛兒國、諸厄利亞國、此三ヶ國ノ者共呂宋、阿媽港、哥阿三所ノ地ニ在留スト云。

蠻船の太さ

一艘 長二拾八間 横七間 深サ八間

石火矢二拾四挺アリ。外ヨリ見ヘタル分

一艘 長二拾四間 横六間 深サ四間

石火矢二拾二挺アリ。外ヨリ見ヘタル分

二艘乗組人數合四百五六拾人

使者名 ゴンサアルホウ、テシケイラ、テサウサ

是哥阿國王ノ親類ナル由

一人名 トウルト、デ、コスタ、アホフレイ

右之趣委細江府言上有之。松平筑前守ハ同廿八日當表ニ着アリ。西國在城ノ大名各當表ニ發向アリ。在府ノ諸家ヨリモ家老物頭等數多軍勢兵船等ヲ揃ヘテ來着有之。御奉行馬場氏諸家ノ人々向テ彼船其儘ニ差置若江府ノ御下知無之内不意ニ馳出ル者ナラハ無詮事ナルヘシト種々評議アリ。湊口ノ東西女神男ノカメオ神ト云岩アリ。此岩角ヨリ大綱ヲ引渡シ、船數百艘ヲ並テ繫キ合大ナル材木ヲ簀ノ如クシ、人馬ノ通路モ可成程ニ船橋ヲ掛渡、湊口ノ海上東西三町四拾三間陸路ノ如ク成タラハ彼蠻船容易ク馳出マシキトノ支度也。則諸大名家當湊ノ内外諸處ニ陣所ヲ構ヘテ嚴重ニ警固有之。

女神男神の間に船橋を掛渡す

諸家軍勢兵船數左ニ記

諸家軍勢兵船數

筑前福岡城主

松平筑前守

陣所

西泊ウツボ 戸町ウラ
立上タテノカミ 飽ノ浦ウツボ

人數 一萬千七百二十人

內四千九百五拾四人 水主

船數 四百五拾艘

內六拾一艘 早船

肥後熊本城主

細川肥後守

陣所

外木鉢キバチ
船橋ノ東

人數 一萬三百一人

內四千八百九拾六人 水主

船數 三百二拾艘

內八拾艘 早船

肥前佐嘉城主

鍋島信濃守

陣所

深堀 高鋒
香燒島

人數 八千三百五拾人

內三千三百五拾人 水主

船數 三百二拾一艘

內三拾艘 早船

上使 伊豫松山城主

松平隱岐守

陣所

船橋ノ東西

人數 六千三百拾一人

內二千六百五拾人 水主

船數 九拾三艘

內五拾四艘 早船

同 伊豫今治城主

松平美作守

人數 千百九拾人

內五百六拾八人 水主

陣所

船橋ノ東西

船數 八拾艘

內拾一艘 早船

筑後柳川城主

立花左近將監

人 三千八百七拾人

內八百人 水主

陣所

香燒島ノ後

船數 九拾艘

內拾一艘 早船

肥前唐津城主

寺澤兵庫頭

人數 三千五百五人

內六百八拾人 水主

陣所

内本鉢

船數 九拾艘

內五拾一艘 早船

豊前小倉城主

小笠原信濃守

人數 千二百七拾八人

內三百五拾人 水主

陣所

戸町大浦之間

船數 八拾艘

內拾五艘 早船

肥前大村城主

大村丹後守

人數 二千六百三人

內千二拾一人 水主

陣所

大浦

船數 三拾艘

內拾艘 早船

長崎町外惣見廻リ

肥前島原城主

高力攝津守

人數 千百人

內五百三拾人 水主

陣所

戸町ノ邊

船數 三拾艘

內拾一艘 早船

總 船 致

惣人數合 五萬二百二十八人

内 一萬九千七百九拾五人 水主

船數合 千五百八拾四艘

内 二百九拾八艘 早船

上使井上筑後守奉
行山崎權八郎

斯テ七月廿八日上使井上筑後守御奉行山崎權八郎當表到着ニテ御奉書持參
松平筑前守ニ被相渡之。

松平筑前守への御
奉書

一筆令啓上ハ黑船長崎着津一月廿八日晚彼地ニ被相越ハ段從高力攝津守
日根野織部正馬場三郎左衛門注進之通及上聞ハ然レ彼船爲使者渡海其上
無異儀入船旁以不及行死罪其上最早長崎奉行中迄相達ハ旨遂相談彌被得
其意事閑不成様仕置可有旨被仰出ル可被得其意ハ恐惶謹言。

七月十二日

阿部對馬守

阿部豊後守

松平伊豆守

松平筑前守殿

右ノ御書拜見有之則御奉行所ヨリ通詞ヲ以蠻船之儀日本渡海爲嚴禁旨稠シ
ク被仰渡處今度又々赦免ノ願トシテ令入船段不法至極也決シテ御免無之條
急度歸國可仕旨被仰渡八月六日二艘ノ蠻船無異儀歸帆セシメ畢又諸家ノ人
數五萬餘人兵船千五百餘艘前後左右ヲ打圍ミ湊外迄見送ラル其行粧尤嚴厲
也蠻船出帆以後諸大名當表ニ五六日逗留有テ各歸城セララル。

大村領邪宗門ノ者刑罰之事

明曆三年大村領内
吉利支丹大崩れ

一明曆三丁酉年當地酒屋町ニ利左衛門ト云者アリ此者大村ニ知ル者アリ彼者
夜中利左衛門宅ニ來テ密ニ云ルハ大村領ノ内郡村松原村近方ニ邪宗門餘黨
一揆ヲ催シ近日長崎ニ押寄所々ニ火ヲ掛ケ金銀糧米等可奪取計略アリ其方
心安キ者ナル故内意ヲ知シムル間其節町中ニ火ヲ掛ケ味方ノ働キナサハ能
仕合ニ成シメント私語ケルヲ利左衛門聞届隨分一味スヘシト許諾シ妻子共
ニ申シ付酒食等ヲ與ヘ懇ニ饗應致サセ其身ハ直ニ酒屋町乙名役ノ方ニ行テ
右ノ趣ヲ相達ス乙名即刻御奉行黒川氏ニ訴出ル時刻ヲ移サス捕手ノ人ヲ出
サレ彼大村ノ者ヲ搦捕リ稠シク拷問有シニ邪宗門ノ殘黨數百人相催スノ次

第分明ニ白狀ス。仍テ黒川氏ヨリ大村因幡守方ニ被仰越、彼地村々ニ於テ黨類共數多搦捕、追々長崎ニ被差送、委細被遂御穿鑿、江府言上有之。依御下知百三十餘人、穴釣、刎首、其外平戸、島原、佐賀ニ被相渡、都合五百餘人、刑罰アリ。右利左衛門ニ爲御褒美銀拾二貫目下シ給ル。

豊後ヨリ邪宗門之類族送來事

豊後ヨリ類族送來

一萬治三庚子年以來、豊後國臼杵、竹田、杵築、鶴崎、諸處ヨリ邪宗門類族ノ男女數多當表ニ差送ラル。數年被遂御僉議處、皆々親類ノ中ニ少々宗門ノ沙汰ヲ得シ者有之由、年久シキ事ニテ我々ハ如何様共不存旨申シ、訣相立無相違趣、江府御窺之上、御免ニテ皆々本所ニ令歸ラル。

踏繪鑄造之事

踏

繪

一邪宗門御制禁ノ趣、慶長元和ノ比ヨリ年々嚴密ニ被仰付、正道ニ歸誠シ、改宗スル者ニハ、其寺ヨリ宗旨改メ、請合證文ヲ出サセ、猶又切支丹ノ佛像ヲ紙ニ繪書テ一人宛ニ踏シメラル。是ヲ踏繪ト云。然ルニ數人ニ踏シムル事ナレハ、繪紙破

裂故、其後ハ木板ニ被佛像ヲ彫込テ踏シメラル。是ヲ繪板ト云。是モ數年ノ後、木板ヲ踏破ル。依之、寛文九年當地本古川町ニ祐佐ト云鑄物師有之、此者ニ唐銅ニテ彼繪像ニ拾枚令鑄ラレ、後年迄是ヲ用ラル。

諸厄利亞船入津之事

延寶元年英船入津

一延寶元癸丑年五月廿五日、諸厄利亞船一艘入津セリ。則通詞ヲ以如何様ノ訣ニテ渡來ルヤト御尋有之。彼者共昔年阿蘭陀人同前ニ商賣御免ノ御朱印頂戴シ、數度平戸ニ相渡シ處、其後國用繁ク、四拾餘年中絶ニ及、仍テ其節ノ御書ナル由書物一通持渡レリ。則御披見有シニ、御朱印ニテハ無之、平戸ニテ取合セシ日本文字ノ書物ナリ。先ツ宗門ノ儀御尋有シニ、我々ハ御法度ノ切支丹宗門ハ會テ用ヒ不申旨答之。然ルニ諸厄利亞人ト阿蘭陀人兼テ不和ナル由ナリシカ、此度阿蘭陀人訴出ルハ、近年諸厄利亞國主ノ方ニ布留都葛兒國主ノ娘ヲ令嫁ユヘ國中ノ者共、常ニ南蠻人ノ交リ親シク有之由訴之。

船中頭人名 セイモンデルホウ

惣人數 八拾六人

船ノ長サ 拾九間 横 三間四尺七寸

深サ 三間 艦トモニテ高 四間

鐵砲 八拾三挺 劔 三百三拾九腰

鎗 二拾六筋 鹽硝 三拾五桶

石火矢玉 六百八拾四 小玉 五桶

右之分滯船中此方エ取上置。

其外石火矢數拾挺船中ニ有之。

右之趣委細江府言上有之。近國大名諸家ヨリモ人數ヲ差越シ警固アリ。日ヲ經テ江府ヨリ御下知有之。向後渡海永々御停止ノ旨被仰渡。七月廿六日令歸帆ヲル。但此船糧米等無之由依願、荷物ヲ賣拂セ、代銀高金子ニテ二百六拾兩三分銀九匁有之。此内ヨリ百七拾二兩三分糧米並諸色代相拂、殘金八拾八兩持歸ラシム。

阿媽港ヨリ伊勢之者送來事

マカオより伊勢の漂流人送來る

一貞享二乙丑年六月二日南蠻船一艘入津セリ。即刻檢使ヲ出サレ、御吟味有之處

蠻人ジユアン、バツテレス。マニヤル、キヤル二人ヲ始四拾七人乘組、日本人拾二人送來ル。阿媽港頭人ヨリ蠻文字ノ書付一通眞文字ノ譯文相添持參ス。蠻國年號千六百八拾五年トアリ。仍テ唐通事ニ譯文ノ和解被仰付處、其趣當二月七日阿媽港ノ内マル、ル、ハ、イ、ヲト云島ニ日本船一艘漂着ス。依之日本ヲ大切ニ存シ奉リワサト船ヲ仕立送進セシ由、勿論此船商賣ノ存念無之故荷物ハ少モ不積來由。

先ツ日本人共滯留ノ内切支丹ノ法義ハ教ヘサルヤト御僉議有之。蠻人共本ヨリ双方ノ詞通シ不申、殊ニ切支丹宗門之儀於日本嚴シク御制禁之段具ニ存シ居申ス事故、決シテ授ケ不申旨述之。

仍之拾二人ノ者御役所ニ被召漂着ノ始末被遂御僉議ノ處我々伊勢國度會郡ツカラエノ者、去子八月拾八端帆船江戶表ニ薪爲商賣十月廿三日品川ニ着船シ、商賣相遂ケ十一月中旬江戶ヨリ出船シ、豆州浦川ニ滯留仕、十二月廿五日出船セシ處其日暮方ヨリ伊勢大山沖ニテ北風烈ク吹出シ、三十二日ノ間山モ見ヘサル大海ニ吹流サレ、當丑正月廿六日一ツノ島ニ流寄シニ、阿媽港ト云所ナル由、二月五日其地ヨリ引船來リ、同七日陸地ニ上リタル所ニ、年比七十餘ノ女蠻人長崎

七十歳餘の女蠻人長崎の者

ノ者ニテ先年蠻人ノ種子此地ニ渡サレシ時ノ者ナル由、少々日本詞ヲ覺ヘ居テ、此女始終懇ニ通辨致セシ由、仍テ彼地宗門ノ事ハ不習ヤト御尋有シニ、双方詞不通ナレハ何事モ承リシ事無之由、且又船中ニ多葉粉五拾俵有之處、彼地ニテ代銀八百廿五匁ニ賣拂ハレ、船ハ解放シ船板ヲ銀六百目ニ賣拂、其内ヨリ百五拾目大工解賃ニ遣セシ由、綱碇帆道具ハ此船ニ積來レリ。右之段委細江府言上有之處、七月下旬御下知有之、南蠻人日本渡海御制禁ノ上ハ漂着ノ者送遣スニ及マシキ事也、若重テ日本人蠻國ニ漂着セハ、其地ニ差置ト成共、如何様共其方共心儘ニ相計フヘシ、向後共ニ決シテ此方ニ蠻船ヲ差遣マシキ旨稠シク仰渡サレ、糧米薪水ヲ與ヘラレ、八月朔日令歸帆ラル。

其間近國大名諸家ヨリ人數ヲ被差越警固有之、右拾二人ノ内七人ハ神社村ノ者ニテ五人ハ藤原村ノ者、御下知ニ依テ、藤堂和泉守ニ被相渡、各本所ニ令歸ラル。

薩摩ヨリ異人送來事

一寶永五戊子年十一月九日薩摩ヨリ異人一人送來ル。則永井氏別所氏立會ニテ

薩摩より伊太利人
シドツチを長崎へ
送來る

シドツチ江戸へ送
らる
通詞今村源右衛門
其他附添

被遂穿鑿處、彼者イタリヤ國ロウマ之者、名ヨアン・バツテレス、苗字シロウテ、宗旨キリス、ステ、ア、ン、カ、ツ、ト、ウ、リ、コ、ト云、身ノ長五尺八九寸、鼻筋高ク、色白ク、髮黒シ。日本風俗ノ如ク、月代ヲ剃リ、當六月頃ヨリ薩州領屋久島ニ來居タル由、書籍ノ如キ物八冊持居ル。日本詞ヲ書寫シタル物ト相見ヘタリ。日本詞ト蠻語取交テ云述ル。其訣分明ニ通達シ難シ。先ツ其身切支丹宗門ノ由願カマシキ事モナク、只宗門ヲ勸入ル様ノ事而已ヲ云出ス。食物ハ藥物ト覺シキ丸藥一ツヲ三十日ニ一度用テ飢ヲ凌シ由也。長崎來着ノ後ハ阿蘭陀人食物ノ如キヲ食ス。

段々御僉議之趣江府言上有之。翌六年丑九月廿五日御下知ニ依テ彼異人牢與ニテ檢使兩人、下役四人、通詞今村源右衛門、外ニ二人、町使六人、都合二拾六人相添、江府ニ差遣サル。於江府小日向ニ前々ヨリ有之切支丹屋敷ニ差置ル。彼異人毎日二汁五菜ノ御料理被仰付金二拾兩五人扶持被下置。扱又附添ノ人數ハ其翌寅三月長崎ニ歸着ス。

正徳四年シドツチ
詰牢
名村入左通辨

一正徳四甲午年三月右ノ異人御答ノ事有テ詰牢ニ移サル。其趣前年牢番ノ者兩人ノ切支丹宗門ヲ勸メ入タル由御聞ニ達シ、宗門御改横田備中守警固ノ者數十人引連ラレ、通詞名村入左衛門通辨ニテ御書付ヲ以テ只今迄馳走ヲ加ヘ差

シドツチ逝く

置ル、處、御制禁ノ邪宗門ヲ授ケタル段不届至極ナリトテ此度詰牢ニ移サル。彼異人其年ノ冬月極寒ノ砌凍死セシト也。

唐船ヨリ呂宋漂着日本人送來事

唐船、呂宋漂着日
本人を送來る

一寶曆六丙子年二月四日子四番船ヨリ呂宋漂流ノ日本人四人送來ル。仍テ被遂御僉議ノ處、初ノ内ハ唐國ニ令漂着ノ旨僞テ申出ルト云ヘトモ、嚴シク被遂御穿鑿ノ處、五年以前申年南部、豆州、筑前ノ者共都合拾五人乘組奥州灘ニテ十二月末大風ニ逢、翌西三月末何國共存セサル地方ニ乘着ノ處、此處呂宋ト云ル所ノ由、陸地ニ揚リ、寺ノ様ナル所ニ差置、米薪等相與ヘ、段々邪宗門ヲ勸ルト云ヘトモ元ヨリ日本御制禁嚴厲ノ旨承リ届居ルニ付、決シテ信用仕ラス。然ル處翌戊四月人數ノ内三之助一人是非ニ日本歸國相願フニ付、厦門ニ相渡リ、夫ヨリ日本ニ歸國仕ルノ由承及ニ付、此四人モ日本歸國ノ儀頻ニ相願ノ處、在寺ノ坊主、彼地ニ留リ令居住ニ於テハ、渡世等モ宜シク可爲致ノ旨達テ相留ル。自餘ノ拾人ハ彼地住居ニ相極ル故、蠻人共懇意深ク、銀米衣類等ハ不及云、銘々ニ家業ノ營ヲ授ケタリ。此四人歸國願ノ者ニハ、殊外手ヒトク取扱ヒ、一兩日食物ヲ與

ヘサリシ事モ有之、亥五月呂宋ヨリ出船シ、夫ヨリ厦門、寧波、乍浦ニ着ス。其地滯留ノ内、唐人共申聞ニハ、日本ニテ呂宋ノ事、白地ニ申出ルニ於テハ、必御仕置ニ可被仰付ノ間堅ク僞リ可然由申スニ付、四人ノ者、唐人申ス旨ヲ信用仕リ、於彼地三年ノ間御禁制ノ者共ヨリ養ヲ受シサヘ心外ノ儀ナルニ、剩ヘ是迄僞リヲ申上シ段、千萬誤リ入、後悔奉存ノ旨白狀セリ。仍テ委細江府エ言上有之處、日本御制度ヲ相守リ邪宗門ニ歸依不仕段神妙ニ被思召上之旨、皆々無難ニテ本所ニ可令歸之御下知有之。二人ハ筑前、一人ハ南部、一人ハ豆州ニ被令歸。第十二卷ニ見ヘタリ

長崎實錄大成

第八卷

田邊八右衛門茂啓編輯

阿蘭陀方來歴之部

阿蘭陀人並諸厄利亞人渡海之事

一慶長五年庚子年泉州堺ノ浦ニ大船一艘來着セリ。仍テ其意旨ヲ尋ルニ、阿蘭陀人並諸厄利亞人爲商賣願貴國ニ渡海セシ由訴之。即刻言上有之處、其船江府ニ可令乘廻トノ御事ナリ。然ルニ彼船南海ヲ乘廻リ遠州灘ニテ難風ニ逢ヒ相州浦川ニテ破船ス。此旨言上有之處、船中ノ人數陸路ヨリ可差越旨被仰下。則陸路ヨリ江戶表ニ參上ス。依之委細被遂御詮議處、彼者共日本渡海商賣仕タキ旨御願申上ル。則達上聞處、願之通御免被仰出。然共可令歸國乘船無之、江府ニ滞留セリ。其間御扶持等被下置、頭人共折々御城ニモ被爲召、外國筋ノ事等御尋子有之兩

慶長五年泉州堺の浦に阿蘭陀船入津
江戶へ乘廻
浦川にて破船
船中の人數陸路江
戸に至る

蘭人ヤン、ヨース
テン、英人ウイリ
ヤム、アダムス

長崎實錄大成 第八卷 阿蘭陀人並諸厄利亞人渡海之事

二八八

人ノ者ハ御屋敷拜領被仰付。ヤンヨウス阿蘭陀人居タル所ヲヤヨスカシト云。アン
ジ諸厄利亞人居タル所ヲアンジ町ト云リ。

阿蘭陀船平戸着船御朱印令頂戴事

慶長十三年紅毛船
平戸着船

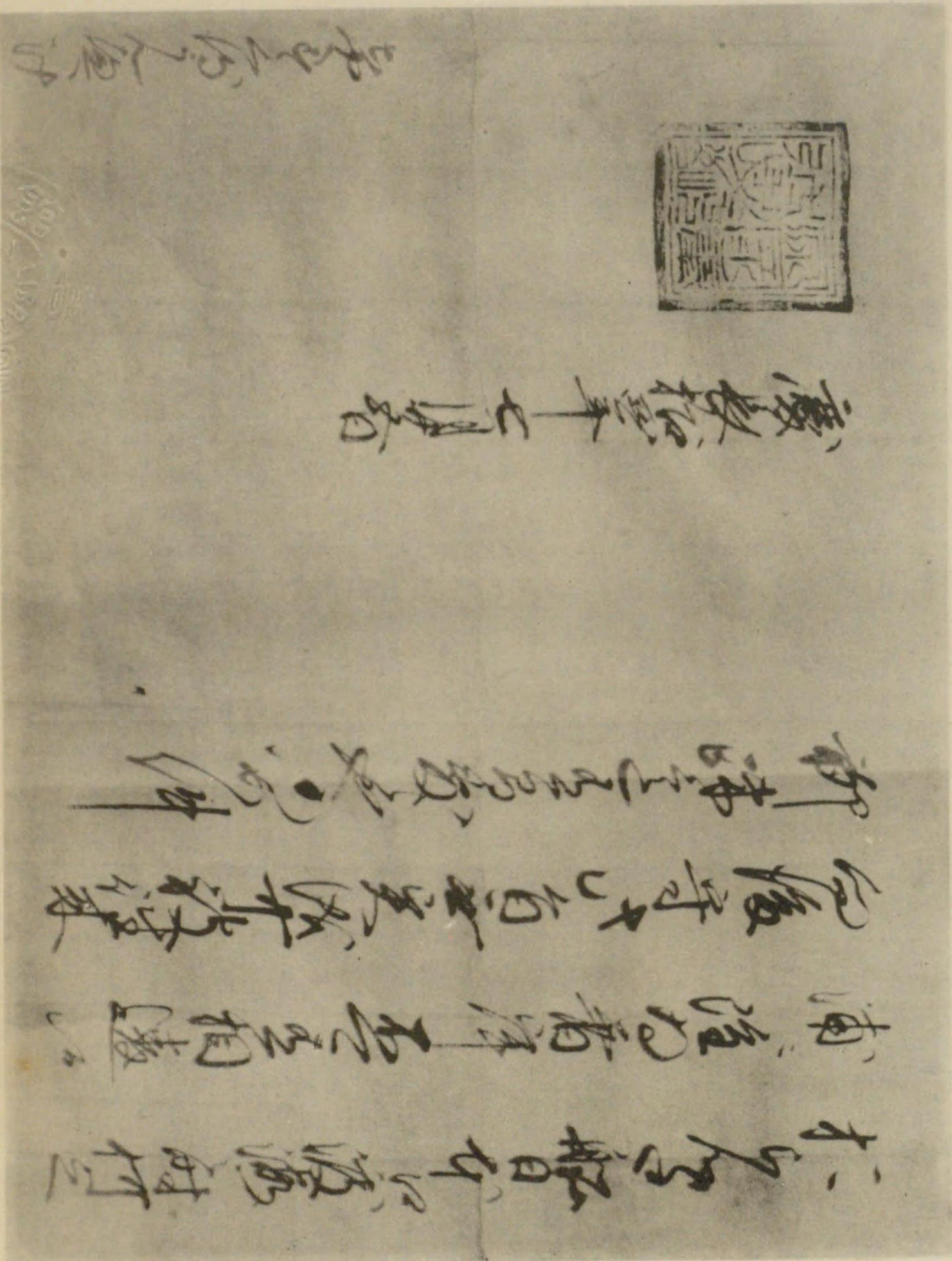
一慶長十三戊申年阿蘭陀船一艘平戸ニ着船ス。船中ノ者申上ルハ、八九年前阿蘭
陀船爲商賣願日本ニ赴シ處、其船行方不相知、諸方ヲ尋ルニ、日本ニ在留シ居ル
由承リ傳シ故、今度貴國ニ渡海仕ル由訴之。依之松浦壹岐守方ヨリ言上有之處
江府ニ其船ノ長タル者ヲ可差越旨被仰下。則平戸ヨリ阿蘭陀人ニ警固相添差
上ラル。江府到着ノ上、年來在留ノ阿蘭陀人ニ被引合處、則尋來ル者ナリ。然ル處
ヤンヨウス事江戶表ニ馴居シ故、滯留仕タキ旨相願フニ付、其儘差置ル。商賣御
免ノ事ハ先達テ被差免故、今度御朱印ヲ被下、平戸ヨリ來シ阿蘭陀人頂戴之。

備川家康朱印狀

權現様御朱印之寫

おらんふ船日本に渡海之時、何之浦ニ雖爲着岸不可有相違、向後守此旨無
異儀可被往來聊疎意有間敷也、仍而如件

慶長十四年七月廿五日



追加 慶長十四年七月廿五日阿蘭陀人渡海御朱印

(Jacques (Jacob) Groenwegen)
チャクス、クルウン、ヘイケ

ヤン、ヨーステン
江戸滞留、歸國の
上再渡の際臺灣沖
にて沈溺

此後數年阿蘭陀船平戸ニ着船シテ商賣ヲ遂ケリ。但ヤン、ヨウス、ハ江戸ニ滞留
シ、數年ノ後依願歸國シ、追テ彼方ヨリ日本ニ赴シニ、臺灣沖ニテ破船沈溺セシ
ト也。

英吉利人渡來

一右同前ニ諸厄利亞人モ御朱印頂戴シ、十ケ年餘平戸ニ着船シ商賣ヲ遂ク、其後
數年斷絶ス。

再度朱印被下賜事

秀忠朱印

一元和三丁巳年阿蘭陀人ニ再度御朱印下シ賜ル。又松浦肥前守ニ御奉書被成下
之。

台徳院様御朱印之寫

阿蘭陀商船到本邦渡海之節縱遭風波之難雖令着岸日本國孰地聊以不可有
相違也

元和三年八月十六日

長崎實錄大成 第八卷 再度御朱印被下賜事

Henrik Brouwer

(Henrik Brouwer)
ヘレンイカホロワル

御奉書之寫

松浦肥前守への御奉書

尚以京堺商人も其地に可罷下は間相對次第商賣致は様尤ニは以上
急度申入は阿蘭陀船於平戸前々の如くかゝらん次第ニ商賣致は様ニ可被
成は不及申は得共伴天連之法をろめさる様可被仰付は恐惶謹言

土井大炊頭

安藤對馬守

板倉伊賀守

本多上野介

八月廿三日

松浦肥前守殿

人々御中

阿蘭陀本國之事

阿蘭陀本國 一阿蘭陀本國ハ日本ヨリ極西ニ當リシ歐羅巴洲ノ内ニ有之國都ヲ、アム、ステル、

七州

カ
ー
ラ
ン
ド

ダムト云。其地七州有之、阿蘭陀其一州也。本名拂良底、唐國ニテ和蘭ト稱ス。則ホ
ル、ラン、テ、ノ轉音也。又紅毛番、黃毛番トモ稱ス。其惣目ヲブリ、ン、スト、云テ七州ノ
政務ヲ統掌シム。其任尤重シ。然レトモ其身一代限リニシテ七州ヨリ人品ヲ撰
テ交代セシム。但六州ハ地續キニテゼー、ラ、ン、ト、一州ハ離レタル島也。又一縣一
村毎ニボル、ゴル、メ、ト、ステル、ト、云テ其所ノ事務ヲ執行ナフ役人アリ。

ゼーラント

ゲルデルラント

コローニンヤ

フーフルエイヌル

ライトレキト

フリイスラント

ホルラント

即和蘭也

以上

咬啣吧之事

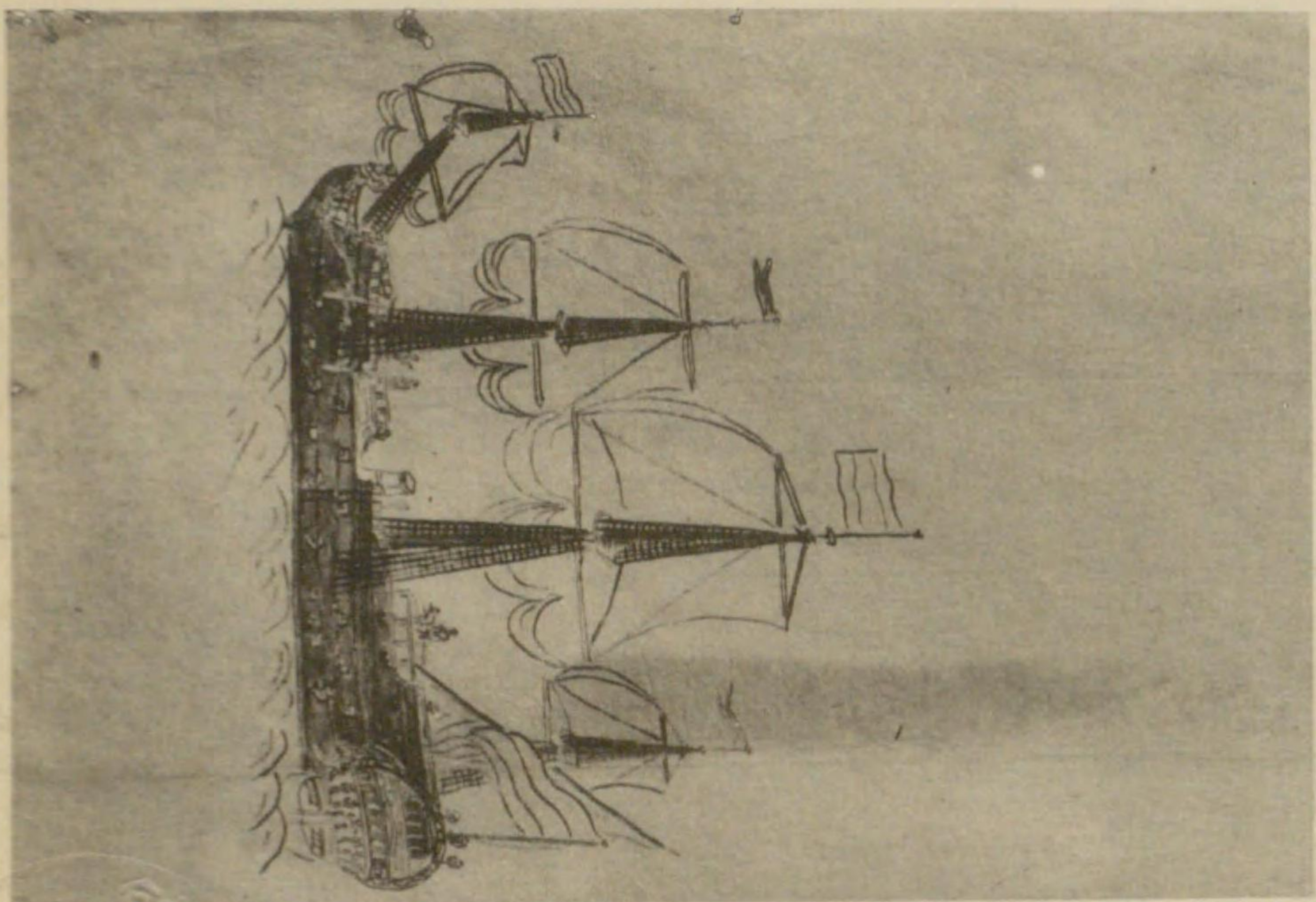
咬^{シヤ}
啗^マ
吧^{タラ}

一南海ニ一大島アリ。其名ヲ爪哇ト稱ス。唐韻ニテシヤ、アト唱フ。蠻語ニテヤ、ア、ハト唱フ。其地最モ廣大也。阿蘭陀人此島ノ内僅バカリノ地ヲ借リテ居住ヲ成シ其地名ヲバタアピヤト云フ。是則咬啗吧ト稱スル處也。此地ニ出張シテ諸國三十餘ヶ處ニ往來シテ交易互市ノ利用ヲ求ル由也。地内ニ城郭ヲ建テ其廻リ凡ソ日本ノ出島ノ廣サニテ四千坪ホト可有之由。頭人赫業喇兒ヲ居置、以下數百人ノ役者ヲ定メ諸事ノ用度ヲ調達セシメ、年々本國ニ商賣等ノ利用ヲ運送セシムル由也。

一阿蘭陀本國ヨリ咬啗吧マテ海上日本ノ里法ニ積リ凡ソ五千九百六拾里餘可有之由也。

但通詞方舊記ニハ一萬五百里有之由書載シ來ルト云ヘトモ、今年老功ノ阿蘭陀船士ニ委細遂吟味ノ處、五千九百六拾里餘可有之由也。

一咬啗吧ヨリ日本マテ凡ソ千八百八拾里餘可有之由也。
但同ク舊記ニ二千四百里有之由書載シ來ルト云ヘトモ、今年遂吟味ノ處千八百八拾里餘可有之由也。



阿蘭陀船圖



諸國圖

附 船役之次第

一 阿蘭陀人座列ノ事、出島ニテハ甲必丹、^カゑとる以下藏^{クラ}役、筆者等商賣勘定方ノ者ヲ次第セリ。船中ニテハ船頭、按針役以下旗役、帆役、揖取等乗船要務ノ者ヲ次第ス。

出島ニテ座列	船中ニテ座列	
ヲツブルホーフト	スケツブル	船頭
テウエーデベルソーン	ステユールマン	按針役
デスベンセイル	コムスターブル	石火矢打
バツクホイスメーステル	フラツカマン	旅役
ヲツブルメーステル	フラツカナ、井	旅縫
ランドルメーステル	セイルマーカル	帆役
シヤカターリス	テインムルマン	船大工
アシステント	ヲヒシイル	船役
		下等者

テイナムルマン	大工	アンカルゴ一井	楫取
スミツテ	鍛冶	ウ井ントケン	風見
コイフル	桶屋	マタロース	水主
スワルトヨンゴ	黒ボウ		

交易往來之諸處里數產物之事

交易往來諸處、里數、產物

グルウンラント 人不住 日本ヨリ一萬五千三百里程
 北方極邊ノ地ニテ夏至ノ節前後半年ハ晝ト成リ冬至ノ節前後半年ハ夜國ト成ル。冬月寒風烈クシテ波濤高ク起リ其潮水堅キ氷トナリ岩窟ノ如シ。故ニ氷海ト稱ス。春夏ノ暖氣ニテ氷解テ潮水ト成ル。此海中鯨魚多シ。然ルニ冬月此海中ニテ生育成リ難キニヤ。秋分ノ末ヨリ鯨魚南海ニ移リ行テ春分ノ初北海ニ歸去ル。其時節日本諸處ニテ鯨魚ヲ捕テ利用トス。夏月蠻人モ此處ニ到テ鯨魚ヲ捕テ膏油ヲ熬煎シテ治療ノ藥用ヲ求ルト云云。
 ノウルウイキ 同 一萬三千五百里程
 土產 鐵 船ノ柱

スヘイデ	同	一萬三千三百八十里程
土產 銅 鐵 碓 材木 石火矢 船ノ綱		
テイヌマルカ	同	一萬三千三百八十里程
土產 銅 鐵 石火矢 材木 麻苧		
ムスカウヘヤ	同	一萬四千百里程
土產 琥珀 五穀 畜類ノ皮		
ポウル	同	一萬三千六百五十里程
土產 琥珀 五穀 畜類ノ皮		
ドイチラント	同	一萬三千百四十里程
土產 金 銀 水銀 水晶 五穀		
フランカレイキ	同	一萬二千八百里程
土產 絲織物 金巾類 酒種々		
トルケイン	同	一萬千二百五十里程
土產 毛織物 絲織物 金入織物 金巾類		
ケチイ	同	八千四百里程

校訂者云ふ
原文イスハラシカ
とあり。訂正す

ブラセリヤ 同 七千五百里程
 土産 材木 黑檀 砂糖氷、白 煙草黒
 カアブデボーナイニスベランサ 同 六千三百里程
 土産 虎 犀 牛 鹿 猪 駱駝鳥
 マロカ 同 千七百里程
 土産 錫 米 獸類 胡椒 燕窩
 ヘイグウ 同 二千六百四十里程
 土産 亞鉛 阿仙藥 象牙 米 漆
 アラカン 同 二千九百四十里程
 土産 金 米 蠟 綱 象牙 麻苧
 ベンガラ 同 三千三百里程
 土産 麝香 牛黃 阿片 鹽硝 天蠶絲 礪砂 阿仙藥 辨柄絲 海黃
 アレシヤ島 奧島 ギガン 算崩島 金巾
 コストコロモンデイル 同 三千里程

土産 デヤマン 鮫 奧島 金巾 コンデレキ サラサ
 マルバアル 同 三千七百五十里程
 土産 猩々緋 血止血 武道具色々
 ハルシヤ 同 五千百里程
 土産 金入織物 花毛氈 ハルシヤ皮 蘇合油 乳香 甘草
 サラアタ 同 四千五百里程
 土産 玲珠 瑪瑙 郡青 紺青 雌黃 乳香 木香 阿仙藥 安息香
 蘇合油 丹土 鮫 奧島 マタフウ島 コンデレキ 金巾類
 キガン サラタ島 花毛氈 胡黃連 紫梗
 モワ 同 六千里程
 土産 絲織物色々 血竭
 シヤムロウ 同 二千四百里程
 土産 錫 鮫 蠟 漆 藤 象牙 水牛角 犀角 牛皮 鹿皮 血竭
 檳榔子 蘇木 鬱金 椰子油 大楓子 黑砂糖 花毛氈
 トンキン 同 千五百里程

其外諸處出產ノ品ヲ買調ヘ日本ニ持渡ル

阿蘭陀着津平戸ヨリ長崎ニ被移事

一 寛永十八辛巳年爲、上意向後阿蘭陀船長崎湊ニ可令着船旨被仰出之。但去ル慶長十三年ヨリ寛永十七年迄三十三ヶ年平戸ニ着船シ去冬如例阿蘭陀人江府爲拜禮平戸ヨリ令出達之處今度右之通被仰出ニ付拜禮相濟歸路直ニ長崎ニ來着セシメ出島屋敷ニ令住館ラル。

甲必丹名 カヒクシ マクスカメリヤアンマイラ

平戸ヨリ附來ル通詞

西 吉兵衛 名村八左衛門 志筑孫兵衛 横山又兵衛

石橋助左衛門 肝付伯左衛門 横山與三右衛門 高砂長五郎

秀島藤左衛門 貞方利右衛門 猪股傳兵衛

同年入津ノ阿蘭陀船九艘直ニ長崎湊ニ着船セシム。則寛永十五年御制禁成シ南蠻人其節マテ住セシ出島ノ地明キ屋敷ト成シヲ此時ヨリ阿蘭陀人住館ニ被仰付之

マクスカメリヤアンマイラは誤。蘭通詞中山作三郎書留に「まさしいら」あり。Maximilian La Maireに該當す。西吉兵衛は元來長崎居住、平戸より來住せるに非ず。志筑孫兵衛の長崎に來りたるは寛永二十年なり。

江府拜禮之事

平戸在留當時江府拜禮

寛永十八年長崎出島へ移りし以後の江府拜禮

正保四年南蠻船入津のこと豫め注進せざりしこと拜禮を許さず

上使井上筑後守新古兩甲必丹へ南蠻船渡來を豫め注進せざりし事情を質す

目明忠庵

一 阿蘭陀人平戸着船ノ内松浦家ヨリ馬廻リ侍一人徒步一人通詞其外人數相添前年冬中平戸ヨリ出達シ翌正月御禮相勤ル。寛永十八年長崎ニ引移、以後御奉行所ヨリ爲檢使與力同心町使、通詞以下數十人相添前年冬中長崎出達シ、江府ニ着、翌年正月御禮相勤ル。

一 正保四丁亥年六月南蠻船二艘當津ニ入船ス。其年如例冬中甲必丹ヘンテレキ。コエタ江戶表ニ參着之處、年來御制禁ノ南蠻船當夏日本ニ渡來ル事聞及ニ於テハ即刻可令注進之處其儀無之不届ノ至也トテ拜禮不相叶、献上物等御受用無之、長崎ニ被令歸之。

一 慶安元戊子年甲必丹テレキ。スノク渡來ル。此年上使井上筑後守當表ニ着駕アリ。新古兩甲必丹ヲ召レ、去年南蠻船渡海セシ事、目明忠庵ヲ以稠シク被遂御穿鑿ノ處阿蘭陀人曾テ不承、及決テ存掛ケモ無之趣横文字ノ書付一通和解相添差上ルニ付、筑後守江府ニ持參有之。此節迄ハ御禮御免無之故兩甲必丹共ニ長崎ヨリ直ニ歸國ス。

明年より江府拜禮
許可
Pieter Prinsius

筑前鐘ヶ崎海上に
て難風に遭ふ。爾
後長崎より小倉迄
陸路、下關より大
坂まで乗船

江戸 大火

寛文元年より正月
十五日長崎出立、
以後定例となる
享保十八年の飢饉
と参禮

一 右之通兩年御禮不相勤之處、筑後守、甲必丹共御詫言ノ書付ヲ於江府御披露有之、蠻船之事阿蘭陀人方ニ決シテ不承及之段被爲聞召分。仍テ明年ヨリ如例御禮可相勤旨御免有之。然ル處慶安二己丑年甲必丹ボロンコス渡海セリ。猶又今年赫業刺兒方ヨリ使者船フレイジユス渡來ル。則江府拜禮御免ニ付、其冬中甲必丹使者ト同道ニテ江戸表ニ參上シ、翌年正月御禮相勤ル。使者ノ事後條ニ見ヘタリ。

一 萬治二己亥年歸府ノ阿蘭陀人乗船筑前鐘ヶ崎海上ニテ難風ニ逢ヒ陸地ヨリ歸ル。是マテ往來共ニ毎年平戸廻リ筑前海上乗船セシ處、其翌年ヨリ長崎ヨリ上下小倉迄陸路ニテ下ノ關ヨリ大坂マテ乗船スルノ例ト成ル。

一 明曆三年、萬治元年、同三年、正月ノ内江戸火災有之、阿蘭陀人在留ノ旅宿打續キ三度類焼セリ。依之向後正月中長崎ヨリ出達シ、二月ノ内江戸ニ可令參着旨被仰付、翌寛文元年ヨリ正月十五日長崎出達ス。以後定例ト成ル。

一 享保十八年前年西國筋蝗入飢饉ニテ道中人馬等不便ナルヘシトテ四月十五日阿蘭陀人長崎出達シ、五月中江府ニ參着シ御禮相勤七月當表ニ歸着セリ。

南部ヨリ阿蘭陀人被差送事

紅毛船南部へ漂着

一 寛永二十癸未年阿蘭陀船一艘奥州南部浦ニ漂流シ小船ニ拾三人乗リ陸地ニ水取リニ揚リタルヲ其地ノ役人搦捕之、江府ニ被差送處御扶持等被相與御馳走ヲ加ヘラレ差置ル。則其年拜禮ノ甲必丹ヲ被招呼、通詞志筑孫兵衛通辨ニテ被遂御詮議處、彼阿蘭陀船咬嚼吧ヨリ乗出シ洋中ニテ逆風ニ逢ヒ無是非南部浦邊ニ漂流セシ由、其訣分明ナル故甲必丹ニ相渡サル。但此節諸大名家ニ御奉書被成下之。

諸大名へ御奉書

當年異國船奥州之浦ニ就乘廻ヒ、於南部浦ニ被相尋ヒ處、阿蘭陀船遭風波之難漂海上之由依申、則召寄途穿鑿彌申分無紛ヒ。因茲長崎かゝるんを呼寄詮議ヒ處、彼船之やぶらと申所々出で伴天連並切支丹宗門之族不乘來段、慥ニ申ニ付而被聞召分、以來自然遭難風日本之内何之所ニ相着ヒ共無氣遣揚陸地、其所之守護人ニ申斷、船中人數をも改させ可申之由念入返遣ヒ。然之向後若御領内浦ニ阿蘭陀於着岸者改之其船ニ船番之者を附置様子具ニ可注進旨、上意ニハ不及申、得共阿蘭陀儀は御代々日本令渡海商賣仕事以間守右之趣若斷申ハ、搦捕リ又之打擲等不致様ニ可被入念以上

未 十二月二日

阿部豊後守

松平伊豆守

カウクマンはカウ
フマンの誤認む
但し人名に非ず。
koopmanに該當
し商事役を意味す
スメツケルテはス
メツテの誤認む

使節フリシユス

此節甲必丹申上ルハ年來貴國ヲ頼ミ奉リ渡海仕ルノ處彼者共迄御憐愍を蒙
リ難有仕合ノ趣、歸國ノ上赫業刺兒ニ申聞彼方ヨリ以使者御禮可申上旨、右拾
三人ノ内カウクマン・ピルベル、火矢打ユリヤン、外科カスフル、ヤン・スメツケル
テ五人ノ者ハ當方ノ者ニ稽古可被爲致由ニテ江戸表ニ滞留被仰付、残り八人
ノ者長崎ニ連レ歸ル。
一慶安二己丑年赫業刺兒方ヨリ先年南部漂流ノ阿蘭陀人共御厚恩ヲ蒙シ爲御
禮使者フレイシユス着船ス。其年冬爲參府出達ノ甲必丹ポロンコス同道ニテ
江戸表ニ參上シ、翌正月御禮相勤ル。但先年ノ甲必丹ハ奧國ニ渡リ、其節ノ赫業
刺兒モ別人ニ代リ、彼是及延引由。
去ル寛永二十年ヨリ當年迄八年ノ間江戸滞留ノ阿蘭陀人五人共ニ此度長崎
ニ連レ歸ル。志筑孫兵衛ハ通辨分明ナリシ爲御褒美三百俵拾人扶持被下置處
依願於長崎通詞役被仰付御扶持方ハ相離ル。

出島屋敷修造之事

出島築立

一寛永十一甲戌年出島屋敷ヲ新ニ修造アリ。其根元全ク阿蘭陀人所住ノ爲ニ非
ス。是迄南蠻人長崎町宿ニ居テ諸人ト會合スル故邪宗門ノ種類斷絶スル事無
之。依是市中ヲ離レ海中ニ出島ヲ築キ屋敷ヲ建蠻人ヲ在住致サセ商賣用向ノ
外一切無用ノ者出入ヲ堅ク可停止旨被仰付。其節當表町人二拾五人ノ者普請
料ヲ出シ家宅土藏等ヲ造作シ蠻人方ヨリ宿代ヲ受用スヘキ旨願之通被差免
寛永十三年普請成就シ蠻人共在住シ宿代銀八拾貫目ヲ町人二拾五人ニテ配
分セリ。則大門ニ定番之者二人宛相詰蠻船在津中ハ町使二人宛加番相勤シム。
一寛永十三丙子年ヨリ同十五戊寅年迄南蠻人出島ニ在住三ヶ年ニ及シ處前年
丑十一月頃ヨリ天草島原ノ郷民算蜂起シテ及籠城處翌寅二月一揆悉ク誅戮
セラル。然レハ蠻人共日本ノ地ニ差置ル、事甚以不可然ノ旨ニテ當年上使太
田備中守長崎ニ被差越南蠻人日本渡海一切爲嚴禁之旨被仰渡、在住ノ蠻人不
殘被令歸國之。此時出島明屋敷ト成ル。然ル處寛永十八年平戸ヨリ阿蘭陀人ヲ
長崎ニ移レシニ付、則右ノ出島ヲ阿蘭陀人住館ニ被仰付之。

上使太田備中守南
蠻人渡航嚴禁を申
渡す
寛永十八年紅毛人
平戸より出島に移
る

南蠻人出島に限り
在留を許さる
宿代銀八拾貫目

出島境内軒敷土藏數等之事

長崎實錄大成 第八卷 出島屋敷修造之事 出島境内軒敷土藏數等之事 三〇五

出島境内軒敷土藏
地數 子銀

一出島屋敷惣坪數三千九百六十九坪一分爲地子銀壹貫六百七拾三匁一分三厘
宛年々上納ス。

惣廻リ塀 二百八拾六間二尺九寸

南側 百拾八間二尺七寸 北側 九拾六間四尺九寸

東側 三拾五間四尺五寸 西側 三拾五間三尺八寸

町筋長 百拾一間 幅 一間半

西方荷役場水門築出シ 堅拾五間 横六間

軒敷二百四間九合二三 乙名屋敷共ニ

軒敷二拾一ヶ所外家藏並番所小屋共ニ八拾五間 四人二係五人ニテ

公班衙藏 協荷藏 水門御檢使場

御用藏 札場御檢使場

乙名部屋 通詞部屋 阿蘭陀臺所

町人番所

花島涼所 本門番所
辻番所 火消道具置所
不寢番所 伊萬里見世小屋道具入
風呂屋 鳩小屋

宿 賃 銀

宿賃銀 十五拾五貫目 阿蘭陀人年々差出之。

但壹間ニ付平均二百六拾八匁三分宛

軒敷二拾五ヶ所 町人二拾五人配分之。

出島 高札

御高札

定

日本人異國人御法度背キ不依何事惡事をたくミ禮物を出し頼ル者有之は
急度申出へし。縦同類たりといふ共咎をゆるし其禮物之一倍御褒美下さる
へし。若隱置訴人有之ニおゐてハ可處罪科者也

卯

十月 日